

910.28-Mu71-2㉔



1200500754606

0.28

u71

2㉔

×

複写



始



241222

910.28

Mu71

2

室生犀星編

芥川龍之介の
作と人

上巻

現代叢書

40



W
TM
S

953
165

953
165
X

目次

澄江堂雜記 三

一 芥川龍之介氏の人と作 三

一 彼、人 三

二 文人 八

三 流行とは 一〇

四 詩的精神 一三

五 自分と彼 一五

二 芥川君と僕 一八

三 清朗の人 二二

四 芥川龍之介氏を憶ふ 二四

五 憶 芥川龍之介君 三〇

六 金澤に於ける芥川龍之介氏 四〇

七 龍氏作品の解説 四

八 深夜の人 五

發句に就て 七

發句 八

短歌に就て 八

短歌 八

詩に就て 九

詩 一〇

「芭蕉雜記」に就て 一六

芭蕉雜記 一七

續芭蕉雜記 一八

「文藝的な、餘りに文藝的な」「西方の人」「十本の針」に就て 一五

文藝的な、餘りに文藝的な 一五

續文藝的な、餘りに文藝的な 一八

侏儒の言葉 一八

西方の人 二〇

續西方の人 二六

十本の針 三三

「白」について 三六

白 三九

芥川龍之介の人と作 上卷

澄江堂雜記

一 芥川龍之介氏の人と作

一 彼、人

芥川龍之介か佐藤春夫の孰方かの碎けた評論めいた人物印象を大部のものに書いて貰へないだらうか、左ういふ中村武羅夫氏からの依頼を聞いて、自分は佐藤春夫は萬年青年であるし今鳥渡書く氣がしないし適當とは思へない。芥川龍之介はまだ料理したことのない鮫のやうなもので、自分の俎に乗るかどうかは疑はしい。自分はむしろ秋聲先生に俎の上に乗つて載かうと思ふのであるが、中村武羅夫は是非芥川龍之介論の方をと言ひ、自分もその氣になり引受けたのである。一體芥川龍之介論とは何の事だらう。自分は不意に演説を指摘されたやうにまごつく、——芥

川龍之介といふ小説家を君は知つてゐるかね、田端にゐるんだが會つたら面白いかも知れんよ、左う云うたのは今から十年前の萩原朝太郎であつた。此間詩集を送つたら手紙を呉れたが今度歸京したら會つて見たらどうかと、彼の故郷前橋で私の最も親懇な萩原の口から、印刷にならない芥川龍之介といふ名前を初めて聞いたのである。併し私は彼の前に當時は意氣軒昂の概を示し鳥渡胸を反らし乍ら云つたものであつた。「小説家に態々こちらから訪ねて行くのも不見識ではないか、我々は左ういふことまでして交際をする必要がない。」萩原は當時既に谷崎潤一郎を知つてゐたし、何かの紛れにも能く此谷崎潤一郎といふ拓本のやうな名前の感じを、私の前に話してゐた矢先で少々私は胸くそもので小癩に障つてゐた。私はといへば交友に有名な男がなく其意味で萩原は既に一家の交詢的な周圍を有つて些か私に當つたものであつた。「一體小説家といふものは氣に食はん」私はともすると議論めいて來る彼の鋒先を避け乍ら、小説家といふものを目の敵にしてゐたので、芥川龍之介などに會ふもんかと思ふのであつた。

自分が初めて芥川に會つたのは日夏耿之介の詩集の出版記念會であつた。圓卓の向うに自分は紹介された芥川の顔を見ると、直ぐ此種の端正な顔貌自身から來る引身を、逆に何か苦手な氣の合はない人間のやうな氣がした。が、其歸り途に一緒に歩き乍ら色々の話をすると、樂な親しみ易い打解けたところのある、寧ろ碎けた人のやうに思はれた。その翌々日だつたか彼の書齋を背景

にしてゐる彼を見て、處狭いまでの書物の堆積や談論の自在な彼を打眺めて、戲談まじりの話をしながら却て歸途にはそれにも拘らずひどく陰鬱な氣持であつた。今から思ふと自分は彼に抵抗する精神的武器がなかつたらしく、それが自分であれば彼等に陰鬱に考へ込まなかつたであらう。何と云つても自分はまだ市井破垣を結ぶの一詩人であつた。しかも一詩人の威力を打通すだけのものが自分の胸中を貫いてゐなかつた。それに幸か不幸か芥川は餘りに自分の前であけすけに話してくれたのが、一際自分を陰氣にしたのだらうと思つてゐる。人間は時に屢々自分以下のものには樂に碎けることを愉快に念ふものだが、彼の碎け方はその氣持の上で種類が違つてゐるやうだつた。對手を窮屈がらせない一種の座談に慣れることに據つて、爲されたそのやうにも思はれた。當時の世間知らずであり文壇めくらであつた私が、彼と對坐しただけで遺憾ながら彼を自分以上のものであると云ふ、心からの承認では無かつたとは云へ、徐ろにその臆氣なものを感じたことは拒めなかつた。自分は春夫が最初谷崎潤一郎を嫉視した氣持を、今から思へば多分に雜へてゐたのである。有名に對抗する故なき嫉視と憤怒に似たものを白面一介の彼に感じたとは、私のこれまでの生涯に於て北原白秋と同様のものであつた。北原白秋に會つた最初は二十歳だつただけに、羽根が立たぬやうな自分でもあつたからいいとしても、彼の場合には自分は既う二十九にもなつてゐたから、刺戟や壓迫などと云ふ生優しいものではなかつた。自らを鞭打

つ激情に似たものを彼から感じたのだつた。自分は三四回目に出つた時は「幼年時代」といふ小説をひそかに家にて書いてゐて、彼にその話をして、見てくれるかどうかといふ意味を、恰もお世辭に似た心からでない曖昧な氣持で彼に述べたが、彼は一寸慌てたやうにいや僕の如きはとか何とか云ひ、すぐその話は素早くよそに逸れてしまつた。その時自分に應酬する彼が談偶々小説に及んだことで、彼の面にかすかな迷惑らしいものが掠めたことを自分は感じた。(後に考へると彼の當惑らしい表情はだしぬけに云つた自分に感じたのは當然であつたが、その當惑の戸を叩きこはすことのできない自分だつたことにも氣がついてゐた。人間は時に屢々自分を叩き上げるために對手の當惑の戸を叩きこはさなければならぬものだ。自分はあの時この友の當惑を締め上げて置いたら、彼とは別な意味で種々のものを攝取できたらうと思つた。)

その後自分は彼をたづねたが最初に受けた印象は渝らなかつた。その日の都合でいい加減なことを云ふ男でないことが判つた。唯、彼の物の云ひ方に或高飛車があり、それが彼の場合非常に自然に受取れるのが不思議である。おもに批評的になる話題にそれがあつた。——すつと後、震災後金澤へ來た時に或老俳人の前で、彼は北枝の句のことなどを土地柄であるとは云へ話し出したりした。後で私の畏敬する老俳人は芥川といふ人物に感心して、金澤へ度々人も來たが、あれほど若くてしつかりしてゐる男は初めてだと感服してゐた。自分はその時も紹介甲斐のある點で、

彼の人物を釋明する必要がなかつた。しかも老俳人はまた彼の一作をも讀破してゐなかつたのである。

自分に彼を紹介した萩原朝太郎が上京して田端に住むころには、却て芥川に萩原を紹介するやうな顛倒した位置と役目に私はゐた。萩原は芥川に會へば議論もするらしいが、私と萩原との趣味が一致しないやうに、芥川と私との生活振りは全然違つたものだつた。一緒に旅行してゐても私は晩は九時から十時に寝に就き、彼は夜中の二時三時といふのに煙草のけむりの中に起き上り何か書いてゐる。私が朝の散歩から戻つて來て仕事に取り掛る頃は、彼は漸つとむづむづと床から起きるのであつた。彼は少く敝かい物を食ひ、私は多く固いものが好きだつた。彼は手當り次第に讀み私は嫌ひな物は一切讀まなかつた。彼は滅多に人見知りや露骨に色に現はさない東京人であるのに、私はがりがりした露骨な田舎人の粗暴と人見知りとを持つてゐた。彼は話好きで夜更しを平氣で遣り私はその反對の方の人間であつた。彼は芭蕉を五年もさきに讀み上げ一と通り卒業してゐたが、私はやつと此二三年身を入れて讀み出す位だつた。唯一つ陶器だけは一步先をなくらぬで何事も私のよくつかふ文字であるが残念乍ら先きに歩いてゐた。全く残念乍ら！人は芥川龍之介の有名に反感はもつとしても、彼の人物にはさういふものを持つことはできぬであらうと今でも思うてゐる。

二 文人

龍之介は數十句の發句を窺かに篋底に秘藏してゐる。龍之介の自ら元祿の古調にならうてゐる所以のものは、單に古きしらべに従いてゐるのではなく、巍然たる元祿の流れを汲んでゐるのである。碧梧桐以後に幾度となく波瀾重疊した俳壇の諸公から見れば、彼の發句は一見陳套の嘲を買ふかも知れない。今更蕉風に低迷しなくともよいではないかと、彼等の内の精英は云ふかも知れぬ。併乍、龍之介のねらひは元祿諸家の古調や文章去來のさびしをりを學んでゐる譯では無い。ただ叮嚀に蕉風のねらひを今人の彼が心に宿してゐるだけである。彼は元祿人が引いた弓づるのその的を最と強く引いてゐるに過ぎない。

今の文壇に文人の風格をもつてゐるものは永井荷風を別格としたら先づ漱石以來では芥川龍之介や志賀直哉であらう。彼が發句を詠み書畫骨董の鑑識を有つてゐると云ふだけで文人だといふのではない。心から文人の好みを持つてゐるからである。氣質が既に縹渺や古實や詩情を交せて宿してゐることだ。芥川はその古さの中に新しさを搜る鋭い爪を有つてゐる。芥川の爪は時に閑暇を得るときに木の肌や人事の縹渺の中に搔き立てられてゐる。鷲や鷹の爪ではなく、黒鷹のやうな精悍さを有ち合つてゐるやうである。

龍之介の發句を無用の長物であるといふ俳壇の古武士があるだらう。彼等を思ふとき此無用の長物をも併せ思はねばならぬとしたら、また彼等が均しく藝術の士として後世の筆端に煩はされるところしたら、先づ此無用の長物をも見送さないうであらう、彼等を見る上に之等の詩や發句は有益の文字であることを、後世の輩は感じるかも知れない。

夏目漱石は完全な渾一された好個の文人であつた。あらゆる意味での文人の心意氣や典型を有つてゐた。漱石を文人の外のものとして考へたくない程の、彼を論ふ上の必要の文人だつた。だが泡鳴を文人だといふことはできない。詩をも書いた彼を文人として曲指するに躊躇するのは、がらと質とに何か叛いた文人以外の氣持が混つてゐるからであつた。漱石の文人的なるものの感化は、また金釧を胸に飾つてゐたころの芥川にあつたのは當然のことである。又或は進んで漱石の感化裡に飛び込んでゐたかも知れない。併し彼はそのままでは決して頂戴はしなかつた。彼は彼らしく修正し補足したにちがひない、——その證據にはあれ程大文人であつた漱石の發句は、折々光つたものを見せてはゐるものの、全幅に枯寂の佛を缺いてゐるばかりではなく、遺さなくともよい程の拙い句を残してゐることを考へると、漱石は悪い句も棄てなかつたらしく思はれる。或は句集編纂者がためらひに蒐集したのかも知れないが、ともあれ彼ほどの大家の發句として残さずともよい句が可成りに多數に上つてゐるのは、漱石が棄てなかつたことに原因してゐる。あ

らゆる發句は棄てなければならぬ。心残りなく棄てなければならぬ、——その意味で吾が龍之介は棄てることの名人であつた。或は彼は發句を棄てることに於てより多く名人であつたかも知れなかつた。彼の潔癖ときづものを厭ふ氣もちが左うさせたことは勿論であるが、何よりも彼は棄てることに於て元祿の芭蕉を學んだのかも知れぬ。

紅葉の句の拙いことは鏡花にまで影響してゐることは、彼等には巍然たる山脈の光茫を握つてゐないからであつた。漱石は子規時代の何人も其様であつた如く、天明の豪邁な調子に乗り合つてゐた。子規が蕪村を出られず漱石が子規の間を彷徨してゐたことも仕方のないことであつた。何故彼等が一足飛びに元祿の豐饒な畑に種子を拾ひ得なかつたかと云へば、彼等の時勢が天明調以外に芭蕉の光輝すら幽かに漏れる夜半の明りほどにも、頼りない仄かなものであるらしかつたからだ。その時勢は芭蕉すらも月並といふ言葉の中にあしらはれてゐた時勢だからである。

三 流行とは

芥川龍之介は宜い加減なものを書いてよいときにさへ、(若し憊う云ふ言葉があれば、又假りに彼にさういふ機會があつたとしても)嘗てその手綱を弛めたことがない。焦らずゆつくりと作家としての峠にゐる彼である。世に出たときにさへ谷崎潤一郎のやうな烈しい喝采を博した譯で

はない。少しづつ讀者を年々に緊めつけ年とともに數を殖してゆくやうな彼である。浮薄な讀者の間に忘れてゆくそれではなく、彼を讀むものはそのまま彼のまはりには何時までも群れ寄つてゐる。「芋粥」から「玄鶴山房」まで餘り讀者は渝らないやうである。かういふ作家といふものは稀にしか無い。これは彼の人徳ではなく彼の緊め付け方が信じられてゐるからである。昨日の讀者は今日の讀者ではなく、讀者は作家の二倍くらゐの速力で進みもし先きにもゐるものだ。それを彼は知らん顔で踏まへ留めてゐることは、地味なしかも渝らない不斷の流行を擔うてゐる所以であらう。すくなくとも讀者の心に信じられてゐるからだ。

谷崎潤一郎や里見弴の人氣には能く觀ればまだ浮いた人氣がないでもない。彼等は明るくて常に一種の「華美」な雰圍氣の中にゐるからである。併乍、志賀直哉や芥川龍之介や徳田秋聲には浮いた人氣は終熄してゐる。それは人氣以上のもので人氣と名づけられない單にいい作家とだけ稱すべきものかも知れぬ。——彼、芥川龍之介の場合はいい加減な作を作らない所以、彼の苦澁が彼を何時までも揺がせない。強ひて云へば小憎らしい不斷の流行を負ふに原因してゐるかも知れぬ。自分の如きは求められるままに濫亂の作を市に抛つに急であつた爲に、今日の「我」をして悲しみを大ならしめた所以だが、人は志を更める恥を知るものではない。彼、龍之介の今日あるは又自分の大いに學ばねばならぬものだと思つてゐる。語を換へれば彼ばかりの場合でなく

一國一城の各作家の弓矢や楯や兵法や築城には、それぞれに學びそれぞれに教はらねばならないものの多くを自分は感じてゐる。分けても彼の氣鋭は「羅生門」「芋粥」の時代から何時も同じい芥川龍之介の地盤を固めてゐる。未定稿のまま「大導寺信輔」を書いた頃から作を絶つてゐたものの、却て今年になつてからぐつと伸び上つてゐる。何時も燃えるやうな拍手喝采のそれではなく、何時も何か彼は讀者との間に信じられてゐるやうである。

四 詩的精神

詩のある文章や小説といふものに冷笑を感じてゐることは、久しい間の自分の偏屈な而も誠實な習慣であつた。詩のある小説とは美しくだらだらと宜い加減の文章の綾や曲折を綴り合うたものだとしたら、又世の批評家諸公の謂ふところのものであつたら、自分は彼等に根本的に詩を説明してかからなければならぬ手敷と厄介さを感じるだけである。

詩的なるものとは文章の表面ではなく、行と行との間と字と字との間に、棚引く縹渺たる作者の呼吸づかひや氣魄や必逼的なものを云ふのだ。芥川の文章の中にいつも此縹渺たる何物かがあつるのは、諸君の知悉せらるるところであらう。志賀直哉は實に際どいところまで行くが、いつも清らかで美しい。「行路」や「紅い帯」其他女中を書いたものにそれがある。併乍、芥川の脈

脈たる縹渺がない。芥川はいつも何か青い煙を感じる程度の、彼自身の文章のやうな氣魄や肉體を有つてゐる。「枯野抄」の縹渺は今から彼自身を見ても、枯寂な一個の魂に對する詠嘆としか思はれないであらう。彼は充分な縹渺や枯寂を「枯野抄」では表し得なかつたと云つてよい。去來文章の諸門弟を一々描いただけで、それだけの彼のねらひが餘りに「その空氣」を表すに道具立が多かつたと云つても過言では無からう。併乍、大正四年代に悠々として「羅生門」を書き、越えて七年に枯寂な「枯野抄」を描かうとした彼の用意は並一通りのものではない。彼は實に樂しみながら古實から新鮮を掘り當ててゐる。或は彼は彼自身樂しく書いてゐないと云ふかも知れぬ。何人も作者は呻吟するが故に愉しんでゐないと云ふのが眞實かも知れぬが、併し呻吟し乍ら愉しんでゐないとは云へない。「藪の中」にすら彼自身愉しみ乍ら運命のはらわたを搔きさぐつてゐる。彼の作の凡てがさうのやうに此作も横縦から油斷のない手法で矢繼早に固めてゐる。而も此中の女の美しさは異常なまでに感じられるのは、強ち物語の稍々うがち過ぎたためでは無からう。

何よりも彼は前人未到的な物語風なものに凝つたのも、彼の唯一の好みばかりでなく彼の聰明な文學的發足點であつたのであらう。そして此種の物語風な作品は不思議に今から思ふと、大正文壇の記録的な作品の種類に這入つてゐる。再びあゝいふ種類の作品は我々に必要のない程度ま

での、それ程肝腎な一小説體を爲してゐることは特記してよい。自然主義以來藝術的な物語風の小説としては、彼の諸作品は重きを爲すことは當然である。

彼は最近物語風なものから脱けようとするほど、彼は彼の文學的過去に於て物語の作家であつた。どういふ作品も物語の範圍は出てゐない。それ故何時讀んでも退屈を感じない文字通りの小説的の効果を讀者は受け味ふことができるのだ。彼が可成り高踏的な作家であり乍らも、なほ通俗的な所以のものは一つには此物語風の姿を有つてゐることであり、話と筋とが透つてゐるためであらう。そして此種の作品が後世の識者を問ふとしたら好個の「記録的な作品」として評價されるに違ひない。

今の文壇で漱石鷗外のあとを繼ぐもの、彼ら以外の大家として残るものは何人であるか分らない。併し我々の頭を去來するものは残念乍ら芥川か志賀かその執方かであらう。谷崎は國寶的作家であらうが、漱石鷗外と併稱さるべきものではない。國家は稀に取止めもない建築や器物に國寶の冠を與へると一般なものを、我々は谷崎潤一郎に感じることも無いでもない。しかも今は何となく大谷崎の大的字を與へられる作家は、芥川や志賀ではなく、實に大谷崎潤一郎だけである。併乍、漱石鷗外の後繼的氣分を我々の文學的爐邊にしばしば語られ醸すところのものは、龍之介と直哉とでなければならぬ。

五 自分と彼

自分と彼とは僅か七八年くらゐの交際に過ぎない。しかも其間に自分は彼から種々なるものを盗み又攝り入れたことは實際である。彼は残念乍ら一歩づつ先に歩いてゐるからである。或は一歩どころではなく十歩くらゐ先方を歩いてゐたかも知れぬ。或は田舎の辯で用途を満してゐる低槽かしさを、東京に生れた彼が東京辯で用を辨じてゐる速力の相違であつたかも知れぬ。

萩原朝太郎が此間室生犀星論を三十枚ばかり書いて久淵を叙する意味で自分に示して呉れた。自分の市井生活の荒唐無稽を露骨なまでに曝き、「この頃の取澄した」自分を粉碎し又理解した文章であつた。その中に私と芥川とを批評して恚ういふ意味のことを云つてゐる。「彼が芥川龍之介と知り合ひ彼等が均しく慇懃であるのは、兼て室生が欲してゐるところの教養あり、典雅な人物に彼が行き會うたからである。彼自身の中に潜んでゐる當然典雅なるべき彼を築き上げたい夢想を、次第に彼は芥川を知つてから實現し出したやうである。尠くとも當然彼の中で睡つてゐて起きないものまでをも、芥川龍之介なる人物に刺戟されて揺り起されたと云つても過言ではなからう。」と云つてゐる。彼の言葉を藉れば教養ある高雅の人物を私は永い間望んでゐた。そしてその人物に邂逅したことは彼の氣質からなる風雅なるものを、一層建て直したと云つてよいと

いふ論旨であつた。自分は萩原の云ふところに不賛成ではない。寧ろ彼は離れてゐる間にも彼の友である私を遠く注意深く睨んでゐることは、彼の唯一の友であるが故に頼母しい氣がしたくらゐである。

菊池寛の言葉を藉れば芥川龍之介は人がいいさうである。彼に逢つたどういふ人も彼を悪く云ふことを聞いた事がない。會はない前から見れば會つてよかつたといふ懐しさを感じさせるらしい。そこが彼の人のいい、隠し立をしない人がらであるかも知れぬ。彼の上機嫌は彼を長廣舌にさせる事は暫く擱いても、彼は妙な人見知りや氣取りや故意とらしい氣障から夙に卒業してゐることは實際である。人間が出来ることは人見知りや氣取りの必要のないことであらう。しかも彼は皮肉でなく正直に云つてゐる。「僕は誰とでも或程度までは交際へるがその或程度までで又引歸して来る。」と彼らしい氣持の手堅さを見せてゐる。かういふところは人が善いのだか悪いのだ分らない。或は或意味で菊池寛の方がよほど彼よりも人がいいのかも知れぬ。

一概に萩原の所謂「典雅なる人物」との邂逅に依つて、自分の全幅が影響されてゐると云ふのや、彼に依つて初めて自分が揺り起された譯ではない。彼に據つてほんの少しづつ自分は彼のものを盗んだ丈である。彼の中にあるもので自分に取つて解らなかつたものが解るやうになつたことは、或意味で重大なことも知れない。とにかく彼は却々の苦勞人である。しかも彼の苦勞人

の所以のものは妙に垢じみた薄暗いそれではなく、明るい冬の朝のやうなそれである。彼は學問や經驗の上からも、自分とは全然反對であるが、しかも彼は經驗せずして經驗する程度のもを直覺する男である。彼は或意味で世間的に云へば恐るべき早熟だとも云へるのである。或は彼があれだけの才能を不良性のまま驅り立ててゐたら、どうにもならぬ人間になつたらうと思へる程である。恠ういふことは禮を失するかも知れぬが、彼が不良の徒だとしたら才氣喚發で一世を震駭させるかも知れない。

二 芥川君と僕

漸と二度ばかり會つた芥川君から、發句の運座を巻くから來ないかと誘はれて、芥川君の家へ確か二度目くらゐに行つた。梅雨の霽れた爽かな一日であつた。即題は夏羽織と梅雨ばれと其他の何かであつた。主人を初め久米、菊池の兩君や岡、江口、佐々木君なども來てゐて、自分は久し振りで發句を作つた。その時にどういふ氣持か自分は久米君に題して時めく小説家としての彼をねぎらうた句を、夏羽織に事よせて作つたのだ。久米君はかういふ發句はいかんと云ふやうなことを云つたが、自分は引身を感じた。何時か久米君にあの時の話をして談笑したいと今でも思つて居る。

芥川君や久米君は作家生活に物慣れた世間をすつと見通しが利いてゐる時分であるのに、自分はまだ何も分らぬ井蛙の野人であつた。自分のよしとしたことも却て人に不快を與へる程の、まづい稗拙な挨拶振りに過ぎなかつた。自分は夕方早めに歸つたが、明らかに彼らに在るものと、自分との間に非常な洗練のきめの違ふことを感じたが、どうも隔離を感じ過ぎ手の付け様が無かつた。

今から考へるとあの時分には久米君にしろ芥川君にしろ、自分は格別な高さと瞻望とに鍛へられた何物かを持つてゐた。その高さは根本的に爲人を叩き上げ、斬り込む隙間もない手堅さであつた。あの時に自分は反感を有たなかつたことは好いことであつた。自分はその後も芥川君とつきあひ、彼の難攻不落の城に入りながらどれだけ得をしたかも知れなかつた。自分は時に彼の高飛車な調子が彼自身では常識にまで漕ぎつけてゐることに、必然に微笑みを感じるのであつた。

自分は芥川君とつきあふ様になつてから全く彼からの巧みな誘ひ出しに惹かれて、自分の中に眠つてゐたものを醒されたと云つてよい。彼が針の穴からも覗き込んで來てゐるのに驚き、聞いた戸からもやあと云つて這入つて來るのに驚いた。雑談の中からも色々聞くべきことが多かつた。自分は良友を持つてゐるけれど、自分を叩き上げるために要のある人は尠い。それに自分は樂な交友ばかりしてゐるせいか、頭の坐りが低かつたとも云へた。人間は樂な交友をしてゐたらしまひに馬鹿になるものだ。彼の云ふことは自分に取つて物珍らしいといふより、當然自分の感じもし考へてもゐることを、彼の言葉で話されると快い調和をさへ感じるのであつた。

今から思ふと自分が小説の書き出しころに芥川君と早く知り合つてゐたら、最つと得をしたらうと思つた。最後に書く自叙傳をさきに書いたりして、作家としての本道を取り違へたことが多

かつた。全く小説といふものは餘程心が決つてゐて、人物ができてから書くものだといふことを此頃沁々感じてゐる。底のある如くして底のないものは小説であらう。

三 清朗の人

鶴沼へ行く前後から芥川君は餘り書畫骨董に興味を持たなかつた。陶器のことでも興味を感じないと云ひ、實際面白くなさうな氣持らしかつた。お互ひの家庭の話が出ると、此頃妻がいとしくなつたと山手線の電車を待ち乍ら話してゐた。自分自身の生活でもそれが分るやうな氣もちで居ることがあるので、賛成して俱によい氣もちになつた事がある。

何時か自分のところで芥川君がお辭儀をして、顔をあげようとして黒い足袋が片方すぐ間近にあつたのを見て、顔色を變へて驚いたことがあつた。去年の六月ころだつたらう。あの時分神經衰弱がかなり酷かつたのかもしれない。新聞の記事などでよく「こたへる」と云つてゐた。

歌舞伎座にあつた改造社の招待會の歸途、例に依つて一緒に出かけたが歸りも一緒の約束だつた。最後の幕を見て、下足を漸つと受取つて出た自分は、芥川君の姿を見失うて却て宇野君が一

人佇んでゐるのに行き會うた。其翌朝、芥川君は實は昨夜谷崎佐藤兩君に會ひ、帝國ホテルで一晩話し込んで今しがたその歸りだと云つて、どうも失敬したと態々斷りに來たのである。芥川君はさういふ細かい氣づかひをする人である。

22

自殺に就ては何時も藥品の話が出た。そして僕がその話の中では何時も芥川君よりも長生するやうな事になつてゐた。自分是从からだの弱いものは長持ちする者だと云つたら、彼は反對に犀星は却々死なんよと快よささうに笑つてゐた。

芥川君は生前自分の零細な作品にまで眼を通して、短小的確な批評を能くして勵まして呉れた。去年自分の「文藝春秋」に出した「神も知らない」といふ作品は或女性の自殺未遂を書いたものであるが、芥川君は此小説では女の中から這入つて書いた方がよかつた、最も女の中から書くことは難かしくもあり却々苦しいと批評して呉れた。自分は女から書くには分りかねることがあるといふと、それは分らんよと云つてゐた。六月の末のことで芥川君が世を辭す三週間程前である。

芥川君の遺書を読んで自分は立派だと思ひ、何處までも藝術の砦の中にある人だと思つた。自

分は芥川君がそれほどまでの重大さに負けないで、日常の應酬や作品の精進につとめてゐたことは、凡夫の自分には及ばないところだと思つてゐる。胸に重大を疊んで平氣をよそほうてゐてこそ、ああして落着いてゐられたのだとも思つてゐる。

遺書にある平和は芥川君を圍繞してゐたものと見える。自分は彼の死に驚き次ぎに感じたものは清らかさであつた。何よりも清らかさが自分を今も刺戟してゐる。

四 芥川龍之介氏を憶ふ

芥川君が亡くなつてから早一週年の忌日も間近くなつたが、自分は此偉大なる友を憶ふ氣持には、漸く鋭い熱情が、目を經る毎に感じ出された。熱情は益々同君を純粹にも清淨にもし、同君を友人とする自分の間に距離を感じさせるのである。その距離は現世に存在しない彼が持つ縦横無盡な清淨さであり、その清淨さは無理にも現世に隨く自分を必然的に引離して行かうとするのだ。

自分は此友の死後、苟かに文章を丹念する誓を感じ、それを自ら生活の上に實行した。同君の死の影響を取入れ自分の中に滲はすことに、後世を托す氣持に自分はゐるのである。同君に見てもらひたいのは今日の自分であり、交友濃かだつたあの頃の自分の如き比例ではない。同君も今日の建て直された自分を見てくれたら、別な氣持で交際してくれると思ふ。今日の自分は微かに同君が自分に不満足を感じ、輕蔑すべきものを輕蔑してゐた氣持は解ると思ふ。友人同士は互ひに輕蔑すべきものを持ち合してゐることは、それを感じる時に其値を引摺り出すことができるのだ。芥川龍之介君は自分を輕蔑してゐた。かういふ事實は彼の中で遂に埋没され、永く同君の死とともに抹殺された。併し自分はそれを掘り返して補ふのである。自分が文事に再び揮ひ立つことのできるのは、あの人の影響だと思つてゐる。自分は彼といふ一文人の死でなくとも、死は多くを教へるものを持つてゐることを感じてゐる。

芥川龍之介君は理智と情熱とを混戦させてゐる人であつた。或はその旺盛な情熱が彼をあゝいふ死に誘うたのかも知れぬ。所詮自ら滅することは情熱の命令の後に行はれるからである。彼は死なうと考へながら「時」を延長させるだけ延ばさせた人である。晩年二年位は同君に取つて莫大な長年月だつたに違ひない。百年の歲月も遂に同君に取つてその晩年には興味のない無爲の歲月であつたらう。

自分は芥川君に會ふ毎に最初の五分間は毎時も壓迫を感じてゐた。芥川君の仕事や爲人、偉さが自分に影響してゐた。自分はそれを完全に自分と同君との間に退治したのは、最近二年位の間だつた。それは同君が自分の書齋を訪ねて來る時に經驗し、又同君の書齋でも次第に退治することができたのである。かういふ心理上の壓迫感はずかに料理され試煉されるものである。同君は何時もずつと高いところにゐたことは疑へない。併しその高さを僕自身へまで引下ろすことはできないが、其處まで僕自身が行かなければならないのである。全く同君は自分に取つて苦しい友

人であり、その苦しさは自分によい結果となり今までに影響して来たのである。

芥川君の好む人物は半端者があり、他の人間と交際しにくい氣質を同君は能く容れるものを持つてゐた。概ね孤獨を友とするやうな人格の中に、同君は何時も心ひそかに愛を感じてゐるらしかつた。他の人格の中に孤獨の巢を発見することは彼の藝術的な作用に外ならないのであらう。併作、同君はさういふ一面とまた眞實な一面とを持ち合せ、眞實で打つかる人間には眞實以外のものを見せなかつた。あの人の眞實性はその根本では情熱から動いてゐた。彼が晩年に若い詩人達に物質的にも眞實な好意を動かしてゐたことは、自發的なものが多かつた。

自分と芥川君との交際は普通の動機からであつて、何も特筆すべきことはない。自分の子供が女子であり同君の子供は男子であるが、同じい聖學院の幼稚園に通うて、最初の間は往きも返りも手をつないで一緒に登園するのであつた。自分はさういふ現世の情景に對しては詩人的であるよりも、寧ろ小説家風の立場に自分の考へを置く機会が多かつた。生前の同君と自分との戯談が生きた情景に變つて眼前にあるのだ。自分はさういふ小童少女の世界に感懐を交へることを些か遠巡するものであるが、併し顧みて現世に美を感じ出すことは人一倍の自分の努力でもある。

自分は芥川君を憶ひ出す機会を同じ田端に住んでゐる關係上、他の人より餘計に感じてゐた。

或人は田端の驛の坂の上で、荷草が坂を登るのを芥川君が眺めてゐたと云ひ、さういふ些事が自分の胸に應へることが多かつた。三河島一帶の煙や煤で罩められた曇天の景色は、あの人の頭に永く残つてゐたものに違ひない。同君が、好んで曇天の景色を描くことに妙を得てゐるのも、さういふ景色の中に永續する動かない「景色のサネ」を抉り取つてゐたからであらう。

震災の翌年の五月金澤へ来たときも、その勝れた景色には感心してゐた。併し有繫に川料理ばかり食べさせる金澤では、料理は餘り衰めなかつた。ああいふ人でも淡泊な料理ばかりでは困るのであらう。食物はいつも自分は芥川君の二倍位は食べてゐた。輕井澤の宿屋でも芥川君は大抵オムレツと冬瓜の煮付を食べてゐた。決してピフテキヤスチュは取らなかつた。隣室にゐて早寢をしてゐる自分は夜更けて後架に立つと、芥川君は濛々たる煙草の煙のなかに、反り身になつて原稿に苦吟してゐた。そして自分が寢てゐると遠慮して雨戸を繰るのにも、靜かな心置きを用意してゐた。その濛々たる煙の中に坐つてゐた芥川龍之介君は、決して自分の眼底を去らない苦吟の人芥川龍之介君であつた。

去年の七月二十四日のお通夜明けに、椎の木の頂に夜の白むのと同時に啼き出した蟬の聲は、自分の現世のあらん限り忘れぬ凄じい蟬の聲だつた。自分は菊池、久米、佐々木の三君と縁側

の板の上に、通夜の人々の散じた後にも坐つてゐた。そして何時か芥川君が仕事をしてゐて、夜明けの蟬の聲を聞く程氣持のよいことはない。さう云つた言葉を端なく思ひ出した。疲勞と眼病に悩んでゐた自分を根本から動搖もさせ、靜肅にさせてゐたものは、鶴のやうな幽遠無類の蟬の聲だつた。今もなほ蟬の聲は自分の耳の遠くにある。

自分は此友達の中からまだまだ攝取すべきものがあり、自分は貪婪にそれに打つかつて行くべき筈であつた。かういふ精神的な陣營を感じ出す友達といふものは決して、ざらにあるべきものではなかつた。話をしてゐても珍しい言葉に感激し、他人のどういふ部分にも正確な藝術的な氣持を以て見、それに共感する時は幼稚なほどの驚きをする、さういふ人は稀なものであつた。ああいふ驚き、驚いて喜ぶところ、露骨に志賀直哉氏をほめるところ、小穴隆一君を信する寧ろ不思議過ぎる友愛には、實に無類に善良な彼が立つてゐた。さういふ芥川龍之介君には微塵も濁れない氣質が感じられた。

晩年近くに書いた詩は詩人としても迥かに一流にまで飛び越えた彼がゐた。詩に睨みの利いた芥川君は、就中「旅びと」の抒情詩、「僕の瑞西から」の中の「ドストエフスキイの詩」なども、立派な出來榮えを示してゐた。實際芥川君は何よりも詩人だつたといふことは、何よりも詩人中の詩人だつたことを證明するものであつた。誠の詩人といふものの恐るべき「天火」を彼は擁い

てゐた。我々凡俗の詩人は最早「彼がどうして死んだか」などと念うてはならない。黙つて暗夜に没するその長髪瘦身の姿を見て居ればよい。その後姿は何と懐しい限りのものであるか、笑ひも感激もゴオルデンバツトも、鳥の足のやうな手も、半分かけた金齒も、そつくり彼は何時でも思ひ出させるものを持つてゐる……

先日駒込慈眼寺に下島先生と打連れて墓參をしたが、風清く穏かな日であつた。芥川君風にいふと、蟲の食つた老いた葉櫻のかけに「近代風景」を持つた青年が一人、寺境の雜草を距てた釣堀の水を眺めてゐた。

墓詣 (塚も動け我が泣く聲は秋の風 芭蕉)

江漢の塚も見ゆるや茨の中

五 憶おもひ 芥川龍之介君

「新潮」の芥川龍之介研究といふ座談會の記事を読んで、久米、廣津の兩君の芥川觀が大變に面白かつた。時は芥川君の好んだ梅雨の季節であるし、何となく芥川君のことを考へてゐると、「文藝春秋」から芥川君の思ひ出を書いてくれとのことであつた。度たび追想記を書いたから今度は何を書かうか知らと、床に就いてからうつらうつらと考へてゐたが、茶棚の上に今朝ほど小林古徑さんのお嬢さんから、家の娘におくられた近江の琵琶湖の大螢が白い蚊帳ごしに、明滅しながら燐のやうな光を放つてゐるのを眺めた。籠が大きいので、立つたり落下したりする鋭い光芒が、陰々として美しいといふよりも妖しく、妖しいといふよりも怖いやうな氣がした。家人は睡り私と螢だけが家のなかに起きてゐるやうなものである。芥川君の最後に近い作品にある鬼氣妖氣の類が、この螢の光のなかからも分れて入つてゐるやうな氣がし、私は容易に睡ることが出来なかつた。

金澤に芥川君が來たのは大正十三年の五月も終りに近い頃で、兼六公園の翠瀧の上にある三由庵別荘に俳人桂井未翁さんの紹介で案内したが、老楓、古松の間にあるこの別荘はうす青い蚊帳のなかにゐるやうな空氣が晝間も十二疊の部屋を一杯に領してゐた。南登船入港の六曲折の前に闖んで見てゐる芥川君はううむと一つ唸り、又ううむと唸り、心臓の脾弱い人のやうに、しまひに、はあ、はあと荒い息をつき出した。「金澤には佳い物があるなあ、こりや佳いなあ。」と感嘆して云つてゐた。

晩に北間屋といふお茶屋で夕飯をたべてから、おそく三由庵に戻つて行つたが、自動車には帽子といふ名前の妓きんに、仙吉といふ名前の妓とが同乗してゐた、そんならお部屋だけ拜見してゆくわいなと云つて、暗い公園の紆曲した松の根上りで凸凹した小徑を登つて行つたが、提行燈さげあんどんの明りも乏しい闇のなかで芥川君は長い髪を額に下げて、わあ！ と叫んで女の前に立ち塞つて脅かしたが、彼女らは五位鶯の夜啼きのやうな鋭い聲できやあ！ と叫んで逃げたりした。

「帽子といふ妓は薄命らしい顔をしてゐるね。一體、帽子といふ名前を付けるなんてみづあけした奴も奴だが、はかないなあ！」

芥川君は長嘆息をしたが、妓どもは先刻ほど喫驚したことがなかつたと云ひ、ずつと後まで胸を悸きつかしてゐた。

歸路を京都に取つた芥川君から、帽子さんに長い手紙を送つて健康に氣をつけるやう呉々も注

意し、京都の妓ども二三人の署名までがしてあつた。餘程弱さうな健康が氣になつたものらしかつた。帽子は芥川俊後三年目に肺で亡くなり、仙吉といふのも帽子と前後して衰れに死んでゐた。僅か三四日間の滞在ではあつたが、金澤の方言に非常な興味を持ち、僕もとうに忘れてゐるやうな言葉を何時の間にか覚えて、歌に詠みこんだりしてゐた。金澤川岸町の假寓を訪ねて來た芥川君は長い川べりの土手を人力車に振り返つて乗つてゐて、色の白い優形の姿は鳥渡醫科大學を卒へたばかりの若い開業醫のやうに見えた。菓子折くらゐの小さいトランクに僅かな手廻り品を入れた彼は、身輕に旅をする「五月の貴公子」のやうであつた。

田端の芥川君の家と私の家とは裏通りから坂二つを横に通つて、五六町くらゐしかなかつた。仕事にも草臥れて芥川君を訪ねて元氣な顔を見ようと出かけると、そんな時分、向うからも少し濡かい日でもマントをふうわりと被つた、なりの高い彼は漂々乎として歩いて來るのであつた。今君のところへ行かうとして來たんだといふと、僕も君のところへ行かうと思つて出かけて來たんだと立ち止つて何やら相談するやうなふうで、結局、距離の近い方に行くことになるのであつた。僕の家の潜り板戸は開けるとかたんと音がして、鳥渡開けにくかつた。芥川君の戸の開け方は不器用で二三度かたんと音をさせるので、すぐ龍之介入來であることが判るのであつた。

「やあ。」といふ彼は弱つてゐる時でも、病氣をこぼしてゐる時でも、何所か經文を誦む時のやうに鼻にかかつた聲は何時も張り切つて、氣魄的に甚だと云つても好い位元氣だつた。

「菊池寛がね君、この座敷から離れまで飛石に雑巾がけをさせて、べたべたと離れまで素足で行つたものだよ。どうも敵はん男だよ。」と私が金澤へ行く前に明け渡した貸家に菊池君が住み、庭下駄を引つかけける手敷をばぶいた菊池君のことをかう彼は話してゐた。

「菊池君がね君、こんど雑誌を遣るんだよ。旨く遣れたら原稿料を皆に拂ふんだといふんだが、菊池のことだから旨く遣るかも知れないよ。」この話があつてから「文藝春秋」が生れて、今日の雑誌になつたのであつた。

それから小穴隆一君の名前が大抵の場合に話の間に飛び出してゐた。小穴が小穴がと云ひ、小穴がたうとう足を一本切つてしまつて僕が手術に立ち會つたのだよ。小穴に君の字が旨いと云つたら、室生犀星にだつて旨い字が書けるなら、おれも習字して遣らうと云つてゐたよ。小穴の妹が死んだんだよ、この間小穴が弱つてゐたよとよく云つてゐた。

「小穴が君の庭の玉簪花を寫生に行くかも知れんよ。關はなくとも好いから寫生させて遣つて呉れよ。それから小穴はきみの奥さんをモデルにするかも知れんが、それも頼めないかなあ、——小穴がね、こんど畫會を起すんだよ、いろいろな人に這入つて貰ふより君ひとつ入會つて遣つ

てくれんかな、一口四十圓だよ、まだずつと先のことなんだがね。」と云つてゐた。

或日芥川君をたづねると、君、きのふ奥さんが僕のことを變な男だとか何とか云ひはしなかつたかねと尋ねた。君に途中で會つたと云つてゐたけれども別に何も云はなかつたと云ふと、さうか、實はね郵便局の前あたりで猿又が下つて来てね、こいつは大變だと懐中から手を入れて猿又を引き上げながら歩いてゐると、奥さんにばつたり出會したんだよ。急に慌てて了つた譯なんだ。さうか、氣がつかなかつたのか、そりや宜かつたと安心して云つてゐた。家に歸つてこの話をすると、道理で容子が少し可笑しかつたと女房が云つてゐた。

これも或日のこと、僕の部屋でこの間の葡萄酒がまだあつたら、少し呉れんか。あれは旨かつたよといひ、グラスで出した白ぶどう酒を芥川君が甘味さうに、ほんの少量づつ舌の先で舐めてゐた。あとさき十年芥川君がうまさうにお酒を呑んだのを見たのが、始めてであつた。

或時、金澤から持つて來た木越三右衛門の鐵瓶をじつと見てから、「ああ、好い鐵瓶だ、文壇斯くのごとき鐵瓶を持つてゐる者は先づ君一人だらうね。」と感嘆して云つた。或時、岸田劉生氏の繪を上野で見つてから、「さう、さう、君がこの繪の好きな譯がわかつたよ。朝子嬢に肖てゐるからだよ、やあ、全く肖てゐるなあ——。」

或時梅原龍三郎氏の木立と池のやうな構圖の繪を見て、旨いなあ、これが君に分らんといふの

は、君はてんで繪を解らうとしないんだと云つた。繪を解らうといふ所まで僕はいつも行けないで、途中でぶらぶらしてゐたらしいのである。——或時、動坂町の汁粉屋で汁粉を二椀たべてから、どうだこの汁粉は旨いだらう。この界限にこのくらゐの汁粉は稀だらうと甘い物の好きな彼は褒めに褒めてゐた。だがね、金澤の森八の汁粉といふのも鳥渡うまかつた。あれは餡がいいんだよ。金澤はお菓子がいいよと彼は二百年の傳來名菓を看破してゐた。

芭蕉も思ひ付きで作つた句が相當にあると私がいふと、いや、そんなことは絶対にないと憤然として食つて懸つた。寫生の句なんかすらつと詠んでゐるぢやないかと云ふと、いや何度も置き換へてゐると云つて、例句を引用して却々聞かなかつた。

芥川君はよく一緒に「中央公論」などに書く場合に、今月は君と合乗りだよと云つてゐた。合乗りとは面白い言葉だと思つた。そして僕の方が何時も先に書き、芥川君はずつと遅れてゐて、瀧田樗蔭氏は昨日三枚けふは午前中に三枚は出来る筈ですと、さういふ長い時間のかかるのを楽しさうに云つた。

瀧田樗蔭氏はよく芥川君とかけ持ちで、私の家に見えられたが、いま芥川さんの所に寄ると四月號ならちやんと取つて置き、材料があると云はれてゐたが、芥川さんらしいですねと瀧田氏は

嬉しさうに話してゐた。瀧田氏は芥川君の話をするとき、何時もほくほくと嬉しさうであつた。ああいふ機嫌の好い時に嬉しさうにする人を、今まで見たことがなかつた。「芥川さんの原稿は手垢でよごれてゐるんですよ。ところどころ糞張りがしてあつてね。」かういふ瀧田氏は甚だ機嫌美はしかつた。

芥川君は平常喋る言葉に大體の用語が定つてゐた。彼はお辭儀するときとか、會つた最初には決つてやあといつてゐた。「ありや君とても敵はん。」とか、「内田百間の話を聞いてゐると愛になるよ。」とか、「あれは傑作だね。」とか、「僕は大きいに同情した。」とか、「ちよつと美人だね。」とか、「ありや豪傑だよ。」とか、「怖かつたなあ實際」とか、――

輕井澤で同じ旅館にゐたとき離れの部屋の前に、大きな楓の木があつた。それを登ると松村みね子さんのお部屋が見えるといふ話が出て、芥川君は攀らうかと云つて早や脚をかけようとしてゐた。私はのぼれ、のぼれと喉しかけると、君、登れるかと云つたから、登れないといふと、よし登つて遣らうと脚の長い男だけにするする登つて行つた。悪い時は悪いもので、松村みね子さんが廊下へ突然出て来て、ちよいと驚いたふうで見て居た。かれは下りると失敗つた見られたと云つてゐた。

この間奥さんが見えになり、家で湯の立たない日だつたので私は錢湯に出かけて行つたが、

芥川君が錢湯の話をした事がなかつたので、歸つて女房と話をしてゐる奥さんに尋ねて聞いて見ると、錢湯が嫌ひで行つたことがないさうである。鶴沼で一ト月お湯にはいらぬことがあつたさうだつた。輕井澤で一緒に湯に入ると、毛深くて僕よりも肥つてゐた。「ああ快い氣持だ、風呂桶に犀星のゐる夜寒かなはどうぢや。」と彼は夜の明けたやうに薩張りした顔付でいつた。彼はいつもオムレツを一皿とお碗のおつゆで膳に向つてゐたが、私は鮎や肉を彼の二倍くらゐ食べてゐた。「ああ、よく食ふ男だ」と彼はいひ、僕は「何といふ少食の男だらう。」と感嘆して云つた。それほど彼は少量しか食はず、所きはすに足を捲つて見せ、痔せたお腹を出して見せたりした。彼の胃袋がいつも胸のところを下つてゐるやうな氣がした。

何時か夜中に芥川君の近隣に出火があつて、出かけて見舞ひに寄ると、芥川君は玄關に仁王立ちになり、少し胸をはだけて見舞客に一々長い髪を掻き上げ掻き上げ、鄭重に挨拶を交はしてゐた。背丈が高いので玄關一杯に廣がつてゐる恰好は、非常に頼母しい主人振りであつた。火事はもう濟んだよ、ちよつと上つて行つて呉れ、ちよつとでいいからと云ひ、私は夜半の書齋にはいつて行つた。あの晩ほど芥川龍之介を頼母しい男だと思つたことがなかつた。もひとつは、震災當日午後四時頃、彼は反り返つて背後に渡邊庫輔君を隨へて、悠々然として僕のところに見舞に來た。僕は今夜から自警團に出なければならんよ、火事は全市に起つてゐるらしいと云つて戻つ

て行つた彼はその時分それほど元気だつた。

僕が或夏輕井澤に行くといふと、芭蕉のことはおれが見て遣るといひ、留守宅に行つて二三本の乏しい芭蕉の成長を見とどけた上、手紙に「芭蕉蒼然たり、幸に安神これあるべし」と書いて知らして呉れた。

何時も芥川君は何かに打つかつてゐるやうな感じだつた。相撲の打つかりのやうに眼に見えぬ敵に、また眼に見える敵に絶えず打つかつてゐるやうであつた。仕事最中に訪ねると芥川君の表情はまだかきかけの小説魔に取り憑かれたまま、平常の顔色に戻らない揉まれた顔をしてゐる時があつた。お湯にはいらぬせいもあつたが、蒼白い細長い瘦せた指の爪にくろぐろと垢がたまり、怪鳥の爪のやうであつた。鳥の眼はみんな美しい眼をしてゐるが、芥川君のなかで就中眼が一番きれいであつた。

怎麼忙しい時でも顔さへ見ればちよつと上れといひ、また宴會の歸りなどにも、君ちよつと寄つてくれ、見せたいものがあるからと云つて離さなかつた。かれは人懐こいよい育ちをその最後まで持つてゐた。

亡くなる一月ばかり前の暑い午後になづねて行くと、珍らしく椅子に坐つてゐたが、先客がか

へつた後で何か烈しい苛ついた疲労で、顔色はどす暗く曇つてゐた。その年の六月號かの「新潮」に私は芥川龍之介論を書いてゐたので、君あれを讀んで呉れたかねと云ふと、慌てて讀んだよ、どうも有難うと云ふかと思ふと、たしか「湖南の扇」が出来てゐたのでせかせかとそれに署名して呉れた。その時殆ど、聞えるか聞えないか位の獨り言のやうな低い聲で、ああいふものを書かなくてもよいのにと云つた。私は書かなくとも好いといふのは氣に入らなかつたのかといふと、いや別に、いや何んでもないよと、それきり黙り込んで了つた。私はそれから間もなく信州に行き、その日が彼の人に永いお別れの日になつたのである。

六 金澤に於ける芥川龍之介氏

芥川君が金澤にゐた僕を訪ねてくれたのは、大正十三年の五月だつた。僕は公園の中の三由庵の別荘を周旋した。

この別荘は風流名士が泊るので、相當の手蔓がないと宿はしてくれなかつた。俳友未翁さんに頼んで紹介して貰つたが、數丈の瀧の上にある、老樹古幹に圍まれたこの別荘は、甚だしく芥川君の氣に入つたらしかつた。下島勳さん宛の手紙を見ると、彼がこの別荘をどれだけ喜んでゐたかが分る。

「昨日御見送り下され恐縮に存候小生唯今兼六公園内三よしと云ふお茶屋に泊り、十五疊の座敷、十疊の次の間八疊の茶の間、四疊半の茶室、四疊の玄關、六疊の玄關次の間、湯殿等を一人に使ひ居り候、屋を繞つて大樹扶疎、殆ど錢叔莫の畫中にある想ひ有之候、是皆犀星老人の心配によりしもの、大いに恐縮に存候、(もし先生お出での節はやはり此處に御泊らせ申すとのこと)、紅殻塗りの欄干によれば瀧あり、新緑の間に落つ、老鶯處々、久しぶりにて俗腸を洗ひ申候、

(五月十六日)

同じ日に小穴隆一君あてに繪端書四枚を續けて投函してゐる、その中に「三よしと申す御茶屋に居り豪奢をきはめ居り候、見とり圖を書きたけれど面倒故おやめ(後略)

昭和二年越後新潟に旅行した時の片信にも、僕あてには此別荘の好みを追想して寄越した。

芥川君は新緑に埋れた十疊の座敷で、薄ぐらい光線をよるこんで相渝らず煙草ばかり喫んでゐた。

「あそこの枝に小さい箱が吊してあるだらう、あれは何か、君は知つてゐるか。」

松の梢に、箱が結びつけられてゐたが、木地は最近に吊したものであるらしかつた。

「分らん。」

「あれは君、小鳥の餌箱ださうだよ、あれに時々餌を入れてやつてゐるらしいんだ。」

芥川君はすぐ瀧の下にある、小堀遠州の作になる夕顔亭の手洗鉢を賞翫してゐた。李白の臥像を鉢の縁にぬき彫りにした高脚の手洗ひだつた。その石質は當時お取止めの石であつた。

「地震のあとに此處へ来てみると静かでない。」

三由庵は、小料理を看板にしてゐたが、別荘まで木の杭でつくつた段々が老木の間に紆曲してゐて、そこを食事の時に膳を持つて女中が通ふのだ。三由庵には年増の美しい萬年娘がゐて、彼

女が芥川君の起臥のもてなしをしてゐた。芥川君は長い髪を額に垂らしたりして舌を出したりして、彼女らを吃驚させる悪戯をして面白がつてゐた。

二日目の朝訪ねて行くと見知らない青年が二人來合せてゐて、短冊を書いてくれるやうにせがんでゐた。多分、新聞を見て尋ねて來たものに違ひない。さういふ客にも叮嚀に應酬をしてゐたが、朝早くではあり寝起きを訪問されたらしい疲れを、自分は芥川君の顔色に見て氣の毒に思うた。しかし芥川君は自分で進んで未知の客をもてなしてゐた。

北間屋といふ料理屋で僕は二三の友人と一しよに、芥川君と發句の運座をした。その折の句で記憶に残つたものはみな後年改作されたものが多い。

簀むし子や雨にもねまる蝸牛

町なかの銀杏の乳も霞みけり

その折に弱々しい短命さうなお酌一人が來合せてゐて、不健康であるために美しいやうな顔を、芥川君は神經的に好意を交ぜた氣持で見つてゐた。芥川君の脆い美しさをもつた女だつた。

「あれは永生きをしなげ。」

殊にその皮膚は妙に寝不足からくる蒼白さに似てもゐるし、皮膚そのものの白さにもよる不健康さでもあつた。

「わたいなにかい、つ死んでもだじないがや。それよりあなたの顔色のはうがよつほどわるいわ」お酌は反對に芥川君の顔色を警戒してゐた。

芥川君はその晩も蒼白い皮膚にうすい煤のやうなくらみを漂はし、彼女よりも最と不健康な色をしてゐた。その晩の皮膚の色が悪いことは殊に著しかつた。

そとに出たあとで月夜であつたかどうか自分は知らなかつたが、後年に出版された「未翁南園句集」の序文にかう書いて、その晩の月夜だつたことを自分に知らせてゐた。

「忘れることの出来ないと言へば、あのお茶屋から出て來た時、何處か昔寂びた家並みの空に薄い月の出てゐたのも、忘れられぬことの一つになりました。わたしの庭には今竹の落葉に毎日雨ばかり降つて居ります。金澤も定めし若葉は老い、あをくさやの店は杏を盛り、犀川の水は増して居りませう。(後略)」

「町なかの銀杏の乳も霞みけり」銀杏の大樹もすぐお茶屋の近くにある社の銀杏の老木であつたが、乳とは銀杏の古木にある瘤をうたうたものらしく、それを見遁さなかつた芥川君は矢張り

頼母しい發句道に心のある人だつた。

尾張町の森八といふ菓子舗の出してゐる喫茶店で、僕は芥川君と汁粉をたべたが、芥川君はこんな美味しい汁粉はたべたことがないと云つて、菓子の傳統の古い金澤を褒めてゐた。(芥川君は汁粉は大の好物だつた。) 彼はたしがお代りを吩咐けたあとでも、東京の汁粉の材料のわるいことを罵倒してゐた。汁粉ばかりでなく菓子の好きな芥川君は、滞在中殆ど菓子を口にしないことはなかつた。自分は彼と連れ立て同じい森八の舗に行つて、瀧井孝作、志賀直哉、下島勳、小穴隆一の諸氏及び田端の奥さんのところに送る「長生殿」といふ落雁の小包の上書を書いてゐる芥川君の姿を忘れられなかつた。

芥川君は四日間しか金澤に滞在しなかつた。それにも拘らず金澤の方言をおぼえ、却つて僕も忘れてゐる土地の言葉を質問したりした。彼はえんぞ(溝)、あをくさや(八百屋)、さうやさかえ(左様です)、しよむない(鹽氣のない)、だら(馬鹿)、あんちゃん(兄さん)、すもしこ(簀戸)、などを覚えてゐた。

前田家歴代の墓碑のある野田山に芥川君と桂井未翁、太田南圃兩氏と登山したが、中腹で僕は疲れて休んだが、彼は元氣だつた。高い山松の梢におこる春蟬の聲は類ひなく美しかつた。歸途茶店で番茶を喫み、折柄農家の垣に絡まつて咲いた鐵仙の花を珍らしく眺めた。

望月といふお茶屋で晝飯をたべたが、眺望は展がつた市中ををさめるに便利で、金澤といふところはよいところだと褒めてゐた。

七 龍氏作品の解説

「鼻」

久松・菊池氏等の第四次「新思潮」創刊號に發表。

大正五年一月。

當時にあつては斯ういふ材料に打つかることは、既に此の作者の凡庸ならざる將來を暗示してわたものである。夏目漱石さんが手紙を送つて此作品を激勵した。

「芋粥」

此の物語めいた作のなかに龍氏が作品に對する周到な用意が窺はれる。汗にじむ五位の安堵した顔が目につぶ。しかも好人物と馬鹿とを搦き交ぜた人間のなかに、作家として手腕の定らない龍氏が既に作品の上に馬乗りにならうといふ、尊敬すべき面魂と身構へとを抱いてゐた。

大正五年八月作。

「新小説」に出た此の作は既に當時鋭い眼をもつ識者の間に認められてゐた。

「煙草と悪魔」

大正五年十月作。

煙草の渡來に就て彼の鬼才を弄したものである。煙草を悪魔が齎らしたと同様に彼の縦横な鬼才が此一篇を物したと云つてよい。描寫の齒切がよく、十年後にも何等の陳腐さを見せないところには有繋だと思ふ。

「偷盜」

時代物の一篇。

大正六年四月作。

手法、打込みの慣れた作。

映畫的な時代踏襲の完璧。

「戲作三昧」

朗らかな氣持で老馬琴の生涯の幾枚かを書き綴つたものである。作家としての彼は馬琴の生活のなかに最早彼自身を見ることを拒めなくなつてゐる。作家の幽遠や思慕は時に昔の作家を思ふことがあるものである。彼が逸早くも老馬琴に思ひを潜めたのも、今日になつて見ると却々に懐しい氣持である。

描寫もガツチリと錠を卸したやうに、填め込まれてゐる。靜かな明るい午過ぎなどに讀むと沁沁させられる。龍氏作品のあぶらの乗つた初期の物として自分は愛讀してゐる。

「地獄變」

晩年の彼は或青年からの手紙を受取り、その最初の文章に自作の此の「地獄變」といふ文字を見て、何故か戰慄したと書いてゐた。

彼は晩年の弱りかけた健康のなかで、此の「地獄變」の文字すら何等かの氣持を作用せられてゐた。自分にもその氣持が神經的に同感せられる。

大正七年四月。

「るしへる」

キリストン物の好き一篇。

キリストン詩の梗概。

「奉教人の死」

大正七年八月作。

キリストン物の極北的な作。

彼の苦心辭、好事的試乗、智識的奔流。

「れげんだ・おうれあ」の一書の如き假説の抄本をさへ作り上げ、當時キリストン研究者に一驚を喫しさせた。

「あの頃の自分の事」

此一篇は彼として珍らしい程、學生時代、無名作家時代を裸に細叙したものである。彼の交友、その雰圍氣及び文學的な一時期の彼を知ることが出来る。此種の作品による文學生活を書いたものは極めて珍しいやうである。

「きりしとほろ上人傳」

キリストン物の逸作である。

彼のキリストン物の中には何時も作の性質上「物語」が表現されてゐるが、その物語に重い或は諧謔的な彼の智性と想像の豊富とを示してゐる。

大正八年三月。

「蜜柑」

愛すべき小品であり田舎の小驛によくある出来事である。此のなかの少女は無邪氣さを傷められてゐるに拘らず、自分には興味深く見られる少女である。

當時この小品「蜜柑」の評判のよかつたのは、スツキリした人生些事のスケッチであり、何時もの龍君の物々しい用意と手法とが隠されてゐたためであらう。

大正八年四月。

「舞踏會」

明るい潤達な乗り込むやうな意力で、鹿鳴館時代の空氣を描いたものである。

大正九年一月。

「秋」

此の「秋」のなかの人生は大正九年代の明るい憂愁と詩情とを持つ「家庭」をしつくりと描きあげたものである。新派悲劇的な要素を人生から追ひ出すことができないと同様、「秋」のなかにある口籠るやうな哀愁は却々に消え難い、自分はこの年代にある凡ゆる通俗小説を通じた、好個の一篇だと思つてゐる、龍氏の感傷主義及び詩人的稟質が此一篇に手際よく哀愁を含んで漂つてゐて、よい美的な手觸りを感じさせる。

當時の評家も此作を擧げたけれど、その作品の底に悠然と流れてゐる口籠るやうな哀愁を指摘したものが無かつたやうに記憶してゐる。

大正九年三月。

「南京の基督」

秦淮の可憐な私窩子の生活を描いたものであるが、何等低迷すること無くその甚だしい暗澹たる迷信を露いた作品である。此の十五歳の私窩子の胸にあり乍ら、此の世に存在しない基督は同

時にコホロギが破れた壁の穴から啼く南京の都にのみゐる、可憐な無智な彼女に映像する基督である。

大正九年七月。

「杜子春」

童話

大正九年七月。

「藪の中」

彼は悪の美を、眞實の本體を、比較的にさうあるべき形相を奏する人生を、——この一篇によつて性慾的に妥協することなく踏へたものである。

「南京の基督」に於ける踏襲を一層假借無き迄にエロチシズムの精神に到達した作品である。強ち好色のな構圖に據つたものではない。

大正十一年一月。

當時この作は時評家及識者の間に佳作と稱せられてゐた。彼の作の凡てがさうのやうに此作も

縦横から油断のない手法で、矢張り早く固めてゐる。而も此作のなかの女の異狀に美しく感じられるのも、作者の打込みの鋭さが左ういふ美しさを引摺り出したものであらう。彼が前人未踏な物語風なものに凝つたのも、彼の唯一の好みばかりではなく、彼の聰明博學な文學的發足點でもあつたのだ。しかも我々は再び此種の作品の必要のない程、彼は彼の世界を充分に展きもし又描寫し盡したと云つてよかつた。殊にかういふ形式は此作者の前に決して踏襲されなかつたものであり、その内容と形式とが合理的な優秀な効果を擧げてゐる點、最も注意すべきことであらう。

「將軍」

彼は此作品に於て戦争を否定し、偽悪を指摘してゐた。當然打込むべきものを充分に打込むことを爲し得なかつたのも、時流はこれを許さないからであつた。彼の作品に於て伏字の多いのも此作に限られてゐる。

大正十一年一月。

「トロツコ」

手堅い寫實的な、淡さりした手法を用ゐて効果を得てゐる。或は小品的な上乘の作かも知れな

大正十一年三月。

「庭」

大正十一年八月。

此作を読むと何か思ひ出される好い分子を含んでゐることを感じる。誰でも人は少年の時を折に觸れて考へ出すごとに、抒情的な懷舊の思に堪へないものである。

「六の宮の姫君」

小説美。

典型的な小説美。

大正十一年八月。

「おぎん」

キリスタン物。

大正十一年九月。

「百合」

未完成のままに終つた作である。芥川君は未完成の作品を可成に多く所藏してゐた。斯ういふ事實は作をおろそかにしない特質のある作家に限られた現象であり、他の作家に稀なことである。大正十一年十月。

「三つの寶」

童話。

彼の口癖だつた「ほのぼのとした氣持の童話。」

大正十二年一月。

「神々の微笑」

キリスタン物の一篇。

大正十二年一月。

「白」

童話としての物語。

大正十二年八月。

「一塊の土」

此の作品の評価は當時かなり好評であつた。龍氏の作風の轉換さへ傳へられる程、材料の上で變化があつた。

龍氏はこの作を賞揚されることを好まなかつた。或は談話筆記かも知れない。

大正十三年一月。

「糸女覚え書」

この作を書かうとした作者の氣持に「物語」に美を捜る龍氏があり、餘りに物語風な委曲の美に沈潜する彼が存在してゐた。「芋粥」の昔から彼はかういふ道を辿り過ぎたやうである。

大正十三年一月。

「少年」

三つの短篇から成つてゐる。

龍氏の感傷主義がその少年物を辿る彼らしく沁み出てゐる。

大正十三年五月。

「湖南の扇」

支那旅行からヒントを得た作。

そして凡ゆる作の中に彼は彼の哀傷を忘れるやうな作家でないことを感じさせる。

大正十四年十二月。

「年末の一日」

歳暮のうそ寒い或一日に夏目漱石さんの展幕をしたことを書いた、作者の手近い生活的消光を物語る作品である。龍君はあまり自分の生活を書かなかつた作家である。却つて小品や散文詩に消息的な作を物してゐる。しかし自分は今更めて此の作を読み、早くも土中にある龍君を思はな

い譯にゆかない。——

大正十四年十二月。

「三つのはげ」

彼の作のなかにある多くの智慧の木に實るもの。

青い憂鬱なる猿。

大正十五年七月。

「春の夜」

或は實際の話であるかも知れない、——大正十五年八月頃龍氏の身邊に看護婦の雇はれてゐた事を聞いてゐる。

「點鬼簿」

彼は此の「點鬼簿」で急變的に憂鬱な作を示すやうになつた。「點鬼簿」とは文字通り鬼籍に入つた人々の記録である。丈草の「かけろふや塚より外に住むばかり」の句を最終の行に挿入し

た彼の胸に、やはり斯ういふ丈草の人生觀や歴世的なるものを身近く感じてゐたものであらう。實際、その頃の龍氏は塚の外に住んでゐたばかりのものであるかも知れぬ。

大正十五年九月。

「彼第二」

彼はまだかういふ作を彼自身の抱いてゐた大望の暇々に書いてゐた。

昭和二年一月。

「玄鶴山房」

最近の彼が懐いてゐる憂鬱な氣魄が沁み出てゐる。「玄鶴山房」には壓搾の美がある。出來得るだけ纏めつけた上に彼の好んで恍惚とする壓搾の美しさを彫つてゐる。木彫の美であるかも知れない。そして又甲野は種々な家庭から家庭へ渡り歩く看護婦としての天職に苛酷なほど忠實であることが、時折その眼を上げて、徐ろに觀察の微妙をその女性らしい心に落してゐる。

「玄鶴山房」は在來の彼の物語であるよりも一層物語のさねに觸つてゐるところの、彼の鋭い爪に彫られたしごとの一つである。自分はこれらの人生に各々一人づつの人間に美を感じた。玄

鶴には玄鶴の美、甲野には甲野の美、お芳にはお芳の美、其他の人間にも美を會得した。これを「秋」と較べると幽かな新派哀愁とも云ふべきものが、最も重疊された憂鬱をたたんで「玄鶴」に聳立してゐる。しかも色で云へば「玄鶴」は濛好みであると云つてよい。讀み終へて舌さはりに残るものは彼の濛好みであらう。

昭和二年一月。

「蜃氣樓」

鶴沼で書いた作品である。此の作のなかにある平和、甘い静かさは、當時にあつて龍君は僕が好む作品であらうと云つてゐた。自分は此の作の中にある甘い静かさを愛好した。のみならず此の安らかさは或は龍君生涯の果に輝いてゐた安らかさでもあつた。此の作の前に「海のほとり」といふ同じい海岸の光景に生活消息をもたらせた作品があつた。

昭和二年二月。

「河童」

彼は此の「河童」を書きながら此作は多分君は好まないだらうと云つてゐたが、もう百枚も書

いたと頗る元氣にあふれてゐた。

或批評家は「河童」を彼の知識的な産物として批評した。また或月評家はこれを童話として品評した。また或批評家は彼でなければ書けぬものだとして所断した。孰れも當り孰れも當らないやうであつた。自分に云はすれば「河童」は彼の苦汁のやうなおもちや箱を彼が整理して見たまでのことであるやうな氣がする。或はさうでないかも知れぬ。併乍、彼のおもちや箱は何時もああいふ風の品に満ち、ああいふ風のおもちやが一杯に詰つてゐることは嘘ではない。——彼はこの作に於て彼の人生と社會觀的なるものに一應何等かの結論を試みようとしてゐたらしかつたのだ。しかも彼は此の中に當然書き残すべきものを書き遺し、彼の云ひたいことは半ば云ひきつてもゐた。

昭和二年二月。

「手紙」

此短篇の中にある毛蟲や蜂や松林の風景などが、讀後に頭に鋭く残つてゐる。毛蟲のところは談話筆記をした人が他の描寫よりも作者が乘氣になつて話したことを、或雜誌に書いてゐた。

晩年に近い作。

昭和二年六月。

「三つの窓」

三つの小篇。

彼は彼の愛吟する詩を文章の句を點出した點鬼簿の場合のごとく、此の短篇にも敢て挿入した。

君看双眼皮

不語似無愁

昭和二年六月。

「或阿呆の一生」

龍君死後に發表された遺稿の一つである。

一篇あてに原稿紙を、更めて書いてあつたのは、恐らく興に乗じる毎に日課的に書き續けて行つたものであらう。同様に此の原稿紙が彼の机の上に枚數を重ねて行く毎に、何者かを豫期し乍ら彼は彼の部屋からも見える、幽遠だか虚無だか甘い死だか平安だか、他人にはよく判らない本人にはしつかり握られてゐるものに、一日づつ接近して行つたものであらう。尠くともかういふ

一枚か二枚の原稿に最後の壓搾的な手法と根氣を充填し乍らゐた彼は、文人として仄々した生涯的な末期の喜びに似たものを感じてゐたに違ひない。尠くともその行文のなかにチカチカと光る冴えたものは、末期の熱情を震はし乍ら冬枯れの蔓のやうに組合うてゐる。文人が最後に揮ふ氣魄として或意味では文學史上にも、殆ど比類なき勇敢な戦闘を續けたものであらう。

彼は彼の凡ゆる交友、社會、傳統、繪畫、音樂、就中、彼の愛情的なものをも此の「阿呆の一生」の中に完膚無き迄に解決した。此の解決は凡ゆる輝かしい燦つた光りのなかに、最後迄持つてゐた劍のごとき熱烈な詩的精神を閃めかしてゐた。書棚の梯子を登る彼は最後に筆も執れなくなる迄の、張りつめた神經ばかりの人に細れる迄、「細い劍を杖に」しながら、彼は最後の美しいもの、惡を露くもの、書きものを、人間的なるものを見棄てなかつた。

昭和二年六月。

「西方の人」

「續西方の人」

彼が此の作を書いた氣持には、最後の彼の戰鬥的な美と詩と眞實と、何ものをも肯定する彼自身「西方の人」が既に彼のなかにおもかけを形作つてゐたのである。

昭和二年七月。

「或舊友へ送る手記」
遺書。

龍君は昭和二年七月二十四日に自刃した。

自分は此の解説を書き乍ら全集を一々頁に當つて讀み、全集の巻頭にある寫眞を一日に幾度も見る機會を餘儀なくされた。就中、自分は七歳頃の彼の寫眞を見てヒドく何ものかに打たれた。これはどういふ譯だか知らない。——或朝のときは近くに蓄音機の音楽が起り、原稿を書き乍ら自分は變な氣にさへなつた。自分はかういふ機會に彼と一週間をともにした氣持にもなり、仕事の後には晩は街に出て自動車に乗合ふやうな氣がしたのである。長身の彼は愛杖を横たへ、埃に濁つた街巷のトモシビを恍惚と見入つてゐた。

八 深夜の人

雨があがると虹が立つた、素晴らしい美しい虹だつた。群衆は一どきに前側に列をすゝめ巡査はなぜか危ないと云つて、群衆の亂れるのを制した。みんなは虹を見ようとしてゐるのだ、虹なんぞ見るのにこんな人出があるなんて不思議な日である。空は薄暗がりのなかに真中から陶器が二つに割れたやうな割目を見せてゐて、そこから一面に斜陽のやうな明るい光を見せてゐた。

「いつたい、これはどうしたのだ、虹なんぞ見たつて仕様があるまい。」
死んだ小説家が僕とならんで、ちよつと虹の方を見て、愚かなることよといふやうな顔をした。「虹ばかり見に出たのではない、これは天變地異のある證據ぢやないか、何だか世間ががやがやしてゐる。みんなの顔を見ても眞黒になつてゐるぢやないか。」

僕らは何やらまだお喋りをつづけて歩いてゐるうちに、群衆は一どきに感極まつて聲をあげた。聲はそらの方に向けて上げられたのだ。僕らも慌ててそらを仰ぎ見たが、僕らはそこに一頭の龍がそらから五色の雲を掻き起しながら、下界に向つておりてくる姿を眺めた。

不思議なことにはその龍はすゝぶん大きかつたけれど、支那の竹細工で出来た龍みたいで五つの節からなり立つてゐた。頭と胴が三つ継ぎになり、尾は伊勢鰻のやうに開いて透き徹つてゐた。伊勢鰻といへば龍の全體がそつくり途方もない大きい伊勢鰻のやうに見えた。墨と虹と白墨とでそめ上げ、ところどころに黄金の鱗が描かれてあつて、よく見るとそれは紙で作つたものらしかつた。動かたばにざわざわ音がした。にも拘らずその気分は驚くべき立派な、古來から僕らが小説やお伽話や詩や俳句で教へられた龍にちがひなかつた。いまだきこんな龍が下界に降りるなんて奇蹟でもあるにちがひない。

「見たまへ龍の胴ッ腹から人間の足が一杯下つてゐるぢやないか。あれは君、越後獅子のやうに紙の龍を擔いで練り歩きしてゐるのだぜ。愚人を詐らかせる悪者の仕業かも知れん。」

成程僕は、始めて龍の頭の下にも、胴ッ腹にも、尾の方にも中にはひつて龍をかついでゐる人の足がによき／＼毛脛までそよがせてゐるのを見た。しかもどの足もみな雲のやうな薄墨いろに塗つてあつて、一見、けふの怪しい曇天のいろと異つて見えるところがなかつた。

それにしても僕は生れてはじめて龍を見た驚きを、假令、人間の足が下から覗いて見えるにしても、變へることができなかつた。

龍はしづしづと道路をあるいて行つた。群衆は誰一人として龍に人間の足がついてゐることを

嘲笑するものもゐなければ、殊更に氣をつかつてゐるらしい氣はひもなかつた。只、いちじるし讚仰の聲と心があつたばかりだつた。感嘆の聲が寺院のなかにゐるやうに群衆をゆき亘つて、それが町ぢうに音楽のやうにひろがつて行つた。僕は龍の眼の玉が子供の石蹴り遊びのガラスの玉ほどあつて、尾が夜會の扇のやうにひろがつてゐるのを美しいと眺めた。

「この龍はめすぢやないか。」

「どうして君にそれがわかるの。」

「だつて羞かしさうにお腹を時々ゆすぶつては顔を伏せて行くぢやないか。腹を見たまへ、卵が一杯詰つてゐる。駝鳥のやうな嚴丈な卵をしこたま積み込んでゐやがる。」

「あれが卵か。」

龍の下腹は積を逆さまにしたやうな卵の列で、一杯であつた。

「なるほどめすだ。仔を生みに下界に降りて來たのだらう。」

「この際さうみとめるのが一番早道の考へだね。」

僕は紙づくりの龍であること、人間が擔ぎ廻つてゐることをすつかり忘れてしまつてゐることに、僕は自分の氣持を疑ふやうにもなつてゐた。

龍は先刻もいつたやうにしづしづと通りすぎてしまつた。通りすぎてしまつたかと思ふと拭い

て取つてしまつたあとのやうにきれいに龍は消えてなくなつてしまつた。しかし群衆は依然うごかなかつた。まだ何か見るものがあつてさうしてそのやうに動かすに待つてゐるやうであつた。

もつと面白いことがあるかも知れない、これは見物だぞと僕は死んだ小説家をこづいた。

彼と僕とは電信柱にもたれ、退屈と物好きであるとしか見えない群衆と同じい心をもつやうになつてゐた。群衆はがやがや囁きをはじめた。先刻の龍の下りてくる前と同じい程度のがやがやであつた。そのうち空が陶器のやうに割れるのであらうと考へると、やはりその通りであつた。明るい背光のなかからこれは又聞いたことのない悲しい音楽が起つて來たが、それは映畫などの悲しい時の氣分をあらはすにふさはしいヴァイオリンのきうきういふ音色に似てゐた。それを聞いてゐて僕は人知れずどれだけ泣いたか知れなかつた。つまり僕は大方の観客と同じく活動を見にゆくことは、いつも泣きにゆくやうなものであつた。カイゼルはあの年になつて老の涙を映畫見物中におふきになるさうであるから、僕なんぞ泣くのはそんなに羞かしい譯のもでなかつた。女給や女學生や世帯で苦勞した女がべたべたに泣くやうに僕もまたべたべたになつて泣くのであつた。一たい僕は音楽を欲するときは大抵女にほれてゐる時か、女のことを考へてゐる時か、女のことを思ひながら詩や小説をかいてゐる時かであつた。そのほかに音楽などの必要がなかつた。女にほれてゐるときに音楽をきくと、ほれてゐる事がらが一そう楽しくあまたるくなり、とろと

ろになつてくるので好きであつた。音楽があるために女がうつくしく見えることも實際であつた。だから今ヴァイオリンがきうきう鳴るのをきいてゐると、女にほれてゐないときだから、ちつとも面白くないのであつた。面白いどころか、からだに寒氣がしがちしてくるくらゐだつた。

よく聞いてゐるとその音楽は死の行進曲であつたのだ、悲しい筈である。死んだ小説家はそんなものに耳もくれないで、こんどは碌な行列ぢやないぜ、きうきう絃をこすりやがつていやに悲劇の前ぶれをするから面白い筈がないと云つた。それにも拘らず彼はのんきな顔をして、しげしげと天の一方をながめ込んでゐた。

行列はまさに行列であつたが、死人の行列であつた。女なんぞはみんな裸で男もさうだつた。

女の裸なぞは少しも美しくないばかりか、みんな煮しめたやうな黒いからだをしてゐた。

しかし顔は瘦せた石佛のやうに美しく見えた。美しいといふよりも烈しい清瘠さがあつたのだ。群衆はしんみりして了つて誰も聲も立てなかつたし、咳一つしなかつた。全く畏つてゐる姿だつた。それがあんまり静かだつたのでちよつと反感をもつくらゐであつた。行列は相不變しづしづと歩いて行き、音楽はもう起つてゐなかつた。

死んだ小説家は小鳥が籠から放れると、ふいに高い木の頂に止つてやはり一應籠の方をふりかへつて見るやうに、熱心に行列を見てゐた。僕は彼がにはかに知己に會つたときの元氣を取りも

どしたやうになつてゐるのを感じた。

君は死んでゐるのか生きてゐるのか、どつちなんだと云はうとして、それを云ふことが大變なことになると思つて僕はいふのを控へた。人間はいふべきことを氣のついたときには控へた方がよい、そんなことを僕は日ごろちよいちよい考へてゐた。

行列は絶えないばかりか、群衆のなかからその行列に加はらうとするものがあつてその人が道路に出るごとに、群衆は危ないから止めろとか、連れて行かれるぞとか、かへつて來られないよとか、女房や子供を可愛さうだと思はないのかとか、あとに残るものは日干しになるぞとか、がやがやと口々に憚るやうな聲をして囁き合つた。しかし道路に出た人間は行列のちきちかくなる、酔うたやうになつて踊るやうな足つきで行列のなかに紛れ込んで行つた。まるでダンスみたいに踊るのだ。そんな人間はすぐ見境ひのつかない行列のなかの同じい顔に刷り込まれて行つて、見定めようとしてもまるで分らなかつた。事實、さういふ小さい事件があるときだけ、しづしづと行くべき筈の行列が深い淵の底がとても深いやうに、ひと呑みに呑み込まれて了ふのである。その小事件は隨所におこなはれ始めた。一人出て行くとまた一人出て行つてはつとするまに、うしろの方から落し物をさがすやうな恰好をして馳つて出て又呑み込まれて行つた。僕は恐ろしくなつた。僕は馬鹿だからひよつとして人真似をして何時どんな氣まぐれから飛び出すか分らない

からだつた。僕は手に汗をにぎり喉を乾かし、じれじれして、大きな聲をしてみんな用心しろ、これはとても恐ろしい人食の行列だぞ、そんなものを見物してゐることは危険だから早く家へかへつた方がよいぞ、これは人間をだましに歩いてゐるあくまの行列だと怒鳴らうかと思ふくらゐであつた。しかし群衆は去らうとしなかつた。ぼつりぼつりと行列にまぎれ込むものが次第に殖えて來て、何百萬あるか知れないが次から次へと、うちやうちや蛆のやうに湧いては絶えることがなかつた。

僕は友だちの顔をながめたが、べつに變つたところがなかつた。僕は安心してにやにや笑つて云つた。

僕はまた彼がまるで知つてゐることのやうに、尋ねるやうな形で云つた。

「この行列はいつたい何時まで續くんのだ。」

さっきの龍のはうがどれだけ面白かつたか知れやしない。

「この行列は多分けふ一杯つづくだけのものがあるよ、あとはまだ雲の中を歩いてゐるから。」
彼はぐづぐづしてゐて歩き出さうとしなかつた。それに行列のなかに知り合ひでも捜し當てるやうに、ちらりちらりと棘のやうに固くなつた顔を見くらべては、飽きる様子もなかつた。群衆から依然飛び出して列に加はるものが殖えるばかりで、もう數へることすらできない、僕はしま

ひに膝がしらがくがく折れ出しさうになり、さうなると道路に飛び出すやうな氣になるのだ。
「死んだ小説家がその時候に何んでもないやうに、平氣で云つた。

「では君、失敬。」

かれはさういふと、なりの高い背丈を群衆から放して、列の中にまぎれ込んで行つた。あんな
り突然な自然な出來事だつたやうな氣がして、僕は呆氣に取られて眺めてゐた。彼もまたお多分
に漏れず行列に加はると同時に何が何やら、そしてまた誰が誰やらわからぬやうになつて了つた。

發句に就て

芥川龍之介が何よりも元祿に心向け其調べに従うたのは、古きに新しきを汲む心があつた爲
であらう。漱石に於ける蕪村を芭蕉に補足してゐた彼は、その潔癖と苦澁と洗煉との砦の中で、
廻かに元祿の城を打眺めてゐた。それがいかにも彼らしい好みで又それ以外に彼の心が向ふとは
想像もされないことである。彼の謂ふところの發句もまた全幅の藝術上の精髓だといふのも、彼
の苦澁があつた後に初めて言ひ得る言葉であらう。

併乍ら自分は全然彼の發句に異議なしに賛成するものではない。彼の好んでつかふ古調は時に
發句に皮かぶりの古さをつけないことも無いではない。別離の句に、「霜のふる夜を菅笠のゆく
へ哉」の如き離愁は一應その氣もちも分りながらも菅笠の如きは、餘りに古きに從ひ過ぎ傲ひ過
ぎるやうである。「しぐるるや堀江の茶屋に客ひとり」の情景にしても、そのまま取入れられる
にしても這入り過ぎてゐる調子ではないか。彼のねらふ縹渺は彼の凝り過ぎる證據には「尻立て
て這ふ子思ふや雉子くるま」の即吟を彼は隨筆集に訂塗再考して「ひたすらに這ふ子思ふや笹ち

まき」としてゐる。彼は三日後には原句を動かして打つて付け、付けては動かしてゐる。彼のいはゆるポオドレエルの一行を認める所以は、彼の中では是認されなければならぬ一行でもあるのだ。併乍ら「尻立てて」の即情即景が「ひたすらに……」の後の句に添削され、原句の即情の境を離れてゐることは彼と雖も首肯するであらう。

臘梅や枝まばらなる時雨ぞら

白梅や苔うるめる枝の反り

彼は一概に風流人でも俳人でもない。爐を去れば世上の埃や文壇諸公との應酬に追なき匆忙の男である。文壇の垢や埃の中に或時は好んでお饅舌をする男である。さういふ意味の文人臭を抜け上つた生の味の文人であらう。この意味で志賀直哉氏は最つと風流人であり文人の骨格をもつてゐるかも知れぬ。志賀氏の清澹は環境自身が補うてゐることも、ほほ芥川君に似てゐる。芥川君が喜んで曇天の美しさを見、枯れ葉の静かさを詠むところの境地は又彼が小説の中にある「或夕暮」「或薄暗り……」を好んで書くのと孰れも渝らない。

彼が一句の發句にも藝術の大事を稱ふることは、細微なるものは最大のものを意味する點でロダンの説と一致してゐる。彼が此處に心を止めることは詩情を解する所以を表してゐる。すくなくとも芭蕉の詩情を狙ふ彼は自ら好んで古調の沈潛の中にゐるのは、彼の彼らしく又動かない彼自身を知つてゐるものであらう。

晩年に私と萩原朔太郎君と芥川君とで、本郷で晩飯を食べての歸途、神明町の小さい喫茶店にお茶を喫みに這入つて行つた。端なく芥川君と萩原君との間に議論が起り、議論の嫌ひな僕は二人の様子を見ながら煙草をふかしてゐた。萩原君は蕪村が芭蕉より面白いかか偉いかか云ひ、芥川君は芭蕉の方が偉いと云つた。萩原君は芭蕉の發句が觀念的であるといふと、芥川君はそんなことはない、この句はどうだ、ではこの句はどうだ、この句にも觀念的なところがあるかと立ちどころに六七句くらゐの芭蕉の句を、覆ひかぶせるやうに續けさまに讀んで、猛々しく突つかかつて行つた。その勢ひは恰も芭蕉が親兄弟か何かでもあるやうな語調であつた。逝去二ヶ月程前だつたので勢ひが勢ひ立つと血相を變へるやうなところがあつたのである。それほど芭蕉の發句は當時の芥川君に好かれてゐた。好かれたといふよりなく、はならぬものだつたらしいのである。

芥川君は或日、自分の家に来て芭蕉の「夏山に足駄を拜む首途かな」といふ句を示し、この句

には驚いたと言つた。北海道の旅行から歸つた就死前のことである。芭蕉のこの句は修驗光明寺の句で、行者の履を拜む心を詠んだものである。ともあれ芥川君はさまざまの書物の中に、自分のそのころの心持の丈を搜つて見てゐたことが解る。「旅びと」の詩にも芭蕉の「山吹や笠にさすべき枝のなり」が詠みこまれ、ぢかに芭蕉を百讀してゐたものらしい。さういふ芥川君の沈着と高雅の情には心惹かれるのである。

龍之介の自ら元祿の古詞にならうてゐる所以のものは、單に古きしらべに従うてゐるのではなく、巍然たる元祿の流れを汲んでゐるのである。既に幾度となく波瀾重疊した俳壇の人々から見れば、彼の發句は一見陳套の嘲を買ふかも知れぬし、今更蕉風に低迷しなくともよいではないかと言はれるかも知れない。併乍ら芥川君のねらひは元祿諸家の古調や文章、去來のさびしをりを學んでゐる譯ではない。ただ叮嚀に蕉風のねらひを今人の彼が心に宿してゐただけである。彼は元祿人が引いた弓づるをその的を最つと強く引いてゐるに過ぎない。

夏目漱石に教へを受けた龍之介の發句なども餘技のやうに言はれ、あるひは餘技であつたかも知れぬが、彼自身は句中の鬼と格闘するほどに句中に悶えてゐた。その狙ひ方は漱石よりも廻かにくるはないところにて生涯の七十何句はそれぞれに立派な發句をかたちづくつてゐた。

元祿の凡そも一生のうち七十何句しか残してゐないやうに、芥川君の句も取捨されて數少なくしか遺つてゐないのは却つて床しいやうな氣がする。——芥川君は一年前に作つた發句を取り出して、それを作り直して、かういふ風に置きかへたとか言つてよく示してゐたが、さういふ丹念さや熱情などは漱石の句に見られなかつた。あながち、それは芥川君が凝り性であつたばかりでなく、僕から言へば芥川澄江堂は發句を作ることが甚だ好きであつたのだ。好きといふことは芥川君にとつてその藝術的良心ともいふべきものが手傳つて、何度も作りかへたり置きかへたりさせたのである。

漱石の句が子規の流れを汲んだ明るい頭のよい發句であるとしたら、澄江堂はあくまで神經の響を句の中にさへ漏してゐたと言つていいのである。漱石の程度の句作ならば天下の俳人で併び立てられる人が多いが、芥川君の句となると、素人が俳道の奥にはいつたやうで、これを他に求めるやうなことが出来ないのである。その鋭い見方に至つては漱石のゆつたりしすぎたやうで一面に鈍重さを持つ句風とは、まるで反對であると言つていいのだ。

芥川君の描寫や表現をよく讀み分けると、いかにも發句を勉強した人らしい緊めつけた文章が見られるが、それはやはり發句道できたへ上げた手腕だと言つてよい。「枯野抄」などに芭蕉の臨終をゑがいたところに、文章、去來、其角や嵐雪の一人づつを短かい行文の間に、いかにもそ

の人らしい風格を抉り出してゐるところなども、やはり發句に打ち込んだ人でないとあそこまで行けないのだ。しかも芥川君の小説の自然描寫などに氣をつけて見ると、さながら發句のやうな效果をあげてゐる文章がある。その表はし方の淋しい鋭さを含んでゐるあたりは、彼の發句に取り扱ふ氣持を表はしてゐるのである、内側へ詰め込むやうな素材の描寫をぎりぎりまでに仕送けた澄江堂は、何といつても發句のきたへが彼にあればどの描法を教へたと言つても過言ではないのである。

發句がたとへ短かい形式であつてもそれを片手間に現はすといふことはいかにも困難であり、そして藝術は孰れか一つのものにしか力を分けることができないことが分るのである。發句も作り詩もかくといふ譯にはゆかないのだ。片手間に發句が作れないところに俳句が堂々たる別箇の藝術であることがわかるのである。芥川君はよく發句をつくつてゐると小説がかけないと言つてゐたが、僕なども一句を作るのに一日苦吟してゐて仕事が捗らなかつた。だから仕事をしてゐる時はなるべく發句に近づかないやうに心がけてゐる、僕はこれを俳魔と呼んで心中おそれを爲してゐたのだ。

「澄江堂句集」は故人の香奩返しとして、香花を供へた人々への高雅な配りものであつた。自分と故人澄江堂とは故人在世の折屢々句集上板の事に言ひ及んで、自分は郷里に和紙の出産地があり印刷も亦甚だ廉價である故を以て、自分の句集出來の後に故人も亦印刷の意嚮を漏してゐた。併し風月の懊惱は君を君の好める鬼籍に遷し、最大の楽しみだつた句集上板は君の一瞥をも煩はすことなく、遺族の手で印刷されたのである。

彼の發句は明治年間に於て子規や漱石、紅葉の諸家の俊英を以てするも、決して彼らの背後に立つものでなく、秋晴の中に巍峩として立つ一瘦峰としても、彼等の群峰を穩かに摩してゐた。後代明治の發句道に落筆する俳詩壇の新人は、先づ彼の發句を子規とともにその俳史の上に述説するであらう。彼が一個の小説作者である以外に發句道にいか「青き汗」を流した俳詩人だつたかを、念々絶ゆることなき纏茫の作者だつたかを噛み當て索り當てるであらう。彼を元祿の靜か世にその世にその生を享けしめ、蕉門の徒として存在せしめたならば彼は先づ大凡兆を越えたる作者たり得たであらう。

茶晶に入り日しづもる在所かな

野茨にからまる萩のさかりかな

春雨の中や雪おく甲斐の山

彼は講演旅行のため北海道へ旅行したが、歸來先づ芭蕉の奥の細道の行脚は、元祿の當時では死ぬ覺悟で行かねばできぬ困難な旅行だつたことを、彼自身經驗することに依つて新しく發見したやうに自分に話してゐた。その時の發句であり彼の作句の最後の吟草は「旭川」と前書した左の穩和な一句であつた。

雪どけの中にしだるる柳かな

彼の發句に微塵も濁りを見ないのは、その稟性に清さがあつたためであらう。何よりも彫琢を凝らした彼は或意味で彼の小説作品よりも、形式が狭小だつたためにより苦心したかも知れぬ。その全生涯を通じて百吟に猶足らない發句は、恰も凡兆が句生涯を通じて七十數句しか残さなかつたのも同様の苦汁である。

彼は發句を餘技扱ひにはせず、殆ど其打込み方は少しの弛みも見せてゐなかつた。何よりも我々の氣附くことは、あらゆる發句の眞實は作者がどれだけ其一句に打込み相撲うてゐたかと云ふことである。その意味に於て彼は堂々と發句の宮殿裡に打込んでゐた。漱石、紅葉にはそれほ

どの眞剣さが無い。彼が子規以後の清閑な一存在を印した所以は此處にある。後代の史家は彼の發句を特筆してその眞實的切迫を記録するであらう。

發句

木がらしや東京の日のありどころ
夏山や山も空なる夕明り
木がらしや目刺にのこる海のいろ
臘梅や枝まばらなる時雨ぞら
お降りや竹深ぶかと町のそら

一遊亭來る

草の家の柱半ばに春日かな
白桃や苔うるめる枝の反り
初秋の蝗つかめば柔かき
桐の葉は枝の向き向き枯れにけり

自嘲

水涕や鼻の先だけ暮れ残る

元日や手を洗ひをる夕ごころ

あてかいな あて宇治の生まれどす

茶島に入り日しづもる在所かな

野茨にからまる萩のさかりかな

洛陽

麥ほこりかかる童子の眠りかな

伯母の言葉を

薄綿はのばし兼ねたる霜夜かな

漢口

ひと籃の暑さ照りけり巴旦杏

病中

あかつきや蝉なきやむ屋根のうら

しぐるるや堀江の茶屋に客ひとり

再び長崎に遊ぶ

唐寺の玉巻芭蕉肥りけり
更くる夜を上ぬるみけり泥鰯汁
木の枝の瓦にさはる暑さかな
夏の日や薄苔つける木木の枝

一遊亭を送る 別情怡然

霜のふる夜を菅笠のゆくへ哉
山茶花の苔こぼるる寒さかな

高野山

山がひの杉芽え返る訝かな
雨ふるやうすうす焼くる山のなり

再び鎌倉平野屋に宿る

藤の花軒ばの苔の老いにけり

震災の後増上寺のほとりを過ぐ

松風をうつつに聞くよ夏帽子
朝顔や土に匂ひたる蔓のたけ

春雨の中や雪おく甲斐の山
竹の芽も茜さしたる彼岸かな
切支丹坂を下り来る寒さ哉
初午の祠ともりぬ雨の中

金澤

簀むし子や雨にもねまる蝸牛
乳垂るる妻となりつも草の餅
松かけに鶏はらばへる暑さかな
苔づける百日紅や秋どなり

一平逸民の描ける夏日先生のカリカチュアに

餅花を今戸の猫にささげばや
明星の銚たまりにひびけほととぎす

寄内

ひたすらに這ふ子おもふや笹ちまき

越後より來れる婢、當歳の子を「たんたん」と云ふ

たんたんの咳を出したる夜寒かな

久米三汀新婚

白じらと菊を映すや絹帽子

臘梅や雪うち透かす枝のたけ

春雨や檜は霜に焦げながら

偶坐

鐵線の花さき入るや窓の穴

車中

しののめの煤ふる中や下の關

庭土に皐月の蠅の親しさよ

悼亡

更けまさる火かけやこよひ雛の顔

唐棕櫚の下葉にのれる雀かな

鶴沼

かげろふや棟も沈める茅の屋根

さみだれや青柴積める軒の下

糸萩の風軟らかに若葉かな

破調

兎も片耳垂るる大暑かな

朝寒や鬼灯垂るる草の中

金澤

町なかの銀杏は乳も霞けり

旭川

雪どけの中にしだるる柳かな

芥川澄江堂は大正六年から昭和二年に亘つて七十七句を残してゐる。ここには、そのうち五十六句を採録した。

短歌に就て

齋藤茂吉氏の短歌を愛誦してゐた彼は、雑誌「アララギ」調を敢て護つてゐた。何事も可ならざるなき芥川君も、和歌は發句に比べて、發句の方が上達してゐた。大抵、和歌は手紙の端に書き込むか、仕事のひまの手すさびに作られたものらしかつた。併しさすがに或る旨さを持つてゐて、大したそつのない、なごらかな調子を巧みに抒べてゐる。

短歌

丸簀の二階

しぐれふる町を幽^{かき}けみここにして海彼の本をめでにけるかも

小澤碧童に

窓のへにいささむら竹軒のへに糸瓜ある宿は忠兵衛が宿

上部

うす曇るちまたを見つつ暗緑の玉子食ひをれば風吹きにけり

戯れに河耶の圖を作りて

橋の上ゆ胡瓜なぐれば水ひびきすなはち見ゆる禿^{かむろ}のあたま

湯河原温泉

おぼろかに栗の垂り花見えそむるこのあかつきは静かなるかな
朝顔のひとつはさける竹のうらともしきものは命なるかな

椎の木

さ庭べに冬立ち來らし椎の木の葉うらの乾きしるくなりけり
霜曇るさ庭を見れば椎の木の葉かげの土も荒れてゐにけり

しぐれ

この朝けしぐれの雨のふりしかば濡れしづまりぬ庭土の荒れ
わが庭はかれ山吹の青枝のむら立つなべにしぐれふるなり

室生犀星君に

遠山にかがよふ雪のかすかにも命を守ると君につげなむ

香取先生に

金澤の鯨のすしは目をへなばあぶらや浮かむただに食し給へ

鶴沼

春雨はふりやまなくに濱芝の雫ぞ見ゆるねてはをれども

犬

わが前を歩める犬のふぐり赤しつめたからむとふと思ひたり

病中偶作

わが門のうすくらがりの人のゐてあくびせるにも驚く我は

「芥川龍之介全集」には大正八年から昭和二年に至る間につくられた短歌二十六首が収めてある。
ここに収録したのは、そのうちの十五首である。

越びと 旋頭歌二十五首

一

あぶら火のひかりに見つつこころ悲しも、

み雪ふる越路のひとの年ほぎのふみ。

むらぎものわがこころ知る人の戀しも、

み雪ふる越路のひとはわがこころ知る。

現し身を救けるふみの稀になりつつ、

み雪ふる越路のひとも老いむとすあはれ。

二

うち日さす都を出でていく夜ねにけむ、
この山の硫黄の湯にもなれそめにけり。

みづからの體温守るははかなかりけり、
静かなる朝の小床せとこに目をつむりつつ。

何しかも寂しからむと庭をあゆみつ、
ひつそりと羊齒の巻葉にさす朝日はや。

ゑましげに君と語らふ君がまな子を、
ことわりにあらそひかねてわが目守りをり。

寂しさのきはまりけめやこころ揺らがず、
この宿の石菖の鉢に水やりにけり。

朝曇りすすしき店に來よや君が子、
玉くしげ箱根細工をわが買ふらくに。

池のべに立てる楓ぞいのちかなしき、
幹に手をさやるすなはち秀をふるひけり。

腹立たし君と語れる醫者の笑顔は、
馬じもの嘶ひわらへる醫者の齒ぐきは。

うつけたるころをもちて街ながめをり、
日ざかりの馬糞にひかる蝶のしづけさ。

うしろより立ち來る人を身に感じつつ、
電燈の暗き二階をつつしみくだる。

たまきはるわが現し身ぞおのづからなる、
赤らひく肌をわれの思はずと言はめや。

君をあとに君がまな子は出でて行きぬ、
たはやすく少女ごころとわれは見がたし。

言にいふにたへめやこころ下に息づき、
君が瞳をまともに見たり、鳶いろの瞳を。

三

秋づける夜を赤赤と天づたふ星、
東京にわが見る星のまうら寂しも。

わがあたま少し鈍りぬとひとり言いひ、
薄じめる蚊遣線香に火をつけてをり。

ひたぶるに昔くやしも、わがまかすして、
垂乳根の母となりけむ、昔くやしも。

たそがるる土手の下べをか行きかく行き、
寂しさにわが摘みむしる曼珠沙華はや。

曇り夜のたどきも知らず歩みてや來し、
火ともれる自働電話に人こもる見ゆ。

寝も足らぬ朝目に見つついく日經にけむ、
風きほふ狭庭のもみち黒みけらすや。

小夜ふくる炬燵の上に顔をのせつつ、
つくづくと大書棚見るわれを思へよ。

今日もまたこころ落ちぬす黄昏るらむ、
向うなる大き冬木は梢ゆらぎをり。

門のべの笹吹きすぐる夕風の音、
み雪ふる越路のひともあはれとは聞け。

詩に就て

初めて芥川君をたづねた折に僕は自費出版をした「愛の詩集」を携つて行つたが、二三日後に七八行の詩を書いて送つて寄越した。原稿は紛失して見當らないが、何んでも田端の高臺から茫乎たる下町あたりの畑を書いた詩で、ちよつと立體的な格調があつた。手紙には君の眞似をしてかいた詩だとしてあつたが、その組立があつしりしてゐた。

詩の話をよくしてゐたが、佐藤惣之助君の詩や萩原朝太郎君の詩を好いてゐるやうであつた。時々僕の部屋でちよつと紙と筆とをかしてくれと云ひ、ちかごろ作つた詩だと示すことがあつたが、さういふ時の芥川君はそれが十行くらゐのもので、すらすら覺えてゐて書き下してゐた。晩年の春だつたかに飄然とたづねて來た芥川君は例によつて紙と筆とをかしてくれといひ、一篇の詩を書いて、それを僕の手にわたすと、

——この詩はどうかね。

と、例の鋭いとげとげしい筆蹟の詩を眺める僕を、彼はまじまじと見てゐた。芥川といふ人は

相手の眼を放さずに見つめるくせのある人だつた。あの人は他人の眼を見て物をいふ人はない。女の人にもああいふ眼付をして靜かに眼を眺め込まれたら、ちよつと嘘をつくことが出來ないかも知れない。

芥川君はたいへんに長い睫毛をもつてゐて、その脛が合ふと睫毛が深々と眼を覆ふことがあつた。睫毛の長い人は短命だといふが、あるひはそれがさうであつたのかも知れない。話の途中によく眼をしばたたくほど涙もろいところもあつた。

山吹

あはれ、あはれ、旅びとは
いつかはこころやすらはん。
垣ほを見れば、「山吹や
笠にさすべき枝のなり。」

かういふ詩は古いほど感じが深いね、と鑑定家のやうに僕は頸をかしげながら云つた。

——かういふ全體が前がきのやうな詩には、なにか曰くがあるのかね。

——ただ書いたのだよ。詩としてはどういふものかな。

——「山吹や笠にさすべき枝のなり」をうまく點出したのはいいね。こんな念入りな詩は僕にはかけんね。

——うむ。

芥川君はちよつとうなるやうに嘆息した。その頃、芥川君は返辭をするかはりによく唸るやうな溜息のやうなものをつくくせがあつた。僕はしかしそのとき、山吹やの句が誰の發句だつたかを思ひ出せずにはゐたが、あるひは芭蕉の句かとも思うた。芥川君にさういふと芭蕉の句だよと答へた。

だが、間もなくその詩のことを忘れてしまつたが、亡くなつてから僕はその詩を慌てて見たり、讀むと何も彼も分つて良い哀れ深い詩だと思つた。あの時に充分に意味がわかりかねてゐたが、僕でなくても誰も突然あの詩を示されても、わからなかつたであらう。

僕はこの詩の旅びとといふ言葉や、山吹の枝を笠にさす心持が永い間頭にのこつて、ふと口ずさんで見えて哀しみを感じるがあつた。詩としても非常にうまい。芥川君の生涯に二つとない秀れた詩であらう。まるで旨い墨繪のやうであつて、字句のあひだに一字のたるみなぞがない。

一たいに芥川君の詩は發句ほどよくない。發句などよりも些か馬鹿にして書いた思ひつきふ

うなところがある。しかし遺珠などはさまざまに置きかへて苦心してゐるが、あれは苦心といふよりも口調とか韻律とかにあまへたところがあるのである。

芥川君の詩は發句と同じい苦心をしてゐるやうであるが、發句にはひどく打身になつてゐても、詩は大抵悲しみ歎くといふ情をあらはしても、それに身を委してゐるやうなところがある。つまじり歌ひながら書きつづつた詩がたくさんにある。詩中にもだえてゐるところがあつても何處かで遊んでゐるやうなところがあるのだ。大ていの詩は人に與へて書かれたものであり相聞風な趣きの作品である。小説のなかに悶えてゐた彼は時にしばしば机をあらためて、詩をかいて疲れを醫やすといふときが多かつたにちがひない。さういふ悲しい閑日月を弄することは忙しい生活にあつては、一そう楽しいやうな氣がするものである。芥川君の書齋は本やら骨董やらで一杯であつたから、一入、詩中にはいり込んで心遣るといふことに、自らも好んでゐた哀れ深さに楽しんだことであらう。

相聞 一

あひ見ざりせばなかなかに

そらに忘れてやまんとや。
野べのけむりも一すぢに
立ちての後はさびしとよ。

相聞 二

風にまひたるすげ笠の
なにかは路に落ちざらん。
わが名はいかで惜しむべき。
惜しむは君が名のみとよ。

相聞 三

また立ちかへる水無月の
歎きを誰にかたるべき。
沙羅のみづ枝に花さけば
かなしき人の目ぞ見ゆる。

これらの詩はことごとく口調のよい、詩にあまへた人のくり言ばかりである。そのほか旋頭歌

「越びと」二十五首ことごとく人にあたへ、人をおもひ、人を哀しんだ歌の数々である。

元來芥川君は小説家であるよりも詩人風な人からであり、好んで詩人たることを喜んでゐた人かも知れなかつた。詩人的であることは小説家であるよりも私なぞには親しいのである。小説ばかり書いてゐる人間は、實際、小説くさくてその作品にあぶらがなく、かすかすな氣がして讀めないものである。

芥川君は送られる大ていの詩集をよんでゐたが、それが無名詩人の場合でもさうであつた。僕など讀まない詩集でも、ちやんと送られると讀んでゐて、かういふ詩人がゐるが、ちよつと旨いぢやないかといふことが屢々であつた。「小學讀本」のなかに編む詩についても、かれは大ていの詩人の詩を讀みつくし、それを克明に書き取つて撰んでゐたが、その撰み方にはさすがに眼が行きとどいてゐて、そつのない詩が多かつた。誰々の詩を讀んで見たが、まるで佳い詩がないとか、誰々のやうな拙い作品をかく人がどうして詩人になれたのかとか云つて鋭い詩人論を爲すことがあつた。

晩年近くに書いた詩は詩人としても迥かに一流にまで飛び越えた彼がゐた。詩に睨みの利いた芥川君は、就中「旅びと」の抒情詩、「僕の瑞威ニッポから」の中の「ドストエフスキーの詩」なども、立派な出来栄を示してゐた。實際芥川君は何よりも詩人だつたといふことは、何よりも詩人中の詩人だつたことを證明するものであつた。誠の詩人といふものの恐るべき「天火」を彼は擁いてゐた。

「澄江堂遺珠」は芥川君の詩集の一せつをなすものであつて、聯作風な愁を續け歌つたものである。作品からいつては遺珠として珍重すべくも、詩としては極めて稚拙であつて僕の考へではこれを發表しない方がよかつたと思うた。

芥川君の詩は全集にをさめた作品が遙かに立派であり、芥川君もあれほどの詩なら印刷をちゆうちよしないであらうが、遺珠は二三篇をのぞいたほかは破いて捨ててしまつたであらう。「芥川龍之介全集」を編輯した諸氏が遺珠を除いたのは聰明であつたのだ。

いまこの美しい詩集となつてひもといひて見て感じることは、詩なんかは決して手帳に残したくないものだといふことである。詩は純情に引きよせらるべきものだからあとから絶えず直したくなり直したあげくこれを破いてしまふものも詩だからである。従つてはづかしいことを書いてゐるときもあるのだ。

編者、佐藤春夫氏の親切な傍註も手の込んだ愛情であつて、佐藤氏であるからあれだけにまとめあげたのである。他の何人も及べないたはりを持つて詩魔の歎きを聞いてゐる。

然しながら、もし芥川君の詩集として世にこれをおくるのなら、全集中の代表詩をおもにしたこの遺珠をあとに置くべき筈だ。遺珠はほとんど聯作的に一せつをなすにすぎず、それを一卷としたのは芥川君の詩集としてはどうかと思ふ。遺珠は遺珠であつて別物だといふことはいへるが、詩集として世に残すならば返す返すも、「旅人」その他「町のそら」の秀作を加へて、めでたき一卷となすべきであつた。然しこの點で佐藤氏も思ひ切つてさうしたのであり、考へあぐんだことであらう。

これらの詩作は支那紀行時代のものであつて、自ら晩年の作品の愁ひ悲しみを帯びてゐないところから見ても遺珠風なほひをどれだけでも帯びてゐないのである。

芥川君は詩を好いてゐて、どこまでも素人詩人であつたために、とくに詩のなかの一行か二行くらゐが殊さら光つて見えた。あとの行が稚拙であるのに秀でた一行か二行かが素晴らしく輝いてゐた。

ひとをまつまのさびしさは

時雨かけたるアーク燈

まだくれはてぬ町ぞらに

こころはふるふ光かな

「こころはふるふ光かな」などは芥川君の韻律を壓迫した秀でた一行をたたきあげてゐる代表的な作品である。しかし前の三行などは詩としてはなつてゐない。芥川君自身でも、いや、これは拙いんだよ、しかし後の一行はいいぢやないかといふにちがひない。

「おもふは遠き人の上」の作品でも、それだけがいひたさに、詩中にもだえてあがいてゐる。これは芥川龍之介君ばかりでなく詩をかく人は大抵ここまで追ひつめられて來てゐるのだ。しかし芥川君ほど根氣よく一つことを思ひつめ、それを追ひ詰め最後までもうらうたるものを本物として見ようとした人はすくなかつた。

「澄江堂發句集」は芥川君の發句を選びぬいて集めたものである。しかし「澄江堂遺珠」はその點で詩集であるよりも、詩の原稿の複校本のやうな物である。それでもよいのだ。しかしそれならばことごとく詩の草稿を其まま印刷してほしかつたのだ。佐藤氏にもその考があつたかどうか知らぬが、僕ならばそこまで運んで行くのだ。さうすればもつと生一本な歡きを見ることができるとだ。幾十度も詩をかきかへてゐる苦行みたいなのは、原稿を見て一そう胸にひしひしと來るのだ。印刷にするとその人くさい苦しみがはげてしまふのだ。

詩

山吹

あはれ、あはれ、旅びとは
いつかはころやすらはん。
垣ほを見れば「山吹や
笠にさすべき枝のなり。」

相聞 一

あひ見ざりせばなかなか
そらに忘れてやまんとや。
野べのけむりも一すぢに

立ちての後はかなしとよ。

相聞 二

風にまひたるすげ笠の
なにかは路に落ちざらん。
わが名はいかで惜しむべき。
惜しむは君が名のみとよ。

相聞 三

また立ちかへる水無月の
歎きを誰にかたるべき。
沙羅のみづ枝に花さけば、
かなしき人の目ぞ見ゆる。

冬

まばゆしや君をし見れば
薄ら氷に朝日かがよふ

えふれじや君としをれば
臘梅の花ぞふるへる
冬こそはここにありけめ

手袋

あなたはけふは鼠いろの
羊の皮の手袋をしてゐますね、
いつもほつそりとしなつた手に。
わたしはあなたの手袋の上に
針のやうに尖つた峯を見ました。

その峯は何かわたしの額に
きらきらする雪を感じさせるのです。
どうか手袋をとらずに下さい。
わたしはここに腰かけたまま
ちつとひとり感じてゐたいのです、
まつ直に天を指してゐる雪を。

洞庭舟中

しらべかなしき蛇皮線に、
小翠花は歌ひけり。
耳環は金にゆらげども、
君に似ざるを如何にせん。

劉園

人なき院にただひとり

古りたる岩を見て立てば、
花木犀は見えねども
冷たき香こそ身にはしめ。

時雨

西の田の面にふる時雨
東に澄める町の空
二つ心のすべなさは
人間のみと思ひきや

沙羅の花

沙羅のみづ枝に花さけば
うつつにあらぬ薄明り
消なば消ぬべきなか空に
かなしきひとの眼ぞ見ゆる

船中

ゆふべとなれば海原も
遠島山も煙るなり
今は忘れぬおもかげも
老いては夢にまがふらん

雪

初夜の鐘の音聞ゆれば
雪は幽かにつもるなり
初夜の鐘の音消え行けば
汝はいまひとと眠るらむ

悪念

松葉牡丹をむしりつつ

ひと殺さむと思ひけり
光まばゆき晝なれど
女ゆゑにはすべもなや

曉

「ひとの音せぬ曉に
ほのかに夢に見え給ふ」
佛のみかは君もまた
「うつつならぬぞあはれなる」

戯れに (1)

汝と住むべくは下町の
水どろは青き溝づたひ
汝が洗場の往き來には
晝もなきづる蚊を聞かん

戯れに (2)

汝と住むべくは下町の
晝は寂しき露路の奥
古簾垂れたる窓の上に
鉢の雁皮も花さかむ

「澄江堂遺珠」から

或る雪の夜

かそかに雪のつもる夜は
折り焚く柴もつきやすし
こよひはきみも冷やかに

ひとりねよとぞ祈るなる

妬み心

ひとをころせどなほあかぬ
ねたみどころもいまぞしる
垣にからめる薔薇の實も
いくつむしりてすてにけむ

垣にからめる薔薇の實も
いくつむしりて捨てにけむ
ひとを殺せどなほあかぬ
ねたみ心に堪ふる日は

人を殺せどなほ飽かぬ
妬み心を知るときは

山になだるる嵐雪

松をゆするも興ありや

「芥川龍之介全集」に收められた詩はすべて四十三篇。また昭和八年三月、佐藤春夫氏によつて岩波書店から上梓された「澄江堂遺珠」は未完成の詩數篇を遺されたノートからそのまま寫したものである。ここに録した「妬み心」は「老を待たんとする心と妬み心と」による編者の假題である。

「芭蕉雜記」に就て

大地震の年の秋のはじめに、かれは芭蕉のことを書いてゐるが非常に靜かでありよと云つてゐた。妙にかういふ騒然の世に對抗しながら「芭蕉」を讀むやうな、芥川君の氣質でもあつたのである。

蕉村も一茶も、子規ですら、彼の芭蕉を絶讃するに較べられなかつた。一にも芭蕉、二にも芭蕉の發句を擧げてゐて、座右には勝峯晋風氏の定本「芭蕉俳句全集」がいつも置かれてゐて、書物は手ずれでひどく汚れてゐた。「芭蕉雜記」では新しい發見といふものはないが、最後に山師と呼び出したのも、彼らしく芭蕉の何ものかを道破したやうなところがあつた。私はこの山師といふ言葉には反對であつたが、何かその意味が解らないでもなかつた。天下の芭蕉となるまでには、或時期には山師にもならなければならなかつたであらうし、蕉風の宣傳のためにどれだけ戦つたかも知れなかつた。さういふ意味で、俳句を興すことは一つの學業を興すと同じ氣持がその時代にあつたのであらう。

隨筆

芭蕉雜記

一 著書

芭蕉は一卷の書も著はしたことはない。所謂芭蕉の七部集なるものも悉門人の著はしたものである。これは芭蕉自身の言葉によれば、名聞を好まぬ爲だつたらしい。

「曲翠問、發句を取りあつめ、集作ると云へる、此の道の執心なるべきや。翁曰、これ卑しき心より我上手なるを知られんと我を忘れたる名聞より出る事也。」

かう云つたのも一應は尤もである。しかしその次を讀んで見れば、おのづから微笑を禁じ得な

5。
「集とは其風體の句句をえらび、我風體と云ふことを知らするまで也。我俳諧撰集の心なし。

しかしながら貞徳以來其人の風體ありて、宗因まで俳諧を唱來れり、然ども我云所の俳諧は其俳諧にはことなりと云ふことにて、荷兮野水等に後見して『冬の日』『春の日』『あら野』等あり。」

芭蕉の説に従へば、蕉風の集を著すのは名聞を求めぬことであり、芭蕉の集を著すのは名聞を求めることである。然らば如何なる流派にも屬せぬ一人立ちの詩人はどうするのであらう？且又この説に従へば、たとへば齋藤茂吉氏の「アララギ」へ歌を發表するのは名聞を求めぬことであり、「赤光」や「あら玉」を著すのは「これ卑しき心より我上手なるを知られんと……」である！

しかし又芭蕉はかう云つてゐる。——「我俳諧撰集の心なし。」芭蕉の説に従へば、七部集の監修をしたのは名聞を離れた仕業である。しかもそれを好まなかつたと云ふのは何か名聞嫌ひの外にも理由のあつたことと思はなければならぬ。然らばこの「何か」は何だつたであらうか？

芭蕉は大事の俳諧さへ「生涯の道の草」と云つたさうである。すると七部集の監修をするのも「空」と考へはしなかつたであらうか？ 同時に又集を著すのさへ、實は「惡」と考へる前に「空」と考へはしなかつたであらうか？ 寒山は木の葉に詩を題した。が、その木の葉を集めることには餘り熱心でもなかつたやうである。芭蕉もやはり木の葉のやうに、一千餘句の俳諧は流轉に任せたのではなかつたであらうか？ 少くとも芭蕉の心の奥にはいつもさう云ふ心もちの潜んでゐたのではなかつたであらうか？

僕は芭蕉に著書のなかつたのも當然のことと思つてゐる。その上宗匠の生涯には印税の必要もなかつたではないか？

二 装幀

芭蕉は俳書を上梓する上にも、いろいろ註文を持つてゐたらしい。たとへば本文の書きさまにはかう云ふ言葉を洩らしてゐる。

「書やうはいろいろあるべし。唯さわがしからぬ心づかひ有りたし。『猿蓑』能筆なり。されども今少し大なり。作者の名大にていやしく見え侍る。」

又勝峯晋風氏の教へによれば、俳書の装幀も芭蕉以前は華美を好んだのにも關らず、芭蕉以後は簡素の中に寂びを尊んだと云ふことである。芭蕉も今日に生れたとすれば、やはり本文は九ポイントにするとか、表紙の布は木綿にするとか、考案を凝らしたことであらう。或は又ウイリアム・モリスのやうに、ベヘトロン杉風とも相談の上に、Typographyに新意を出したかも知れぬ。

三 自釋

芭蕉は北枝との問答の中に、「我句を人に説くは我類がまちを人に云がごとし」と作品の自釋を却けてゐる。しかしこれは當にならぬ。さう芭蕉も他の門人にはのべつに自釋を試みてゐる。時には大いに苦心したなどと手前味噌さへあげぬことはない。

「鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店。此句、翁曰、心づかひせずと句になるものを、自讃に足らずとたり。又かまくらを生て出でけん初松魚と云ふこそ心の骨折人の知らぬ所なり。又曰猿の齒白し峯の月といふは其角なり。鹽鯛の齒ぐきは我老吟なり。下を魚の店と唯いひたるもおのづから句なりと宣へり。」

まことに「我句を人に説くは我類がまちを人に云がごとし」である。しかし藝術は類がまちほど、何びとにもはつきりわかるものではない。いつも自作に自釋を加へるバアナアド・シヨウの心もちは芭蕉も亦多少は同感だつたであらう。

四 詩人

「俳諧なども生涯の道の草にしてめんどうなものなり」とは芭蕉の惘然に語つた言葉である。

その他俳諧を軽んじた口吻は時時門人に洩らしたらしい。これは人生を大夢と信じた世捨人の芭蕉には寧ろ當然の言葉である。

しかしその「生涯の道の草」に芭蕉ほど真剣になつた人は滅多にゐないのに違ひない。いや、芭蕉の氣の入れたを見れば、「生涯の道の草」などと稱したのはボオズではないかと思ふ位である。

「土芳云、翁曰、學ぶ事は常にあり。席に臨んで文豪と我と間に髪を入れず。思ふこと速に云出て、爰に至てまよふ念なし。文豪引おろせば即反故なりときびしく示さるる詞もあり。或時は大木倒すごとし。鋤本にきりこむ心得、西瓜きることし。梨子くふ口つき、三十六句みなやり句などといろいろにせめられ侍るも、みな巧者の私意を思ひ破らせんの詞なり。」

この芭蕉の言葉の氣ぐみは殆ど劍術でも教へるやうである。到底俳諧を遊戯にした世捨人などの言葉ではない。更に又芭蕉その人の句作に臨んだ態度を見れば、愈情熱に燃え立つてゐる。

「許六云、一とせ江戸にて何がしが歳旦びらきとて翁を招きたることあり、予が宅に四五日逗留の後に侍る。其日雪降て暮にまゐられたり。其俳諧に、

人聲の沖にて何を呼やらん

桃 邨

予其後芭蕉庵へ参とぶらひける時、此句をかたり出し給ふに、予が云、さてさて此曉の一字ありがたき事、あだに聞かんは無念の次第也。動かざること、大山のごとしと申せば師起き上りて曰、此曉の一字聞きとどけ侍りて、愚老が満足かぎりなし。此句はじめは

須磨の鼠の舟きしるおと

と案じける時、前句に曉の字有て、昔の字ならず、依て作りかへたり、須磨の鼠とまでは氣を廻し侍れども、一句連續せざると宣へり。予が云、是須磨の鼠よりはるかにまされり。(中略) 曉の一字つよきこと、たとへ侍るものなしと申せば、師もうれしく思はれけん、これほどに聞てくれる人なし、唯予が口よりいひ出せば、肝をつぶしたる顔のみにて、善惡の差別もなく、蚌の泥に酔たるごとし、其夜此句したる時、一座のものどもに我遅参の罪ありと云へども、此句にて腹を醫せよと自慢せしと宣ひ侍る。」

知己に對する感激、流俗に對する輕蔑、藝術に對する情熱、——詩人たる芭蕉の面目はありありとこの逸話に露はれてゐる。殊に「この句に 腹を醫せよ」と大氣焰を擧げた勢ひには、——

世捨人は少時間はぬ。敬虔なる今日の批評家さへ辟易しなければ幸福である。

「翁凡兆に告て曰、一世のうち秀逸三五あらん人は作者、十句に及ぶ人は名人なり。」

名人さへ一生を消磨した後、十句しか得られぬと云ふことになる、俳諧も亦閑事業ではない。しかも芭蕉の説によれば、つまりは「生涯の道の草」である！

「十一日。朝またまた時雨す。思ひがけなく東武の其角來る。(中略) すぐに病床にまゐりて、皮骨連立したまひたる體を見まゐらせて、且愁ひ、且悦ぶ。師も見やりたまひたるまでにて、ただただ涙ぐみたまふ。(中略)」

鬮とりて菜飯たたかす夜伽かな	木節
皆子なり養蟲寒く鳴きつくす	乙州
うづくまる薬のものと寒さかな	丈艸
吹井より鶴をまねかん初時雨	其角

一一惟然吟聲しければ、師丈艸が句を今一度と望みたまひて、丈艸でかされたり、いつ聞いて

もさびしをり整ひたり、面白し面白しと、しは嘆れし聲もて讃めたまひにけり。」

これは芭蕉の示寂前一日に起つた出来事である。芭蕉の俳諧に執する心は死よりもなほ強かつたらしい。もしあらゆる執着に罪障を見出した謡曲の作者にこの一段を語つたとすれば、芭蕉は必ず行脚の僧に地獄の苦難を訴へる後ジテの役を與へられたであらう。

かう云ふ情熱を世捨人に見るのは矛盾と云へば矛盾である。しかしこれは矛盾にもせよ、たまま芭蕉の天才を物語るものではないであらうか。ゲエテは詩作をしてゐる時には Daemon に憑かれてゐると云つた。芭蕉も亦世捨人になるには餘りに詩魔の醜弄を蒙つてゐたのではないであらうか？ つまり芭蕉の中の詩人は芭蕉の中の世捨人よりも力強かつたのではないであらうか？

僕は世捨人になり了せなかつた芭蕉の矛盾を愛してゐる。同時に又その矛盾の大きかつたことも愛してゐる。さもなければ深草の元政などにも同じやうに敬意を表したかも知れぬ。

五 未來

「翁遷化の年深川を出給ふ時、野坡問て云、俳諧やはり今のごとく作り侍らんや。翁曰、しはらく今の風なるべし。五七年も過なば一變あらんとなり。」

「翁曰、俳諧世に三合は出たり。七合は残たりと申されけり。」

かう云ふ芭蕉の逸話を見ると、如何にも芭蕉は未來の俳諧を歴歴と見透してゐたやうである。又大勢の門人の中には義理にも一變したいと工夫したり、残りの七合を拵へるものは自分の外にないと己惚れたり、いろいろの喜劇も起つたかも知れぬ。しかしこれは「芭蕉自身の明日」を指した言葉であらう。と云ふのはつまり五六年も経れば、芭蕉自身の俳諧は一變化すると云ふ意味であらう。或は又既に公にしたのは僅僅三合の俳諧に過ぎぬ。残りの七合の俳諧は芭蕉自身の胸中に横はつてゐると云ふ意味であらう。すると芭蕉以外の人には五六年は勿論、三百年たつても、一變化することは出来ぬかも知れぬ。七合の俳諧も同じことである。芭蕉は妄に街頭の賣卜先生を眞似る人ではない。けれども絶えず芭蕉自身の進歩を感じてゐたことは確かである。——僕はかう信じて疑つたことはない。

六 俗語

芭蕉はその俳諧の中に屢俗語を用ひてゐる。たとへば下の句に徴するが好い。

洗馬にて

梅雨ばれの私雨や雲ちぎれ

「梅雨ばれ」と云ひ、「私雨」と云ひ、「雲ちぎれ」と云ひ、悉俗語ならぬはない。しかも一句の客情は無限の寂しみに溢れてゐる。(成程かう書いて見ると、不世出の天才を褒め揚げるほど手数のかからぬ仕事はない。殊に何びとも異論を唱へぬ古典的天才を褒め揚げるのは!)かう云ふ例は芭蕉の句中、枚擧に堪へぬと云つても好い。芭蕉のみづから「俳諧の益は俗語を正すなり」と傲語したのも當然のことと云はなければならぬ。「正す」とは文法の教師のやうに語格や假名遣ひを正すのではない。靈活に語感を捉へた上、俗語に魂を與へることである。

「じだらくに居れば涼しき夕かな。宗次。猿みの撰の時、宗次今一句の入集を願ひて數句吟じ侍れど取べき句なし。一夕、翁の側に侍りけるに、いざくつろぎ給へ、我も臥なんと宣ふ。御ゆるし候へ、じだらくに居れば涼しく侍ると申しければ、翁曰、これこそ發句なれとて、今の句に作て入集させ給ひけり。」(小宮豐隆氏はこの逸話に興味のある解釋を加へてゐる。同氏の芭蕉研究に参照するが好い。)

この時使はれた「じだらくに」はもう單純なる俗語ではない。紅毛人の言葉を借りれば、芭蕉の情調のトレモロを如實に表現した詩語である。これを更に云ひ直せば、芭蕉の俗語を用いたの

は俗語たるが故に用ひたのではない。詩語たり得るが故に用ひたのである。すると芭蕉は詩語たり得る限り、漢語たると雅語たるとを問はず、如何なる言葉をも用ひたことは辯ずるを待たぬのに違ひない。實際又芭蕉は俗語のみならず、漢語をも雅語をも正したのである。

佐夜の中山にて

命なりわづかの笠の下涼み

杜牧が早行の残夢、小夜の中山にいたりて忽ち驚く

馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり

芭蕉の語彙はこの通り古今東西に出入してゐる。が、俗語を正したことは最も人目に止まり易い特色だつたのに違ひない。又俗語を正したことに詩人たる芭蕉の大力量も窺はれることは事實である。成程談林の諸俳人は、——いや、伊丹の鬼貫さへ芭蕉よりも一足先に俗語を使つてゐたかも知れぬ。けれども所謂平談俗話に鍊金術を施したのは正に芭蕉の大手柄である。

しかしこの著しい特色は同時に又俳諧に對する誤解を生むことにもなつたらしい。その一つは俳諧を解し易いとした誤解であり、その二つは俳諧を作り易いとした誤解である。俳諧の月並み

に墮したのは、——そんなことは今更辯せずとも好い。月並みの喜劇は「芭蕉雑談」の中に子規居士も既に指摘してゐる。唯芭蕉の使つた俗語の精彩を帯びてゐただけは今日もなほ力説せねばならぬ。さもなければ所謂民衆詩人は不幸なるウォルト・ホイットマンと共に、芭蕉をも彼等の先達の一人に數へ上げることが憚らぬであらう。

七 耳

芭蕉の俳諧を愛する人の耳の穴をあけぬのは残念である。もし「調べ」の美しさに全然無頓着だつたとすれば、芭蕉の俳諧の美しさも殆ど半ばしかのみこめぬであらう。

俳諧は元來歌よりも「調べ」に乏しいものでもある。僅僅十七字の活殺の中に「言葉の音楽」をも傳へることは大力量の人を待たなければならぬ。のみならず「調べ」にのみ執するのは俳諧の本道を失したものである。芭蕉の「調べ」を後にせよと云つたのはこの間の消息を語るものであらう。しかし芭蕉自身の俳諧は滅多に「調べ」を忘れたことはない。いや、時には一句の妙を「調べ」にのみ託したものとさへある。

夏の月御油より出でて赤坂や

これは夏の月を寫す爲に、「御油」「赤坂」等の地名の與へる色彩の感じを用ひたものである。この手段は少しも珍らしいとは云はれぬ。寧ろ多少陳套の譏りを招きかねぬ技巧であらう。しかし耳に與へる効果は如何にも旅人の心らしい、悠悠とした美しさに溢れてゐる。

年の市線香買ひに出でばやな

假に「夏の月」の句をリブレットオよりもスコアアのすぐれてゐる句とするならば、この句の如きは兩者ともに傑出したもの一例である。年の市に線香を買ひに出るのは物寂びたとは云ふものの、懐しい氣もちにも違ひない。その上「出でばやな」とはすみかけた調子は、宛然芭蕉その人の心の小躍りを見るやうである。更に又下の句などを見れば、芭蕉の「調べ」を驅使するのに大自在を極めてゐたことには呆氣にとられてしまふ外はない。

秋ふかき隣は何をする人ぞ

かう云ふ莊重の「調べ」を捉へ得たものは茫茫たる三百年間にたつた芭蕉一人である。芭蕉は子弟を訓へるのに「俳諧は萬葉集の心なり」と云つた。この言葉は少しも大風呂敷ではない。芭蕉の俳諧を愛する人の耳の穴をあけねばならぬ所以である。

八 同上

芭蕉の俳諧の特色の一つは目に訴へる美しさと耳に訴へる美しさとの微妙に融け分つた美しさである。西洋人の言葉を借りれば、言葉の Formal element と Musical element との融合の上に獨特の妙のあることである。これだけは蕪村の大手腕も畢に追隨出来なかつたらしい。下に擧げるのは几董の編した蕪村句集に載つてゐる春雨の句の全部である。

春雨やものかたりゆく蓑と笠
春雨や暮れなんとしてけふもあり
柴漬や沈みもやらで春の雨
春雨やいざよふ月の海半ば
春雨や綱が袂に小提灯

西の京にばけもの船みて久しくあれ果たる家有りけり。
今は其沙汰なくて、

春雨や人住みて煙壁を洩る
物種の袋濡らしつ春の雨
春雨や身にふる頭巾着たりけり
春雨や小磯の小貝濡るるほど
瀧口に灯を呼ぶ聲や春の雨
ぬなは生ふ池の水かさや春の雨
夢中吟
春雨やもの書かぬ身のあはれなる

この蕪村の十二句は目に訴へる美しさを、——殊に大和繪らしい美しさを如何にもものびのびと表はしてゐる。しかし耳に訴へて見ると、どうもさほどのびのびとしない。おまけに十二句を續けさまに讀めば、同じ「調べ」を繰り返した單調さを感じる憾みさへある。が、芭蕉はかう云ふ難所に少しも澁滞を感じてゐない。

春雨や蓬をのばす草の道

赤坂にて

無性さやかき起されし春の雨

僕はこの芭蕉の二句の中に百年の春雨を感じてゐる。「蓬をのばす草の道」の氣品の高いのは云ふを待たぬ。「無性さや」に起り、「かき起されし」とたゆたつた「調べ」にも柔媚に近い懶さを表はしてゐる。所詮蕪村の十二句もこの芭蕉の二句の前には如何とも出来ぬと評する外はない。兎に角芭蕉の藝術的感覚は近代人などと稱するものよりも、數等の洗練を受けてゐたのである。

九 畫

東洋の詩歌は和漢を問はず、屢畫趣を命にしてゐる。エボスに詩を發した西洋人はこの「有聲の畫」の上にも邪道の貼り札をするかも知れぬ。しかし「遙知郡齋夜 凍雪封松竹 時有山僧來 懸燈獨自宿」は宛然たる一幀の南畫である。又「藏並ぶ裏は燕のかよひ道」もおのづから浮世繪の一枚らしい。この畫趣を表はすのに自在の手腕を持つてゐたのもやはり芭蕉の俳諧に見のがされぬ特色の一つである。

涼しさやすぐに野松の枝のなり

夕顔や酔て顔出す窓の穴

山賤のおとがひ閉づる葎かな

第一は純然たる風景畫である。第二は點景人物を加へた風景畫である。第三は純然たる人物畫である。この芭蕉の三様の畫趣はいづれも氣品の低いものではない。殊に「山賤の」は「おとがひ閉づる」に氣味の悪い大きさを表はしてゐる。かう云ふ畫趣を表現することは蕪村さへ數歩を遡らなければならぬ。(度たび引合ひに出されるのは蕪村の爲に氣の毒である。が、これも芭蕉以後の巨匠だつた因果と思はなければならぬ。)のみならず最も蕪村らしい大和畫の趣を表はす時にも、芭蕉はやはり樂樂と蕪村に負けぬ効果を收めてゐる。

粽ゆふ片手にはさむひたひ髪

芭蕉自身はこの句のことを「物語の體」と稱したさうである。

十 衆道

芭蕉もシエクスピイアやミケル・アンジエロのやうに衆道を好んだと云はれてゐる。この談は必しも架空ではない。元祿は井原西鶴の大鑑を生んだ時代である。芭蕉も亦或は時代と共に分桃の契りを愛したかも知れない。現に又「我も昔は衆道好きのひが耳にや」とは若い芭蕉の筆を執つた「貝おほひ」の中の言葉である。その他芭蕉の作品の中には「前髪もまだ若草の勻かな」以下、美少年を歌つたものもない譯ではない。

しかし芭蕉の性慾を倒錯してゐたと考へるのは依然として僕には不可能である。成程芭蕉は明らかに「我も昔は衆道好き」と云つた。が、第一にこの言葉は巧みに諧謔の筆を弄した「貝おほひ」の判詞の一節である。するとこれをものしい告白のやうに取り扱ふのは多少の早計ではないであらうか？ 第二によし又告白だつたにせよ、案外昔の衆道好きは今の衆道好きではなかつたかも知れない。いや、今も衆道好きだつたとすれば、何も特に「昔は」と斷る必要もない筈である。しかも芭蕉は「貝おほひ」を出した寛文十一年の正月にもやつと二十九歳だつたのを思ふと、昔と云ふのも「春の目ざめ」以後數年の間を指してゐるであらう。かう云ふ年頃の Homo-

Sexuality は格別珍らしいことではない。二十世紀に生れた我我さへ、少時の性慾生活をふり返つて見れば、大抵一度は美少年に恍惚とした記憶を蓄へてゐる。況や門人の杜國との間に同性愛のあつたなどと云ふ説は畢竟小説と云ふ外はない。

十一 海彼岸の文學

「或禪僧、詩の事を尋ねられしに、翁曰、詩の事は隱士素堂と云ふもの此道に深きすきものに、人の名を知れるなり。かれ常に云ふ、詩は隱者の詩、風雅にてよろし。」

「正秀問、古今集に空に知られぬ雪ぞ降りける、人に知られぬ花や咲くらん、春に知られぬ花ぞ咲くなる、一集にこの三首を撰す。一集一作者にかやうの事例あるにや。翁曰、貫之の好める言葉と見えたり。かやうの事は今の人の嫌ふべきを、昔は嫌はずと見えたり。もろこしの詩にも左様の例あるにや。いつぞや丈艸の物語に杜子美に専ら其事あり。近き詩人に于鱗とやらんの詩に多く有る事とて、其詩も、聞きつれど忘れたり。」

于鱗は嘉靖七子の一人李攀龍のことであらう。古文辭を唱へた李攀龍の芭蕉の話中に擧げられてゐるのは杜甫に對する芭蕉の尊敬に一道の光明を與へるものである。しかしそれはまづ問はないでも好い。差當り此處に考へたいのは海彼岸の文學に對する芭蕉その人の態度である。是等の

逸話に窺はれる芭蕉には少しも學者らしい面影は見えない。今假に是等の逸話を當代の新聞記事に改めるとすれば、質問を受けた芭蕉の態度はこの位淡泊を極めてゐるのである。――

「某新聞記者の西洋の詩のことを尋ねた時、芭蕉はその記者にかう答へた。――西洋の詩に詳しいのは京都の上田敏である。彼の常に云ふ所によれば、象徴派の詩人の作品は甚だ幽幻を極めてゐる。」

「……芭蕉はかう答へた。……さう云ふことは西洋の詩にもあるのかも知れない。この間森鷗外と話したら、ゲエテにはそれも多いさうである。又近頃の詩人の何とかイツヒの作品にも多い。實はその詩も聞かせて貰つたのだが、生憎すっかり忘れてしまつた。」

これだけでも返答の出来るのは當時の俳人には稀だつたかも知れない。が、兎に角海彼岸の文學に疎かつた事だけは確である。のみならず芭蕉は言詮を絶した藝術上の醍醐味をも嘗めずに徒らに萬卷の書を読んでゐる文人墨客の徒を嫌つてゐたらしい。少くとも學者らしい顔をする者には忽ち痾癢を起したと見え、常に諷刺的天才を示した獨特の皮肉を浴びせかけてゐる。

「山里は萬歳遅し梅の花。翁去來へ此句を贈られし返辭に、この句二義に解すべく候。山里は風寒く梅の盛に萬歳來らん。どちらも遅しと承らん。又山里の梅さへ過ぐるに萬歳殿の來ぬ事よと京なつかしき詠や侍らん。翁此返辭に其事とはなくて、去年の水無月五條あたりを通り候に、

あやしの軒に看板を懸けて、はくらんの妙藥ありと記す。件ふどち可笑しがりて、くわくらん(霍亂)の藥なるべしと嘲笑ひ候まま、それがし答へ候ははくらん(博覽)病が買ひ候はんと申しき。」

これは一門皆學者だつた博覽多識の去來には徳山の棒よりも手痛かつたであらう。(去來は儒醫二道に通じた上、「乾坤辯説」の翻譯さへ出した向井靈蘭を父に持ち、名醫元端や大儒元成を兄弟に持つてゐた人である。)なほ又次手に一言すれば、芭蕉は一面理智の鋭い、惡辣を極めた諷刺家である。「はくらん病が買ひ候はん」も手厳しいには違ひない。が、「東武の會に盆を釋教とせず、嵐雪是を難す。翁曰、盆を釋教とせば正月は神祇なるかとなり。」――かう云ふ逸話も残つてゐる。兎に角芭蕉の口の悪いのには屢門人たちも惱まされたらしい。唯幸ひにこの諷刺家は今を距ること二百年ばかり前に陽加答兒か何かの爲に往生した。さもなければ僕の「芭蕉雜記」なども定めし得意の毒舌の先にさんさん穢弄されたことであらう。

芭蕉の海彼岸の文學に餘り通じてゐなかつたことは上に述べた通りである。では海彼岸の文學に全然冷淡だつたかと云ふと、これは中中冷淡所ではない。寧ろ頗る熱心に海彼岸の文學の表現法などを自家の藥籠中に收めてゐる。たとへば支考の傳へてゐる下の逸話に徴するが好い。

「ある時翁の物がたりに、此ほど白氏文集を見て、老鴛と云、病蠶といへる言葉のおもしろけ

れば、

黄鳥や竹の子藪に老を啼

さみだれや飼鷺煩ふ桑の畑

斯く二句を作り侍りしが、鶯は笱藪といひて老若の餘情もいみじく籠り侍らん。鷺は熟語をしらぬ人は心のはこびをえこそ聞くまじけれ。是は筵の一字を入れて家に飼ひたるさまあらんとなり。」

白樂天の長慶集は「嵯峨日記」にも掲げられた芭蕉の愛讀書の一つである。かう云ふ詩集などの表現法を換骨奪胎することは必しも稀ではなかつたらしい。たとへば芭蕉の俳諧はその動詞の用法に獨特の技巧を弄してゐる。

一聲の江に横たふや時鳥

立石寺（前書略）

閑さや岩にしみ入る、蟬の聲

風來寺に參籠して

木枯に岩吹とがる杉間かな

是等の動詞の用法は海彼岸の文學の字眼から學んだのではないであらうか？ 字眼とは一字の工の爲に一句を穎異ならしめるものである。例へば下に引用する岑參の一聯に徴するがよい。

孤燈燃客夢 寒杵搗鄉愁

けれども學んだと斷言するのは勿論頗る危険である。芭蕉はおのづから海彼岸の詩人と同じ表現法を捉へたかも知れない。しかし下に擧げる一句もやはり暗合に外ならぬであらうか。

鐘消えて花の香は撞く夕べかな

僕の信ずる所によれば、これは明らかに朱飲山の所謂倒裝法を俳諧に用ひたものである。

紅。稻。啄。殘。鸚。鵒。粒。 碧。梧。棲。老。鳳。 風。枝。

上に擧げたのは倒装法を用いた、名高い杜市の一聯である。この一聯を尋常に云ひ下せば、「鸚。鵒。啄。殘。紅。稻。粒。 鳳。棲。老。碧。梧。枝。」と名詞の位置を顛倒しなければならぬ。芭蕉の句も尋常に云ひ下せば、「鐘。搗。いて。花。の。香。消。ゆる。夕。べ。かな。」と動詞の位置の顛倒する筈である。すると一は名詞であり、一は又動詞であるにもせよ、これを俳諧に試みた倒装法と考へるのは必しも獨斷とは稱し難いであらう。

蕉村の海彼岸の文學の學ぶ所の多かつたことは前人も屢云ひ及んでゐる。が、芭蕉のはどう云ふものか餘り考へる人もゐなかつたらしい。(もし一人でもゐたとすれば、この「鐘消えて」の句のことなどはとうの昔に氣づいてゐた筈である。)しかし延寶天和の間の芭蕉は誰でも知つてゐるやうに、「憶老杜、髭風ヲ吹テ暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ」「夜着は重し吳天に雪を見るあらん」以下、多數の海彼岸の文學を竊案した作品を残してゐる。いや、そればかりではない。芭蕉は、「虛栗」(天和三年上梓)の跋の後に「芭蕉洞桃青」と署名してゐる。「芭蕉庵桃青」は必しも海彼岸の文學を聯想せしめる雅號ではない。しかし「芭蕉洞桃青」は「凝烟肌帶綠」ヒニエイジツケンケル 映日暎ハネツヨク 紅」の詩中の趣を具へてゐる。(これは勝峯晋風氏も「芭蕉俳句定本」の年譜の中に「洞の

一字を見落してならぬ」と云つてゐる。)すると芭蕉は——少くとも延寶天和の間の芭蕉は、海彼岸の文學に少なからず心酔してゐたと云はなければならぬ。或は多少の危険さへ冒せば、談林風の鬼窟裡に墮在してゐた芭蕉の天才を開限したものは、海彼岸の文學であるとも云はれるかも知れない。かう云ふ芭蕉の俳諧の中に、海彼岸の文學の痕跡のあるのは、勿論不思議がるには當らない筈である。偶、「芭蕉俳句定本」を讀んでゐるうちに、海彼岸の文學の影響を考へたから、「芭蕉雜記」の後に加へることにした。

附記。芭蕉は夙に伊藤坦庵、田中桐江などの學者に漢學を學んだと傳へられてゐる。しかし芭蕉の蒙つた海彼岸の文學の影響は寧ろ好んで詩を作つた山口素堂に發するのかも知れない。

十二 詩人

蕉風の付け合に關する議論は樋口功氏の「芭蕉研究」に頗る明快に述べられてゐる。尤も僕は樋口氏のやうに、發句は蕉門の龍象を始め蕉村も甚だ芭蕉には劣つてゐなかつたとは信ぜられない。が、芭蕉の付け合の上に古今獨歩の妙のあることはまことに樋口氏の議論の通りである。のみならず元祿の文藝復興の蕉風の付け合に反映してゐたと云ふのは如何にも同感と云はなければならぬ。

芭蕉は少しも時代の外に孤立してゐた詩人ではない。いや、寧ろ時代の中に全精神を投じた詩人である。たまたまその間口の廣さの芭蕉の發句に現れないのはこれも樋口氏の指摘したやうに、發句は唯「わたくし詩歌」を本道とした爲と云はなければならぬ。蕪村はこの金鎖を破り、發句を自他無差別の大千世界へ解放した。「お手打の夫婦なりしを衣更」「負けまじき相撲を寝物語かな」等はこの解放の生んだ作品である。芭蕉は許六の「名將の橋の反見る扇かな」にさへ、「此句は名將の作にして、句主の手柄は少しも無し」と云ふ評語を下した。もし「お手打の夫婦」以下蕪村の作品を見たとするれば、後代の豎子の悪作劇に定めし苦い顔をしたことであらう。勿論蕪村の試みた發句解放の善悪はおのづから問題を異にしなければならぬ。しかし芭蕉の付け合を見ずに、蕪村の小説的構想などを前人未發のやうに賞揚するのは甚だしい片手落ちの批判である。念の爲にもう一度繰り返せば、芭蕉は少しも時代の外に孤立してゐた詩人ではない。最も切實に時代を捉へ、最も大膽に時代を描いた萬葉集以後の詩人である。この事實を知る爲には芭蕉の付け合を一瞥すれば好い。芭蕉は茶漬を愛したなどと云ふのも謔ではないかと思はれるほど、近松を生み、西鶴を生み、更に又師宣を生んだ元祿の人情を曲盡してゐる。殊に戀愛を歌つたものを見れば、其角さへ木強漢に見えぬことはない。況や後代の才人などは空也の瘦せか、乾鮭か、或は腎氣を失つた若隱居かと疑はれる位である。

狩衣を砧の主にうちくれて

わが稚名を君はおぼゆや

路通
芭蕉

宮に召されしうき名はづかし

手枕に細きかひなをさし入て

曾良
芭蕉

殿守がねぶたがりつる朝ぼらけ

兀げたる眉を隠すきぬぎぬ

千里
芭蕉

足駄はかせぬ雨のあけぼの

きぬぎぬやあまりか細くあでやかに

越人
芭蕉

上置の干菜きざむもうはの空

馬に出ぬ日は内で戀する

野坡
芭蕉

やさしき色に咲るなでしこ
よつ折の蒲團に君が丸くねて

嵐蘭
芭蕉

是等の作品を作つた芭蕉は近代の芭蕉崇拜者の芭蕉とは聊か異つた芭蕉である。たとへば「きぬぎぬやあまりか細くあでやかに」は枯淡なる世捨人の作品ではない。菱川の浮世繪に髣髴たる女や若衆の美しさにも鋭い感受性を震はせてゐた、多情なる元祿びとの作品である。「元祿びとの」——僕は敢て「元祿びとの」と言つた。是等の作品の抒情詩的甘露味はかの化政度の通人などの夢寐にも到り得る境地ではない。彼等は年代を數へれば、「わが稚名を君はおぼゆや」と歌つた芭蕉と、僅か百年を隔つるのに過ぎぬ。が、實は千年の昔に「常陸少女を忘れたまふな」と歌つた萬葉集中の女人よりも遙かに縁の遠い俗人だつたではないか？

十三 鬼趣

芭蕉もあらゆる天才のやうに時代の好尚を反映してゐることは上に擧げた通りである。その著しい例の一つは芭蕉の俳諧にある鬼趣であらう。「剪燈新話」を翻案した淺井了意の「御伽婢子」

は寛文六年の上梓である。爾來かう云ふ怪談小説は寛政頃まで流行してゐた。たとへば、西鶴の「大下馬」などもこの流行の生んだ作品である。正保元年に生れた芭蕉は寛文、延寶、天和、貞享を経、元祿七年に長逝した。すると芭蕉の一生は怪談小説の流行の中に終始したものと云はなければならぬ。この爲に芭蕉の俳諧も、——殊にまだ怪談小説に對する一代の興味の新鮮だつた「虚栗」以前の俳諧は時時鬼趣を弄んだ、巧妙な作品を残してゐる。たとへば下の例に徴するが好く。

小夜嵐とぼそ落ちては堂の月

古入道は失せにけり露

信徳
桃青

から尻沈む淵はありけり

小蒲團に大蛇の恨み鱗形

信徳
桃青

氣違を月のさそへば忽に
尾を引ずりて森の下草

桃青
似春

夫は山伏あまの呼び聲
一念の鱧うなぎとなつて七まとひ

信徳
桃青

骨刀かば土器どき鏝かのもろきなり
瘦せたる馬の影に鞭うつ

其角
桃青

山彦嫁をだいてうせけり
忍びふす人は地藏にて明過し

其角
桃青

釜かぶる人は忍びて別るなり
槌を手に抱くまぼろしの君

其角
桃青

今其とかけ金色の玉
袖に入る鱗龍夢かまきりを契りけむ

映水
桃青

是等の作品の或ものは滑稽であるのにも違ひない。が、「瘦せたる馬の影」だの「槌を手に抱く」だの感じは當時の怪談小説よりも寧ろもの凄位である。芭蕉は蕉風を樹立した後、殆ど鬼趣には縁を断つてしまつた。しかし無常の意を寓した作品はたとへ鬼趣ではないにもせよ、常に云ふ可らざる鬼氣を帯びてゐる。

骸骨の畫に

夕風や盆挑灯も糊ばなれ

本間主馬が宅に、骸骨どもの笛、鼓をかまへて能する所を畫きて、
壁に掛けたり（下略）

稻妻やかほのところか薄の穂

續芭蕉雜記

一人

僕は芭蕉の漢語にも新しい命を吹き込んだと書いてゐる。「蟻は六木の足を持つ」と云ふ文章は或は正硬であるかも知れない。しかし芭蕉の俳諧は度たびこの翻譯に近い冒險に功を奏してゐるのである。日本の文藝では少くとも「光は常に西方から來てゐた。」芭蕉も亦やはりこの例に洩れない。芭蕉の俳諧は當代の人々には如何に所謂モダアンだつたであらう。

ひやひやと壁をふまへて晝寐かな

「壁をふまへて」と云ふ成語は漢語から奪つて來たものである。「踏壁眼」と云ふ成語を用ひた漢語は勿論少くないことであらう。僕は室生犀星君と一しよにこの芭蕉の近代的趣味（當代の）

を一世を風靡した所以に數へてゐる。が、詩人芭蕉は又一面には「世渡り」にも長じてゐた。芭蕉の學を摩した諸俳人、——凡兆、丈艸、惟然等はいづれもこの點では芭蕉に若かない。芭蕉は彼等のやうに天才的だつたと共に彼等よりも一層苦勞人だつた。其角、許六、支考等を彼に心服させたものは彼の俳諧の群を抜いてゐたことも決して少くはなかつたのであらう。（世人の所謂「徳望」などは少くとも、彼等を御する上に何の役に立つものではない。）しかし又彼の世渡り上手も、——或は彼の英雄的手腕も巧みに彼等を籠絡した筈である。芭蕉の世故人情に通じてゐたことは彼の談林時代の俳諧を一瞥すれば善い。或は彼の書簡の裏にも東西の門弟を操縦した彼の機鋒は窺はれるのであらう。最後に彼は元祿二年にも——「奥の細道」の旅に登つた時にもかう云ふ句を作る「したたか者」だつた。

夏山に足駄を拜む首途かな

「夏山」と言ひ、「足駄」と言ひ、更に「カドデ」と言つた勢にはこれも亦「したたか者」だつた一茶も顔色はないかも知れない。彼は實に「人」としても文藝的英雄の一人だつた。芭蕉の住した無常觀は芭蕉崇拜者の信するやうに弱々しい感傷主義を含んだものではない。寧ろやぶれか

ぶれの勇に富んだ不俱退轉の一本道である。芭蕉の度たび、俳諧さへ「一生の道の草」と呼んだのは必しも偶然ではなかつたであらう。兎に角彼は後代には勿論、當代にも滅多に理解されなかつた、(崇拜を受けたことはないとは言はない)恐しい糞やけになつた詩人である。

二 傳記

芭蕉の傳記は細部に互れば、未だに判然とはわからないらしい。が、僕は全體だけは下に盡きてゐると信じてゐる。——彼は不義をして伊賀を出奔し、江戸へ来て遊里などへ出入しながら、いつか近代(當代の)大詩人になつた。なほ又念の爲につけ加へれば、文覺さへ恐れさせた西行ほどの肉體的エネルギーのなかつたことは確かであり、やはりわが子を縁から蹴落した西行ほどの神経的エネルギーもなかつたことは確かであらう。芭蕉の傳記もあらゆる傳記のやうに彼の作品を除外すれば格別神秘的でも何でもない。いや、西鶴の「置土産」にある蕩兒の一生と大差ないのである。唯彼は彼の俳諧を、——彼の「一生の道の草」を残した。……

最後に彼を生んだ伊賀の國は「伊賀焼」の陶器を生んだ國だつた。かう云ふ一國の藝術的空氣も封建時代には彼を生ずるのに或は力のあつたことであらう。僕はいつか伊賀の香合に圖々しくも枯淡な芭蕉を感じた。禪坊主は度たび褒める代りに貶す言葉を使ふものである。ああ云ふ心も

ちは芭蕉に對すると、僕等にもあることを感ぜざるを得ない。彼は實に日本の生んだ三百年前の大山師だつた。

三 芭蕉の衣鉢

芭蕉の衣鉢は詩的には丈艸などにも傳はつてゐる。それから、——この世紀の詩人たちにも或は傳はつてゐるかも知れない。が、生活的には伊賀のやうに山の多い信濃の大詩人、一茶に傳はつたばかりだつた。一時代の文明は勿論或詩人の作品を支配してゐる。一茶の作品は芭蕉の作品とその爲にも同じ峯に達してゐない。が、彼等は肚の底ではどちらも「糞やけ道」を通つてゐた。芭蕉の門弟だつた惟然も亦或はかう云ふ一人だつたかも知れない。しかし彼は一茶のやうに圖太い根性を持つてゐなかつた。その代りに一茶よりも可憐だつた。彼の風狂は芝居に見るやうに洒脱とか趣味とか云ふものではない。彼には彼の家族は勿論、彼の命をも賭した風狂である。

秋晴れたあら鬼貫の夕べやな

僕はこの句を惟然の作品中でも決して名句とは思つてゐない。しかし彼の風狂はこの句の中に

も見えると思つてゐる。惟然の風狂を喜ぶものは、——就中輕妙を喜ぶものは何とでも勝手に感服して善い。けれども僕の信する所によれば、そこに僕等を動かすものは畢に芭蕉に及ばなかつた、芭蕉に近い或詩人の慟哭である。若し彼の風狂を「とり亂してゐる」と言ふ批評家でもあれば、僕はこの批評家に敬意を表することを吝まないであらう。

追記。これは「芭蕉雜記」の一部になるものである。

「文藝的な、餘りに文藝的な」「西方の人」「十本の針」に就て

平常の芥川君は他人がお辭儀をしない前に、機嫌よく先立つて、やあ、とか、暫らくとかいふふうにお辭儀をするところの、氣取らない謙遜な人品であつた。併し一たん筆をとると、構へが出て来て、いかにも智慧の都に住んでゐる人らしく、一應壯嚴らしく身構へて了ふのである。それは彼の智識や學業の高さがひとりでさうさせるものらしい。非常な物識りは自分の智識から外に出て、お喋りが出来ない窮屈さがあるものである。そしてそれは芥川君の場合はそのこと自身に面白みも、手重さもあるのである。まだ、三十四五くらゐで頭につめ込んだものが、表にあらはれて來ないといふことは無い筈だ。

「文藝的な、餘りに文藝的な」の一篇も、そしてこれよりも、もつと斷片的なエッセイであるところの「侏儒の言葉」も、悉く彼の身構へと、物識りと、それから、片つ端からかちりかちり

と甲冑を斬りつけるやうな解剖の仕方も、彼のねらひどころなのである。文章の疊み方まで、これをこまかく謂ふならば、もはや數學のやうな確な形式をさへ持つてゐるのである。さういふ次ぎの行に表はれる文章までが見えてくる程、表現の構へが語誦されてくるのである。私などはとても亂次なく書きつづるときでも、彼は一應權威あるもののごとく藝術の殿堂にフロックコートを着込んで、よじ登つて行く男である。

芥川君は「キリスト」的な趣味と、特異な解説をもつことで近代のどの作家にも劣らなかつた文人であつた。それは「きりしとほろ上人傳」や「じゆりあの・吉助」や、「奉教人の死」や「しへる」「おぎん」「おしの」その他、様々な作品に於て、彼及び彼の時代の作家が持つところの「いぶかしく不思議な繪」について解き明さうとしてゐた。そしてまた、彼が晩年の頭にしづかに去來してゐたものも、いまは非常に近寄つて來てゐる「西方の人」の想念であつたのである。

事實、「西方の人」の想念があらためて沁々と考へられるやうに、そのころの苦悶しつゝあつた芥川君の頭を領してゐた。しかも彼は堂々と正面からこれらの問題に打つかり、悠々と例の一應壯嚴な調子で表はして行つたのである。

「十本の針」の皮肉は先づ、「それ等の人々は何ごととも容易に飽くことを知らない、一人の女人や一つの想念や一本の石竹や一きれのパンをいやが上にも得ようとしてゐる。」莫迦々々しい、

面白くもない常規的な生活を卑しき切つてゐる言葉で終始してゐる。死を決した人にとつて何ごとをも肯定でき得ると同時に、何ごととも他愛のないものに見えたであらう、そしてそれは眞實でもあるのである。併乍ら、何人も一本の石竹や一人の女性をまもらねばならない人生に處してゐては、それを、つき破るときは、先づ自分を叩きこはさなければならぬのである。われわれは自分をこはして了つてから、その後に来る仕事を何人が爲しとけるであらうかを考へついたとき、私は芥川君が好んで行つた道の迥かであり幽遠であることだけが眼に見えてくるのである。人間は幽遠を眼の前にしては何ごととも生きることが閉ぢられて終ふのである。

文藝的な、餘りに文藝的な

「話」らしい話のない小説

僕は「話」らしい話のない小説を最上のもとは思つてゐない。従つて「話」らしい話のない小説ばかり書けとも言はない。第一僕の小説も大抵は「話」を持つてゐる。デッサンのない畫は成り立たない。それと丁度同じやうに小説は「話」の上に立つものである。(僕の「話」と云ふ意味は單に「物語」と云ふ意味ではない。) 若し嚴密に云ふとすれば、全然「話」のない所には如何なる小説も成り立たないであらう。従つて僕は「話」のある小説にも勿論尊敬を表するものである。「ダフニとクロオと」の物語以來、あらゆる小説或は敘事詩が「話」の上に立つてゐる以上、誰か「話」のある小説に敬意を表せずにはゐられるであらうか? 「マダム・ボヴァリイ」も「話」を持つてゐる。「戦争と平和」も「話」を持つてゐる。「赤と黒と」も「話」を持つてゐる。……

しかし或小説の價值を定めるものは決して「話」の長短ではない。況や「話」の奇抜であるか奇抜でないかと云ふことは評價の域外にある筈である。(谷崎潤一郎氏は人も知る通り、奇抜な「話」の上に立つた多數の小説の作者である。その又奇抜な「話」の上に立つた同氏の小説の何篇かは恐らくは百代の後にも残るであらう。しかしそれは必しも「話」の奇抜であるかどうかは生命を託してゐる訣ではない。) 更に進んで考へれば、「話」らしい話の有無さへもかう云ふ問題には没交渉である。僕は前にも言つたやうに「話」のない小説を、——或は「話」らしい話のない小説を最上のもとは思つてゐない。しかしかう云ふ小説も存在し得ると思ふのである。

「話」らしい話のない小説は勿論唯身邊雜事を描いただけの小説ではない。それはあらゆる小説中、最も詩に近い小説である。しかも散文詩などと呼ばれるものよりも遙かに小説に近いものである。僕は三度繰り返せば、この「話」のない小説を最上のもとは思つてゐない。が、若し「純粹な」と云ふ點から見れば、——通俗的興味のないと云ふ點から見れば、最も純粹な小説である。もう一度畫を例に引けば、デッサンのない畫は成り立たない。(カンディンスキイの「即興」などと題する數枚の畫は例外である。) しかしデッサンよりも色彩に生命を託した畫は成り立つてゐる。幸ひにも日本へ渡つて來た何枚かのセザンヌの畫は明らかにこの事實を證明するのであらう。僕はかう云ふ畫に近い小説に興味を持つてゐるのである。

ではかう云ふ小説はあるかどうか？ 獨逸の初期自然主義の作家たちはかう云ふ小説に手をつけてゐる。しかし更に近代ではかう云ふ小説の作家としては何びともジュウル・ルナルに若くない。(僕の見聞する限りでは)たとへばルナルの「フィリップ一家の家風」は(岸田國士氏の日本譯「葡萄酒の葡萄酒作り」の中にある)一見未完成かと疑はれる位である。が、實は「善く見る目」と「感じ易い心」とだけに仕上げることの出来る小説である。もう一度セザンヌを例に引けば、セザンヌは我々後代のものへ澤山の未完成の畫を残した。丁度ミケル・アンヂエロが未完成の彫刻を残したやうに。——しかし未完成と呼ばれてゐるセザンヌの畫さへ未完成かどうか多少の疑ひなきを得ない。現にロダンはミケル・アンヂエロの未完成の彫刻に完成の名を與へてゐる！……しかしルナルの小説はミケル・アンヂエロの彫刻は勿論、セザンヌの畫の何枚かのやうに未完成の疑ひのあるものではない。僕は不幸にも寡聞の爲に佛蘭西人はルナルをどう評價してゐるかを知らずにゐる。けれども、わがルナルの仕事の獨創的なものだつたことを十分に認めてゐないらしい。

ではかう云ふ小説は紅毛人以外には書かなかつたか？ 僕は僕等日本人の爲に志賀直哉氏の諸短篇を、——「焚火」以下の諸短篇を數へ上げたいと思つてゐる。

僕はかう云ふ小説は「通俗的興味はない」と言つた。僕の通俗的興味と云ふ意味は事件そのものに對する興味である。僕はけふ往來に立ち、車夫と運轉手との喧嘩を眺めてゐた。のみならず或興味を感じた。この興味は何であらう？ 僕はどう考へて見ても、芝居の喧嘩を見る時の興味と違ふとは考へられない。若し違つてゐるとすれば、芝居の喧嘩は僕の上へ危険を齎さないにも關らず、往來の喧嘩はいつ何時危険を齎すかもわからないことである。僕はかう云ふ興味を興へる文藝を否定するものではない。しかしかう云ふ興味よりも高い興味のあることを信じてゐる。若しこの興味とは何かと言へば、——僕は特に谷崎潤一郎氏にはかう答へたいと思つてゐる。——

「麒麟」の冒頭の數頁は直ちにこの興味を興へる好個の一例となるであらう。

「話」らしい話のない小説は通俗的興味の乏しいものである。が、最も善い意味では決して通俗的興味に乏しくない。(それは唯「通俗的」と云ふ言葉をどう解釋するかと云ふ問題である。)ルナルの書いたフィリップが——詩人の目と心とを透して來たフィリップが僕等に興味を興へるのは一半はその僕等に近い一凡人である爲である。それをも亦通俗的興味と呼ぶことは必しも不當ではないであらう。(尤も僕は僕の議論の力點を「一凡人である」と云ふことには加へたくない。「詩人の目と心とを透して來た一凡人である」と云ふことに加へたいのである。)現に僕はかう云ふ興味の爲に常に文藝に親しんでゐる大勢の人を知つてゐる。僕等は勿論動物園の麒麟に驚歎の聲を吝しむものではない。が、僕等の家にゐる猫にもやはり愛着を感ずるのである。

しかし或論者の言ふやうにセザンヌを畫の破壊者とすれば、ルナアルも亦小説の破壊者である。この意味ではルナアルは暫く問はず、振り香爐の香を帯びたジツドにもせよ、町の匂ひのするフイリツブにもせよ、多少はこの人通りの少ない、陥穽に満ちた道を歩いてゐるのであらう。僕はかう云ふ作家たちの仕事に——アナトール・フランスやパレス以後の作家たちの仕事に興味を持つてゐる。僕の所謂「話」らしい話のない小説はどう云ふ小説を指してゐるか、なぜ又僕はかう云ふ小説に興味を持つてゐるか、——それ等は大体上に書いた數十行の文章に盡きてゐるのであらう。

僕

最後に僕の繰り返したいのは僕も亦今後側目もふらずに「話」らしい話のない小説ばかり作るつもりはないと云ふことである。僕等は誰も皆出ることしかしない。僕の持つてゐる才能はかう云ふ小説を作ることに適してゐるかどうか疑問である。のみならずかう云ふ小説を作ることには決して並み並みの仕事ではない。僕の小説を作るのは小説はあらゆる文藝の形式中、最も包容力に富んでゐる爲に何でもぶちこんでしまはれるからである。若し長詩形の完成した紅毛人の國に生まれてゐたとすれば、僕は或は小説家よりも詩人になつてゐたかも知れない。僕はいろいろの

紅毛人たちに何度も色目を使つて來た。しかし今になつて考へて見ると、最も内心に愛してゐたのは詩人兼ジャアナリストの猶太人——わがハインリツヒ・ハイネだつた。

志賀直哉氏

志賀直哉氏は僕等のうちでも最も純粹な作家——でなければ最も純粹な作家たちの一人である。志賀直哉氏を論ずるのは勿論僕自身に始まつたことではない。僕は生憎多忙の爲に、——と云ふよりは寧ろ無精の爲にそれらの議論を読まずにゐる。従つていつか前人の説を繰り返すことになるかも知れない。しかし又或は前人の説を繰り返すことにもならないかも知れない。……

(一) 志賀直哉氏の作品は何よりも先にこの人生を立派に生きてゐる作家の作品である。立派に？——この人生を立派に生きることには神のやうに生きることであらう。志賀直哉氏も亦地上にゐる神のやうには生きてゐないかも知れない。が、少くとも清潔に、(これは第二の美德である)生きてゐることは確かである。勿論僕の「清潔に」と云ふ意味は石鹼ばかり使つてゐることではない。「道徳的に清潔に」と云ふ意味である。これは或は志賀氏の作品を狭いものにしたやうに見えるかも知れない。が、實は狭いどころか、反つて廣くしてゐるのである。なぜ又廣くしてゐるかと言へば、僕等の精神的な生活は道徳的屬性を加へることにより、その屬性を加へ

ない前よりも廣くならずにはゐないからである。(勿論道德的屬性を加へると云ふ意味も教訓的であると云ふことではない。物質的苦痛を除いた苦痛は大半はこの屬性の生んだものである。谷崎潤一郎氏の悪魔主義がやはりこの屬性から生れてゐることは言ふまでもあるまい。「悪魔は神の二重人格者である。」更に例を求めるとすれば、僕は正宗白鳥氏の作品にさへ屢々論ぜられる厭世主義よりも寧ろ基督的魂の絶望を感じてゐるものである。)この屬性は志賀氏の中に勿論深い根を張つてゐたのであらう。しかし又この屬性を刺戟する上には近代の日本の生んだ道德的天才、——恐らくはこの名に價する唯一の道德的天才たる武者小路實篤氏の影響も決して少くはなかつたであらう。念のためにもう一度繰り返せば、志賀直哉氏はこの人生を清潔に生きてゐる作家である。それは同氏の作品の中にある道德的口氣にも窺はれるであらう。「佐々木の場合」の末段はその著しい一例である。)同時に又同氏の作品の中にある精神的苦痛にも窺はれないことはない。長篇「暗夜行路」を一貫するものは實にこの感じ易い道德的魂の苦痛である。

(二) 志賀直哉氏は描寫の上には空想を頼まないリアリストである。その又リアリズムの細に入つてゐることは少しも前人の後に落ちない。若しこの一點を論ずるとすれば、僕は何の誇張もなしにトルストイよりも細かいと言ひ得るであらう。これは又同氏の作品を時々平板に了らせてゐる。が、この一點に注目するものはかう云ふ作品にも満足するであらう。世人の注目を惹かなかつた、「廿代一面」はかう云ふ作品の一例である。しかしその効果を収めたものは、(例へば小品「鶴沼行」にしても)寫生の妙を極めないものはない。次手に「鶴沼行」のことを書けば、あの作品のディテールは悉く事實に立脚してゐる。が、「丸くふくれた小さな腹には所々に砂がこびりついて居た」と云ふ一行だけは事實ではない。それを讀んだ作中人物の一人は「ああ、ほんたうにあの時には××ちゃんのおなかに砂がついてゐた」と言つた!

(三) しかし描寫上のリアリズムは必ずしも志賀直哉氏に限つたことではない。同氏はこのリアリズムに東洋的傳統の上に立つた詩的精神を流しこんでゐる。同氏のエビゴオネンの及ばないのはこの一點にあると言つても差し支へない。これこそ又僕等に、——少くとも僕に最も及び難い特色である。僕は志賀直哉氏自身もこの一點を意識してゐるかどうかは必しもはつきりとは保證出來ない。(あらゆる藝術的活動を意識の關の中に置いたのは十年前の僕である。)しかしこの一點はたとひ作家自身は意識しないにもせよ、確かに同氏の作品に獨特の色彩を與へるものである。「焚き火」、「眞鶴」等の作品は殆どかう云ふ特色の上に全生命を託したものであらう。それ等の作品は詩歌にも劣らず(勿論この詩歌と云ふ意味は發句をも例外にするのではない。)頗る詩歌的に出來上つてゐる。これは又現世の用語を使へば、「人生的」と呼ばれる作品の一つ、——「憐れな男」にさへ看取出來るであらう。ゴム球のやうに張つた女の乳房に「豊年だ。豊年

だ」を唄ふことは到底詩人以外に出来るものではない。僕は現世の人々がかう云ふ志賀直哉氏の「美しさ」に比較的注意しないことに多少の遺憾を感じてゐる。「美しさ」は極彩色の中にあるばかりではない。同時に又、他の作家たちの美しさにもやはり注意しないことに多少の遺憾を感じてゐる。

(四) 更に又やはり作家たる僕は志賀直哉氏のテクニクにも注意を怠らない一人である。「暗夜行路」の後篇はこの同氏のテクニクの上にも一進歩を遂げてゐるものであらう。が、かう云ふ問題は作家以外の人々には餘り興味のないことかも知れない。僕は唯初期の志賀直哉氏さへ、立派なテクニクの持主だつたことを手短かに示したいと思ふだけである。

——煙管は女持でも昔物で今の男持よりも太く、ガツシリした拵へだつた。吸口の方に玉藻の前が楡扇を翳して居る所が象眼になつてゐる。……彼は其の鮮な細工に暫く見惚れて居た。そして、身長の高い、眼の大きい、鼻の高い、美しいと云ふより總てガリツチな容貌をした女には如何にもこれが似合ひさうに思つた。——

これは「彼と六つ上の女」の結末である。

——代助は花瓶の右手にある組み重ねの書棚の前へ行つて、上に載せた重い寫眞帖を取り上げて、立ちながら、金の留金を外して、一枚二枚と繰り始めたが、中頃まで来てびたりと手を留め

た。代助には二十歳位の女の半身がある。代助は眼を俯せて凝つと女の顔を見詰めてゐた。——

これは「それから」の第一回の結末である。

出門日已遠 不受徒旅欺 骨肉恩豈斷 手中挑青絲 捷下萬仞岡 俯身試寒旗

これは更にすつと古い杜甫の「前出塞」の詩の結末——ではない一首である。が、いづれも眼に訴へる、——言はば一枚の人物畫に近い造形美術的效果により、結末を生かしてゐるのは同じことである。

(五) これは畢竟餘論である。志賀直哉氏の「子を盗む話」は西鶴の「子供地藏」(大下馬)を思はせ易い。が、更に「范の犯罪」はモオパスサンの「ラルティスト」(?)を思はせるであらう。「ラルティスト」の主人公はやはり女の體のまはりへナイフを打ちつける藝人である。「范の犯罪」の主人公は或精神的薄明りの中に見事に女を殺してしまふ。が、「ラルティスト」の主人公は如何に女を殺さうとしても、多年の熟練を積んだ結果、ナイフは女の體に立たずに體のまはりだけに立つのである。しかもこの事實を知つてゐる女は冷然と男を見つめたまま、微笑さへ洩してゐるのである。けれども西鶴の「子供地藏」は勿論、モオパスサンの「ラルティスト」も志賀直哉氏の作品に何の關係も持つてゐない。これは後世の批評家たちに模倣呼ばりをさせぬ爲に特にちよつとつけ加へるのである。

尤も詩人たちの散文は人力にも限りのある以上、大抵彼等の詩と同程度に完成してゐないのを常としてゐる。芭蕉の「奥の細道」もやはり又この例に洩れない。殊に冒頭の一節はあの全篇に漲つた寫生的興味を破つてゐる。第一「月日は百代の過客にして、ゆきかふ年も又旅人なり」と云ふ第一行を見ても、輕みを帯びた後半は前半の重みを受けとめてゐない。(散文にも野心のあつた芭蕉は同時代の西鶴の文章を「淺ましくもなり下れる姿」と評した。これは枯淡を愛した芭蕉には少しも無理のない言葉である。)しかし彼の散文もやはり作家たちの散文にも影響を與へたことは確かである。たとひそれは「俳文」と呼ばれる彼以後の散文を通過して來たにもしろ。

厭世主義

正宗白鳥氏の教へる所によれば、人生はいつも暗澹としてゐる。正宗氏はこの事實を教へる爲に種々雑多の「話」を作つた。(尤も同氏の作品中には「話」らしい話のない小説も少くない。)しかもその「話」を運ぶ爲にも種々雑多のテクニクを用ひてゐる。才人の名はかう云ふ點でも當然正宗氏の上に與へらるべきであらう。しかし僕の言ひたいのは同氏の厭世主義的的人生觀であ

る。

僕も亦正宗氏のやうに如何なる社會組織のもとにあつても、我々人間の苦しみは救ひ難いものと信じてゐる。あの古代のパンの神に似たアナトール・フランスのユウトピア(「白い石の上で」)さへ佛陀の夢みた寂光土ではない。生老病死は哀別離苦と共に必ず僕等を苦しめるであらう。僕は確か去年の秋、ドストエフスキイの子供か孫かの餓死した電報を読んだ時、特にかう思はずにはゐられなかつた。これは勿論コムニスト治下のロシアにあつた話である。しかしアナキストの世界となつても、畢竟我々人間は我々人間であることにより、到底幸福に終始することは出来ない。

けれども「金が仇」とは封建時代以來の名言である。金の爲に起る悲劇や喜劇は社會組織の變化と共に必ず多少は減ずるであらう。いや、僕等の精神的生活も幾分か變化を受ける筈である。若しかう云ふ點を力説すれば、我々人間の將來は或は明るいと言はれるであらう。しかし又金の爲に起らずにゐる悲劇や喜劇もない譯ではない。のみならず金は必しも我々人間を變弄する唯一の力ではないのである。

正宗白鳥氏がプロレタリアの作家たちと立ち場を異にするのは當然である。僕も亦、——僕は或は便宜上のコムニニストか何かに變るかも知れない。が、本質的にはどこまで行つても、畢

竟ジャアナリスト兼詩人である。文藝上の作品もいつかは滅びるのに違ひない。現に僕の耳學問によれば、フランス語のリエゾンさへ失はれつつある以上、ポオドレエルの詩の響もおのづから明日異るであらう。(尤もそんなことはどうなつても我々日本人には差支へない。)しかし一行の詩の生命は僕等の生命よりも長いのである。僕は今日も亦明日のやうに「怠惰なる日の怠惰なる詩人」——一人の夢想家であることを恥としない。

詩的精神

僕は谷崎潤一郎氏に會ひ、僕の駁論を述べた時、「では君の詩的精神とは何を指すのか？」と云ふ質問を受けた。僕の詩的精神とは最も廣い意味の抒情詩である。僕は勿論かう云ふ返事をした。すると谷崎氏は「さう云ふものならば何にでもあるぢやないか？」と言つた。僕はその時も述べた通り、何にでもあることは否定しない。「マダム・ボヴァリイ」も「ハムレット」も「神曲」も「ガリヴァアの旅行記」も悉く詩的精神の産物である。どう云ふ思想も文藝上の作品の中に盛られる以上、必ずこの詩的精神の淨火を通つて來なければならぬ。僕の言ふのはその淨火を如何に燃え立たせるかと云ふことである。それは或は半ば以上、天賦の才能によるものかも知れない。いや、精進の力などは存外効のないものであらう。しかしその淨火の熱の高低は直ちに或

作品の價値の高低を定めるのである。

世界は不朽の傑作にうんざりするほど充滿してゐる。が、或作家の死んだ後、三十年の月日を經ても、なほ僕等の讀むに足る十篇の短篇を残したものは大家と呼んでも差支ない。たとひ五篇を残したとしても、名家の列には入るであらう。最後に三篇を残したとすれば、それでも兎に角一作家である。この一作家になることさへ決して容易に出来るものではない。僕はこれも亦横文字の雑誌に「短篇などは二三日のうちに書いてしまふものである」と云ふウエルズの言葉を發見した。二三日は暫く問はず、締め切り日を前に控へた以上、誰でも一日のうちに書かないものはない。しかしいつも二三日のうちに書いてしまふと斷言するのはウエルズのウエルズたる所以である。従つて彼は碌な短篇を書かない。

文學的未開地

イギリスは久しく閑却してゐた十八世紀の文藝に注目してゐる。それは一つには大戰の後には誰も陽氣なものを求めてゐるからであらう。(僕は私かに世界中同じではないかと思つてゐる。同時に又大戰の爲に打撃を受けない日本さへいつかこの流行に感染してゐるのも不思議なものだと思つてゐる。)しかし又一つには閑却してゐた爲に文學者たちの研究に材料を與へ易い爲もあ

る訣である。雀は米のない流しもとへは來ない。文學者たちも同じことであらう。従つて等閑に附せられることはそれ自身發見されることになる訣である。

これは日本でも同じことである。俳諧寺一茶は暫く間は、天明以後の俳人たちの仕事は殆ど誰にも顧みられてゐない。僕はかう云ふ俳人たちの仕事も次第に顯れて來ることと思つてゐる。しかも「月並み」の一言では到底片づけられない一面も次第に顯れて來ることと思つてゐる。等閑に附せられると云ふことも必ずしも悪いことばかりではない。

夏目先生

僕はいつか夏目先生が風流漱石山人になつてゐるのに驚嘆した。僕の知つてゐた先生は才氣煥發する老人である。のみならず機嫌の悪い時には先輩の諸氏は暫く問はず、後進の僕などは往生だつた。成程天才と云ふものはかう云ふものかと思つたこともないではない。何でも冬に近い木曜日の夜、先生はお客と話しながら、少しも顔をこちらへ向けずに僕に「葉巻をとつてくれ給へと言つた。しかし葉巻がどこにあるかは生憎僕には見當もつかない。僕はやむを得ず「どこにありますか？」と尋ねた。すると先生は何も言はずに猛然と（かう云ふのは少しも誇張ではない。）顔を右へ振つた。僕は怯づ怯づ右を眺め、やつと客間の隅の机の上に葉巻の箱を發見した。

「それから」「門」「行人」「道草」等はいづれもかう云ふ先生の情熱の生んだ作品である。先生は枯淡に住したかつたかも知れない。實際又多少は住してゐたであらう。が、僕の知つてゐる晩年さへ、決して文人などと云ふものではなかつた。まして「明暗」以前にはもつと猛烈だつたのに違ひない。僕は先生のことを考へる度に老辣無双の感を新たにしてゐる。が、一度身の上の相談を持ちこんだ時、先生は胃の具合も善かつたと見え、かう僕に話しかけた。——「何も君に忠告するんぢやないよ。唯僕が君の位置に立つてゐるとすればだね。……」僕は實はこの時には先生に顔を振られた時よりも遙かに參らずにはゐられなかつた。

詩形

お伽噺の王女は城の中に何年も靜かに眠つてゐる。短歌や俳句を除いた日本の詩形もやはりお伽噺の王女と變りはない。萬葉集の長歌は暫らく問はず、催馬樂も、平家物語も、謡曲も、淨瑠璃も韻文である。そこには必ず幾多の詩形が眠つてゐるのに違ひない。唯別行に書いただけでも、謡曲はおのづから今日の詩に近い形を現はすのである。そこには必ず僕等の言葉に必然な韻律のあることであらう。（今日の民謡と稱するものは少くとも大部分は詩形上都々逸と變りはない。）この眠つてゐる王女を見出すだけでも既に興味が多い仕事である。まして王女を目醒ませること

をや。

尤も今日の詩は——更に古風な言葉を使へば、新體詩はおのづからかう云ふ道に歩みを運んでゐるかも知れない。又今日の感情を盛るのに昨日の詩形は役立たないであらう。しかし僕は過去の詩形を必ずしも踏襲しろと言ふのではない。唯それ等の詩形の中に何か命のあるものを感じるのである。同時に又その何かを今よりも意識的に、掴めと言ひたいのである。

僕等は皆どう云ふ點でも烈しい過渡時代に生を享けてゐる。従つて矛盾に矛盾を重ねてゐる。光は——少くとも日本では東よりも西から来るかも知れない。が、過去からも来る訣である。アポリネエルの連作體の詩は元祿時代の連句に近いものである。のみならず數等完成しないものである。この王女を目醒まさせることは勿論誰にも出来ることではない。が、一人のスウィンバアンさへ出れば——と云ふよりも更に大力量の一人の「片歌の道守り」さへ出れば……

日本の過去の詩の中には緑いろのものが何か動いてゐる。何か互に響き合ふものが——僕はその何かを捉へることは勿論、その何かを生かすことも出来ないもの一人であらう。しかしその何かを感じてゐることは必ずしも人後に落ちないつもりである。こんなことは文藝上或は末の末のことかも知れない。唯僕はその何かに——ぼんやりした緑いろの何かに不思議にも心を惹かれるのである。

國木田獨歩

國木田獨歩は才人だつた。彼の上に與へられる「無器用」と云ふ言葉は當つてゐない。獨歩の作品はどれをとつて見ても、決して無器用に出来上つてゐない。「正直者」、「巡查」、「竹の木戸」、「非凡なる凡人」……いづれも器用に出来上つてゐる。若し彼を無器用と云ふならば、フィリツプも亦無器用であらう。

しかし獨歩の「無器用」と云はれたのは全然理由のなかつた訣ではない。彼は所謂戲曲的に發展する話を書かなかつた。のみならず長ながとも書かなかつた。(勿論どちらも出来なかつたのである。)彼の受けた「無器用」の言葉はおのづからそこに生じたのであらう。が、彼の天才は或は彼の天才の一部は實にそこに存してゐた。

獨歩は鋭い頭脳を持つてゐた。同時に又柔かい心臓を持つてゐた。しかもそれ等は獨歩の中に不幸にも調和を失つてゐた。従つて彼は悲劇的だつた。二葉亭四迷や石川啄木も、かう云ふ悲劇中の人物である。尤も二葉亭四迷は彼等よりも柔かい心臓を持つてゐなかつた。(或は彼等よりも逞しい實行力を具へてゐた。)彼の悲劇はその爲に彼等よりもはるかに静かだつた。二葉亭四迷の全生涯は或はこの悲劇的でない悲劇の中にあるかも知れない。……

しかし更に獨歩を見れば、彼は鋭い頭腦の爲に地上を見ずにはゐられないながら、やはり柔かい心臓の爲に天上を見ずにもゐられなかつた。前者は彼の作品の中に「正直者」、「竹の木戸」等の短篇を生じ、後者は「非凡なる凡人」、「少年の悲哀」、「畫の悲しみ」等の短篇を生じた。自然主義者も人道主義者も獨歩を愛したのは偶然ではない。

柔い心臓を持つてゐた獨歩は勿論おのづから詩人だつた。(と云ふ意味は必ずしも詩を書いてゐたと云ふことではない。) しかも島崎藤村氏や田山花袋氏と異なる詩人だつた。大河に近い田山氏の詩は彼の中に求められない。同時に又お花島に似た島崎氏の詩も彼の中には求められない。彼の詩はもつと切迫してゐる。獨歩は彼の詩の一篇の通り、いつも「高峯の雲よ」と呼びかけてゐた。年少時代の獨歩の愛讀書の一つはカアライルの「英雄論」だつたと云ふことである。カアライルの歴史觀も或は彼を動かしたかも知れない。が、更に自然なのはカアライルの詩的精神に觸れたことである。

けれども彼は前にも言つたやうな鋭い頭腦の持ち主だつた。「山林に自由存す」の詩は「武藏野」の小品に變らざるを得ない。「武藏野」はその名前通り、確かに平原に違ひなかつた。しかしまたその雑木林は山々を透かしてゐるのに違ひなかつた。徳富蘆花氏の「自然と人生」は「武藏野」と好對照を示すものであらう。自然を寫生してゐることはどちらも等しいのに違ひない。

が、後者は前者よりも沈痛な色彩を帯びてゐる。のみならず廣いロシアを含んだ東洋的傳統の古色を帯びてゐる。逆説的な運命はこの古色のある爲に「武藏野」を一層新らしくした。(幾多の人びとは獨歩の拓いた「武藏野」の道を歩いて行つたであらう。が、僕の覺えてゐるのは吉江孤雁氏一人だけである。當時の吉江氏の小品集は現世の「本の洪水」の中に姿を失つてしまつたらしい。が、何か梨の花に近い、ナイイヴな美しさに富んだものである。)

獨歩は地上に足をおろした。それから——あらゆる人々のやうに野蠻な人生と向ひ合つた。しかし彼の中の詩人はいつまでたつても詩人だつた。鋭い頭腦は死に瀕した彼に「病牀録」を作らせてゐる。が、かう云ふ彼は一面には「沙漠の雨」(?)と云ふ散文詩を作つてゐた。

若し獨歩の作品中、最も完成したものを擧げるとすれば、「正直者」や「竹の木戸」にとどまるであらう。が、それ等の作品は必しも詩人兼小説家だつた獨歩の全部を示してゐない。僕は最も調和のとれた獨歩を——或は最も幸福だつた獨歩を「鹿狩り」等の小品に見出してゐる。(中村星湖氏の初期の作品はかう云ふ獨歩の作品に近いものだつた。)

自然主義の作家たちは皆精進して歩いて行つた。が、唯一人獨歩だけは時々空中へ舞ひ上つてゐる。……

僕はヒステリーの療法にその患者の思つてゐることを何でも彼でも書かせる——或は言はせると云ふことを聞き、少しも常談を交へずに文藝の誕生はヒステリーにも、負つてゐるかも知れないと思ひ出した。虎頭燕頤の羅漢は暫く問はず、何びとも多少はヒステリックである。殊に詩人たちは餘人よりもはるかにヒステリックな傾向を持つてゐるであらう。このヒステリーは三千年來いつも彼等を苦しめつづけた。彼等の或ものはその爲に死し、又彼等の或ものはその爲にとつてう發狂してしまつたであらう。が、彼等はその爲に彼等の喜びや悲しみを一生懸命にうたひ上げた。——かうも決して考へられないことはない。

若し殉教者や革命家の中に或種のマゾヒストを數へ得られるとすれば、詩人たちの中にもヒステリーの患者は必しも少くはないであらう。「書かすにはゐられぬ心もち」は、即ち樹下の穴の中へ「王様の耳は馬の耳」と叫んだ神話中の人物の心もちである。若しこの心もちがなかつたとしたならば、少くとも「痴人の告白」(ストリントベリイ)などは生まれなかつたのに違ひない。のみならずかう云ふヒステリーは往々一時代を風靡してゐる。「ウエルテル」や「ルネ」を生んだのもやはりこの時代的ヒステリーであらう。更に又全ヨオロッパを擧げて十字軍に加はらせ

たのも、——しかしそれは「文藝的な」問題ではないかも知れない。癲癩は古來「神聖な病」と云ふ名を興へられてゐる。するとヒステリーもことによれば「詩的な病」と呼ばれるであらう。

ヒステリーを起してゐるシエクスピアやゲーテを想像するのは滑稽である。従つてかう云ふ想像をするのは彼等の大を傷けると思はれるかも知れない。が、彼等の大を成すものはこのヒステリーの外にある彼等の表現力そのものである。彼等の何度ヒステリーを起したかは心理學者には或は問題であらう。しかし僕等の問題は表現力そのものに存してゐる。僕はこの文章を作りながら、ふと太古の森の中に烈しいヒステリーを起してゐる無名の詩人を想像した。彼は彼の部落の人々の嘲笑の的になつたであらう。けれどもこのヒステリーの促進した彼の表現力の産物だけは丁度地下の泉のやうに何代も後に流れて行つたであらう。

僕はヒステリーを尊敬してゐるのではない。ヒステリックになつたムツソリニに勿論國際的に危険である。けれども若し何びともヒステリーを起さなかつたとしたらば、僕等を喜ばせる文藝上の作品はどの位數を減じたであらう。僕は唯この爲にヒステリーを辯護したいと思つてゐる。いつか女人の特權になつた、——しかし事實上何びとも多少の可能性のあるヒステリーを。

前世紀の末も文藝的には確かに時代的ヒステリーに陥つてゐた。ストリントベリイは「青い

本」の中にこの時代的ヒステリーに「悪魔の所爲」の名を與へてゐる。悪魔の所爲か善神の所爲かは勿論僕の知る所ではない。しかし兎に角詩人たちはいづれもヒステリーを起してゐた。現にビュルコフの傳記によれば、あの逞しいトルストイさへ半狂亂になつて家出したのは、つい近頃の新聞に出てゐた或女人のヒステリー患者と殆ど寸分も變つてゐない。

古典

「選ばれたる少数」とは必しも最高の美を見ることが出来る少数かどうかは疑はしい。寧ろ或作品に現れた或作者の心もちに觸れることの出来る少数であらう。従つてどう云ふ作品も、——或は又どう云ふ作品の作者も「選ばれたる少数」以外に讀者を得ることの出来るものではない。が、それは「選ばれざる多数の讀者」を得ることと少しも矛盾してゐないのである。僕は「源氏物語」を褒める大勢の人々に遭遇した。が、實際讀んでゐるのは（理解し、享樂してゐるのを問はないにもせよ）僕と交つてゐる小説家の中ではたつた二人、——谷崎潤一郎氏と明石敏夫氏とばかりだつた。すると古典と呼ばれるのは或は五千萬人中滅多に讀まれない作品かも知れない。

しかし萬葉集は源氏物語よりもはるかに大勢に讀まれてゐる。それは必しも萬葉集の源氏物語を抜いてゐる所以ではない。のみならず又兩者の間に散文と韻文と云ふ堀割りの横はつてゐる所

以でもない。單に萬葉集中の作品は一つ一つとり離して見れば、源氏物語よりもすつと短いからである。元來東西の古典のうち、大勢の讀者を持つてゐるものは決して長いものではない。少くとも如何に長いにもせよ、事實上短いものの寄せ集めばかりである。ボオは詩の上にこの事實に依つた彼の原則を主張した。それからビィアス (Ambrose Bierce) は散文の上にもやはりこの事實に依つた彼の原則を主張した。僕等東洋人はかう云ふ點では理智よりも知慧に導かれ、おのづから彼等の先驅をなしてゐる。が、生憎彼等のやうに誰もかう云ふ事實に依つた理智的建築を築いたものはなかつた。若しこの建築を試みるとすれば、長篇源氏物語さへ少くとも聲價を失はない點では丁度善い材料を與へたであらうに。（しかし東西兩洋の差はボオの詩論にも見えないことはない。彼は彼是西行の詩を丁度善い長さで數へてゐる。十七音の發句などは勿論彼には「エビグラムの」の名のもとに排斥されることであらう。）

あらゆる詩人の虚榮心は言明すると否とを問はず、後代に残ることに執してゐる。いや、「あらゆる詩人の虚榮心は」ではない。「彼等の詩を發表した、あらゆる詩人の虚榮心は」である。一行の詩も作らずに彼自身の詩人であることを知つてゐる人々もないことはない。（彼等は大小は暫く問はず、彼等の詩的生涯の上に最も平和だつた詩人たちである。）しかし性格や境遇の爲に兎に角韻文か散文かの詩を作つてしまつた人々だけに詩人の名を與へるとすれば、あらゆる詩

人たちの問題は恐らくは「何を書き加へたか」よりも「何を書き加へなかつたか」にある訣であらう。それは勿論原稿料による詩人たちの生活に不便である。若し不便であるとすれば、——封建時代の詩人、石川六樹園は同時に又宿屋の主人だつた。僕等も賣文と云ふことさへなければ、何か商賣を見つかるかも知れない。僕等の経験や見聞もその爲に或は廣まるであらう。僕は時々賣文だけでは活計を立てることの出来なかつた昔に多少の羨しさを感じてゐる。しかしかう云ふ現世も亦後代には古典を残してゐるであらう。勿論食ふ爲に書いたものも古典にならないと限つた訣ではない。(若し或作家の姿勢として見れば、唯「食ふ爲に書いてゐる」のは最も趣味の善い姿勢である。)唯アナトオル・フランスの言つたやうに後代へ飛んで行く爲には身輕であることを條件としてゐる。すると古典と呼ばれるものは或はどう云ふ人々にも容易に讀み通し易いものかも知れない。

獨創

現世は明治大正の藝術上の總決算をしてゐる。なぜかは僕の知る所ではない。何の爲かも僕には不可解である。しかし現代日本文學全集と云ひ、明治大正文學全集と云ふ文藝上の總決算は勿論、明治大正名作展覽會も亦やはり繪畫上の總決算である。僕はこれ等の總決算を見、如何に獨創と云ふことの困難であるかと云ふことを感じた。古人の精神は嘗めないなどとは誰でも易々と放言し易い。が、彼等の仕事を見ると、(或は仕事を見てもかも知れない。)今更のやうに獨創と云ふことの手輕に出来ないのを感じるのである。

僕等はたとひ意識しないにもせよ、いつか前人の蹤を追つてゐる。僕等の獨創と呼ぶものは僅かに前人の蹤を脱したのに過ぎない。しかもほんの一步位、——いや、一步でも出てゐるとすれば、度たび一時代を震はせるのである。のみならず故意に叛逆すれば、愈前人の蹤を脱することは出来ない。僕は義理にも藝術上の叛逆に賛成したいと思ふ一人である。が、事實上叛逆者は決して珍らしいものではない。或は前人の蹤を追つたものよりも遙かに多いことであらう。彼等は成程叛逆した。しかし何に叛逆するかをはつきりと感じてゐなかつた。大抵彼等の叛逆は前人よりも前人の追従者に對する叛逆である。若し前人を感じてゐたとすれば、——彼等はそれでも反叛したかも知れない。けれどもそこには必然に前人の蹤を残してゐるであらう。傳説學者は海彼岸の傳説の中に多數の日本の傳説のプロトタイプを発見してゐる。藝術も亦穿鑿して見れば、やはり粉本に乏しくない。(僕は前にも言つたやうに必しも作家たちは彼等の粉本を用ひてゐないことを意識してゐなかつたことを信じてゐる。)藝術の進歩——も或は變化も如何に大人物を待つたにもせよ、一足飛びには面目を改めないものである。

しかしこの遅い歩みの中にも多少の變化を試みたものは僕等の尊敬に價してゐる。(菱田春草はこの一人だつた。)新時代の青年たちは獨創の力を信じてゐるであらう。僕はそのいやが上にも信じることを望んでゐる。多少の變化はそこ以外にどこにも生じて來るものではない。昔から世界には前人の造つた大きな花束が一つあつた。その花束へ一本の花を挿し加へるだけでも大事業である。その爲には新らしい花束を造る位の意氣込みも必要であらう。この意氣込みは或は錯覺かも知れない。が、錯覺と笑つてしまへば、古來の藝術的天才たちもやはり錯覺を追つてゐたのであらう。

唯この意氣込みにもはつきりと錯覺を認めるものは不幸である。はつきりと錯覺を認めるものは？——しかし彼等も亦おのづから多少の錯覺を持つてゐるかも知れない。僕はかう云ふ問題には何とも言はれない一人である。けれども明治大正の藝術上の總決算を見、如何に獨創と云ふことの容易に出來ないかを感じずにはゐられなかつた。明治大正名作展覽會を觀た人々はいろいろの畫の可否を論じてゐる。しかし少くとも僕一人は可否を論じてゐる餘裕さへない。

文藝上の極北

文藝上の極北は——或は最も文藝的な文藝は僕等を靜かにするだけである。僕等はそれ等の作品に接した時には恍惚となるより外に仕かたはない。文藝は——或は藝術はそこに恐しい魅力を持つてゐる。若しあらゆる人生の實行的側面を主とするとすれば、どう云ふ藝術も根柢には多少僕等を去勢する力を持つてゐるとも言はれるであらう。

ハイネはゲエテの詩の前に正直に頭を垂れてゐる。が、圓滿具足したゲエテの僕等を行動に驅りやらないことに滿腔の不平を洩らしてゐる。これは單にハイネの氣もちと手輕に見て通ることの出來るものではない。ハイネはこの「ドイツ・ロマン主義運動」の一節の中に藝術の母胎へ肉迫してゐる。あらゆる藝術は藝術的になるほど、僕等の情熱(實行的な)を靜まらせてしまふ。この力の支配を受けたが最後、容易にマルスの子になることは出來ない。そこに安住出來るものは——純一無雜の藝術家たちは勿論、阿呆たちもやはり幸福である。しかしハイネは不幸にもかう云ふ寂光土を得られなかつた。

續文藝的な、餘りに文藝的な

時代

僕は時々かう考へてゐる。——僕の書いた文章はたとひ僕が生まれなかつたにしても、誰かきつと書いたに違ひない。従つて僕自身の作品よりも寧ろ一時代の土の上に生えた何本かの艸の本である。すると僕自身の自慢にはならない。(現に彼等は彼等を待たなければ、書かれなかつた作品を書いてゐる。勿論そこに一時代は影を落してゐるにしても。)僕はかう考へる度に必ず妙にがっかりしてしまふ。

アナトオル・フランス

Nicolas Segur の「アナトオル・フランスの對話」によれば、この微笑した懷疑主義者は實に徹底した厭世主義者である。かう云ふ一面は Paul Gsell の「アナトオル・フランスとの對話」(?)にも現はれてゐない。彼は「あなたの作中人物は皆微笑してゐるではないか?」といふ問

に對し、野蠻にもかう返事をしてゐる。——「彼等は憐憫の爲に微笑してゐる。それは文藝上の技巧に過ぎない。」

このアナトオル・フランスの説によれば人生は唯意志する力と行爲する力との上に安定してゐる。しかも我々は意志する爲には一點に目を注がなければならぬ。それは何びとも出来ることではない。殊に理智と感受性との呪ひを受けた我々には。

「エビキュウルの園」の思想家、ドレフイユ事件のチャンピオン、「ベングインの島」の作家だつた彼もここでは面目を新たにしてゐる。尤も唯物主義的に解釋すれば、彼の類縁や病なども或は彼の人生觀を暗いものにしてゐたかも知れない。しかしこれは彼の作品中、比較的等閑に附せられたものを、——或は事實上出來の悪いものを(たとへば「赤い卵」の如き)彼の一生の文藝的體系に結びつける綱を與へてゐる。病的な「赤い卵」なども彼には必然な作品だつたのであらう。僕はこの對話や書簡集から更に新らしい「アナトオル・フランス論」の書かれることを信じてゐる。

このアナトオル・フランスは十字架を背負つた牧羊神である。尤も新時代は彼の中に唯前世紀から今世紀に渡る橋を見出すばかりかも知れない。が、世紀末に人となつた僕はやはりかう云ふ彼の中に有史以來の僕等を見出してゐる。

ピカソはいつも城を攻めてゐる。ジアン・ダクでなければ破れない城を。彼は或はこの城の破れないことを知つてゐるかも知れない。が、ひとり石火矢の下に剛情にもひとり城を攻めてゐる。かう云ふピカソを去つてマテイスを見る時、何か氣易さを感じるのは必しも僕一人ではあるまい。マテイスは海にヨットを走らせてゐる。武器の音や煙硝の匂はそこからは少しも起つて來ない。唯桃色に白の縞のある三角の帆だけ風を孕んでゐる。僕は偶然この二人の畫を見、ピカソに同情を感じると同時にマテイスには親しみや羨ましさを感じた。マテイスは僕等素人の目にもリアリズムに叩きこんだ腕を持つてゐる。その又リアリズムに叩きこんだ腕はマテイスの畫に精彩を興へてゐるものの、時々畫面の裝飾的效果に多少の破綻を生じてゐるかも知れない。若しどちらをとるかと言へば、僕のとりたいのはピカソである。兜の毛は炎に焼け、槍の柄は折れたピカソである。……

「文藝的な、餘りに文藝的な」は昭和二年二月から七月までに書かれ、その内容は四十項目。「續文藝的な、餘りに文藝的な」は昭和二年五月に物したもので十項目。兩者を併せて芥川龍之介の文化並びに文學に關する思想・見解を綜合してゐる。それは文學評論であるとともに文明批評でもある。

侏儒の言葉

「侏儒の言葉」の序

「侏儒の言葉」は必しもわたしの思想を傳へるものではない。唯わたしの思想の變化を時々窺はせるのに過ぎぬものである。一本の草よりも一すぢの蔓草、——しかもその蔓草は幾すぢも蔓を伸ばしてゐるかも知れない。

侏儒の祈り

わたしはこの綵衣を纏ひ、この筋斗の戲を獻じ、この太平を楽しんでゐれば不足のない侏儒でございませう。どうかわたしの願ひをおこなへ下さいませう。

どうか一粒の米すらない程、貧乏にして下さいますな。どうか又熊掌にさへ飽き足りる程、富裕にもして下さいませう。

どうか採桑の農婦すら嫌ふやうにして下さいますな。どうか又後宮の麗人さへ愛するやうにもして下さいますな。

どうか菽麥すら辨ぜぬ程、愚昧にして下さいますな。どうか又雲氣さへ察する程、聰明にもして下さいますな。

とりわけどうか勇ましい英雄にして下さいますな。わたしは現に時とすると、身ぢ難い峯の頂を窮め、越え難い海の浪を渡り——云はば不可能を可能にする夢を見ることがございます。さう云ふ夢を見てゐる時程、空恐しいことはございません。わたしは龍と闘ふやうに、この夢と闘ふのに苦しんで居ります。どうか英雄とならぬやうに——英雄の志を起さぬやうに力のないわたしをお守り下さいまし。

わたしはこの春酒に酔ひ、この金鏤の歌を誦し、この好日を喜んでゐれば不足のない侏儒でございます。

創作

藝術家は何時も意識的に彼の作品を作るのかも知れない。しかし作品そのものを見れば、作品の美醜の一半は藝術家の意識を超越した神祕の世界に存してゐる。一半？ 或は大半と云つても

好い。

我我は妙に問ふに落ちず、語るに落ちるものである。我我の魂はおのづから作品に露ること免れない。一刀一拜した古人の用意はこの無意識の境に對する畏怖を語つてはゐないであらうか？

創作は常に冒険である。所詮は人力を盡した後、天命に委かせるより仕方はない。

少時學語苦難圓 唯道工夫半未全

到老始知非力取 三分人事七分天

趙甌北の「論詩」の七絶はこの間の消息を傳へたものであらう。藝術は妙に底の知れない凄みを帯びてゐるものである。我我も金を欲しがらなければ、又名聞を好まなければ、最後に殆ど病的な創作熱に苦しまなければ、この無氣味な藝術などと格闘する勇氣は起らなかつたかも知れない。